

II 資料

II 資料

1. 海外研究動向調査
2. RAによる研究動向調査報告書
3. 平成27年度共同研究募集要項
4. みんなく若手研究者奨励セミナー
5. 文献図書資料整備状況
6. 民族学研究アーカイブズの整理作業進捗状況
7. 学術潮流サロン
8. 人間文化研究機構連携研究
9. 平成26年度科学研究費補助金課題一覧
10. 機関研究プロジェクト
11. 研究成果公開プログラム
12. 公開講演会
13. 学術情報リポジトリ

資料 1. 海外研究動向調査

○オーストラリアの日本研究の動向

オーストラリアにおける日本研究は、1960年代以降日豪関係の緊密化を背景に急速に発展した。1978年にはオーストラリア日本研究学会（JSAA）が発足し、学際的な学会誌『Japanese Studies』も1981年に刊行された。2000年～2008年の同学会誌に掲載された144篇の論文からその研究動向を分析した池田俊一氏によれば、近代史、近代文学、言語学、国際関係論がその主たる研究領域であるが（池田 2009）、沖縄研究に関しても一定量の蓄積があることがみてとれる。それらオーストラリアにおける日本研究の先鞭をつけたのは、オーストラリア国立大学の *Tessa Morris-Suzuki* 氏（思想史）や *Gavan McCormack* 氏（政治学）やであろう。だが、彼ら及びその次世代の若手研究者が日本（や沖縄）をどうまなざし、どのような研究対象を選び、それに対してどうアプローチしているのか、あるいはその際の人類学のプレゼンスの高低等は定かではない。

そこで、日本研究所を有するオーストラリア国立大学（ANU）を訪ね、最近の日本研究の動向を明らかにした。具体的には、同校で開催されたシンポジウムに参加した他、日本研究に従事する Phd.candidate にインタビューを行った。また、ジェームスクック大学に所属し、沖縄や日本をフィールドに人類学的研究を行っている Matthew Allen 氏を訪ねインタビューを行った。調査期間は2015年3月1日～3月16日である。

1 ANUにおける Japan Institute 及び日本研究の位置づけ

ANUでは、2013年に日本研究所 Japan Institute(以下、JI) が組織化された。JIは教養、経済、環境、健康、歴史、国際関係、言語、法律、言語学、政治、法規等の領域で日本を研究対象とし、またその教育に従事している日本研究者のオーストラリア最大のネットワークである。HP上には、その使命として「オーストラリアの国立大学の一機関として国家資源になること。」すなわち、「学校、大学、公共機関、政府と民間部門の間で日本をめぐる知識を強化することで公共政策に貢献し、アジアの世紀において日豪の関係を促進すること。（<http://japaninstitute.anu.edu.au/>）」が掲げられている。

JIのネットワークには ANU 内の 7カ所の研究所や学部その他、学外の Australian Network for Japanese Law (ANJEL) や The Australian Research Network on the Japanese Economy (ARNJE) も加わっている。ただし、JIは建物も事務所も持っていない。

JI組織化の背景として、組織化すれば資金援助を受け日本研究を活発化できるのではないかという日本研究者の思惑があり、College of Asia and the Pacific から5年間のローンで貸借金を得たという。初代 director には経済学者の *Jemny Corbet* が着任したが、彼が副学長に就任したこともあり、その後の資金集めの方途は絶たれ、JIは依然として予算的に厳しい状況にある¹。

¹ 対して、中国研究所 (China Institute) は、ANU 修了生のケビン・ラッドの首相就任時に50万ドルの潤沢な資金援助を政府から受け、立派な建物が建設された。中国政府側は世界各地の大学に孔子学院を設立していた動向にアンチテーゼを唱える ANU の教員が奮闘した結果であるという裏の事情があるという。また、韓国研究所 (Korean Institute) は日本の国際基金に該当する団体から資金援助を受けており、

研究所の現在の代表は 3 代目で近代史・戦後市民社会論を専門とする Dr Simon Avenell(College of Asia and the Pacific, ARC Future Fellow)である。その他、テッサ・モーリス＝スズキ、池田俊一をはじめとする 5 名の教員が director となっているが、人類学・社会学の教員は不在である²。

JI の具体的なプロジェクトとして、「Japan Update」と称する経済・政治・流通に関するパネルセッションを開催する他、年間テーマを設定し、それに沿った多数のシンポジウム、フォーラム、講演会等を各教員の科研費を用いる形で主催している。一例として、2012 年には、原発等の環境・エネルギーを主題としたテーマが設定された³。政府のお抱え研究所的位置づけの Crawford School of Public Policy との差異化という裏の意もあるようで、JI が自律的組織としてのプライドを持っていることがわかる。

過去には大学院生対象のサマースクール Japanese Studies Graduate Summer School (JSGSS) ⁴も主催したが、国際交流基金の予算が削減され、現在は College of Asian&Pacific のセミナーに吸収合併されている。

JI ではメーリングリストを発行しており、その登録者は 100 名を越え ANU だけで 50 名を占めている (うち 30 名は院生)。

以上のように、学内の日本研究に関係する組織をネットワーク化する試みは始まったばかりだが、特に資金面で課題を抱えている現状にある。また、日本研究に従事する組織がネットワーク化した現在にあっても、College of Arts and science (人類学・社会学を含む人文学) と College of Asian&Pacific (地域研究) との繋がりや薄く、院生は discipline とエリアスタディーズの相違を感じるという。

2 ANU で日本研究に従事する Phd Candidate の研究生活

沖縄基地問題の研究者である高橋進之介氏 (College of Asian&Pacific 所属)、社会学の視点で鉄道のカスタマーサービスの研究をしている根岸海馬氏 (College of Arts and social science 所属) に話を伺った。両者とも Phd candidate である。

Phd candidate に関して College of Arts and social science に所属する人は学内からの進学者が多勢を占め外部からの入学者は 2, 3 名であるのに対し、College of Asian&Pacific では外部からの人が多くリタイアした人もいる。JI が把握している日本研究に従事している Phd candidate は 27 名であり、うち 11 名が日本人である。日本研究者が多い分野は、歴史学、言語学、国際関係論であり、そのうち長期フィールドワークを要する研究テーマを設定している者はそう多くない。

建物は存在し、ニュースレターも発行している。

² 他方で、JI 組織化時 ANU の女性教授 6 名が加わっていたそのジェンダー比率の高さは特筆に値する。

³ テーマのタイトルは下記の通り。Public Information in Nuclear Disaster Response: the Need To Know (2012)

⁴ 2013 年まで国際交流基金が 100 万円以上の予算を提供する形で、日本研究に従事する大学院生のサマースクールが開催されていた (旅費半分と宿泊費は ANU 負担)。学会発表前の研鑽を積む場とし日本以外からも約 30 名の院生が集っていたが、今年から予算が付かなくなった。結果的に同セミナーは有職者が集う College of Asian&Pacific のセミナーに吸収されたことで、これまでのサマースクールの趣旨からは大幅にずれるものとなった。

表1 Japan Institute に登録している Phd Candidate の所属と研究テーマ

分野	所属	研究テーマ	
Art&Music	Research School of Humanities and the Arts	Bonsai and the Aestheticisation of Nature: a cross-cultural critique of Japanese and Western approaches to nature and art	
	School of Music	Liturgical Music in a New Japanese Religion: Formation, Survival and Repositioning of Tenrikyō through music	
		Ogasawara Musical Culture in Contexts of Place, Memory and Identity	
Economics	Crawford School of Public Policy	Essays in Banking and Finance	
		The link between financial markets and real investment in Japan	
History	School of Culture, History & Languages	Tatsukawa Bunko, Sarutobi Sasuke and Taisho Period Ethics	
		Postwar Migration from Okinawa to Bolivia	
		Performing the "Sacred Trust" - A Comparative Study of Japan and Australia's Experience with the League of Nations Mandates System	
		Sub-imperialism of the Japanese government: general of Korea, 1910-1931	
		Okinawan Critical Thought in Regional Context	
		Propaganda and ideology construction of Manchukuo, through the Case of Manchuria Concordia Society	
Linguistics & language learnings	School of Culture, History & Languages	Women's Poetry of the early Showa Japan: artistic and stylistic challenges of the doubly marginalized poet, Sagawa Chika	
		Pragmatics of quotation markers in Korean and Japanese	
		Alternative teaching order for Japanese as a second language: Introducing the informal as a base level prior to the masu/desu style	
		A study of refusals and apologies among learners of Japanese language	
		Personal reference terms in Japanese	
	Politics, security & international relations	Crawford School of Public Policy	The influence of domestic politics on Japanese foreign policy
		National Security College	China in Japan's Security
School of International,		Japanese Working Holiday Makers in Australia	

	Political and Strategic Studies	
		The Dynamics of Contention in Japan and South Korea's 'History Problems'
		Sino-Japanese relations in the context of security in the Asian region
	School of Regulation, Justice & Diplomacy	Transnational organised crime and human trafficking between Japan and the Philippines
Science & medicine	Center for the Public Awareness of Science	A qualitative enquiry into practitioners' reflection on science communication in Japan
	School of Culture, History & Languages	The role of medical interpreters as a mediator of global and local health norms: The case of Japan
Directors & executive	School of Archaeology and Anthropology	An ethnography of Japanese retirement migration to Malaysia
Society, culture & literature	School of Culture, History & Languages	The Chinese Community in Tokyo
		Music in Kamigata Rakugo

(<http://japaninstitute.anu.edu.au/phd-students> を参考に加賀谷作成)

実証的日本研究に従事する院生の少なさ、及び日本人留学生の少なさに関しては、奨学金や研究費の仕組みが大きく関係している。まず、人文・社会科学の博士課程の院生の奨学金に関して、2000年以降 ANU では毎年全ての国（同窓会）に1つだけ奨学金の枠を与え、毎年1名の院生が同窓会経由で奨学金を得ていた。だが、2013年を最後に大学の財政事情でそれがカットされたため、新規で日本から留学できない状況にある。留学生の学費は高額で、人文・社会科学系の博士課程で年間12000ドル程度要するためである。大学側は、同窓会が独自で会費を貯めて自分達で奨学金制度を復活させよとの見解だとのこと。それゆえ、学内の日本人は主に交換留学生（学部生）が主で23名、大学院生は15名前後である（特に修士課程の奨学金制度は皆無に等しい）。大学全体の奨学金（IPS）で留学している人もいるが、その人数は僅かであり、確実に日本人の留学生は減少している。

院生は年間6000ドルが研究費として大学から支給されるが（申請方式）、基本的には身銭を切って調査している状況にある。指導者の獲得資金に基づいて調査を行う、RAとして給与を得る、チューターとして教壇に立つなどして生活を送っているが、これらの研究費で日本で調査するとなると、やはり日本人であることが利点となる。学振に匹敵する制度は国内にはないことの影響も大きい。さらには、こうした経済的事情から院生が加入する学会の数も少ない。例えば JSAA の場合、参加費&年会費350ドル、懇親会費100ドルに加えて、交通費が必要となる。

ただし、国内の超優秀な学部生・院生に対する支援制度は充実している。学部生は通常3年で学士を取得できるが、3年間を破格の優秀な成績で修了した場合、その後1年 Honours year（優等学位年）に進むことができる。入学時およそ300人の学部生は3年次に50名になるが、オナーズに進めるのはそのうち5名程度である。オナーズでは、修士課程同様

に論文を書くが、それを無事修了すると博士課程に直接進学し、かつ奨学金を得ることができる⁵。なお、根岸氏は高校生の時から単身留学しており、オナーズ進学者でもある。

博士論文提出までのプロセスに関して、フィールドに行く前と帰国後を含む 3 回のプレゼンが要請されるが、日本のように学会誌への投稿論文の本数は要求されない。フィールドワークはたいてい 1 年間だが、文献調査だけ行う人は 4 ヶ月の場合もある。博士課程修了後、多くの院生は日本に戻る。国内の大学の数は 39 で、そのうち専門のポストがあるのが 3 分の 2 だとしても、欠員が出ないためである。日本語教育のポストはかろうじてあるため、生活のためにそのポストで職を得る者は少なくない。

3 ANU における日本語学の人気

学生の日本語や日本語研究熱は依然として高い。確かに中国語は漸増し、昨年初めて中国語の学生が日本語の学生を上回ったが、今年はまだ逆転したように日本語の需要が減っている訳ではない。それは、初等教育にて日本語教育が盛んであるためである。日本語学科は全学年で 400 名だが、最も人数が多いのが 2 年生で、他校から転学し 2 年時からスタートする者が多いためである。ANU では小学校以来 9 年間日本語を学んできた学生には、初級・中級クラスはとらせないなど、少人数の高度な教育が学生の間でも評価を得ている。

4 人類学者として日本研究で学位を取得した田村恵子氏へのインタビュー

現在、客員研究員である田村恵子氏によれば、ANU で人類学者として日本研究で博士の学位を取得した者は自分を除き他にいないという。それは、ANU の人類学がアジア（特に日本）を研究対象にしてこなかったことの影響が大きく、あくまでも太平洋研究の拠点として発展してしまったことによるという。

田村氏は、人類学の修士課程在学時にアボリジニー研究に従事し、博士課程在学時には日本人の戦争花嫁について論文をまとめ、2000 年に学位を取得された。自身がオーストラリア人の男性と結婚し、オーストラリアに移住したこともあり、日本とオーストラリアの間を動き、オーストラリアに同化していく女性の存在とその語りに関心を持ったという。また、日本人女性の事例をオーストラリアの移民史の中に位置づけることを試みた。

テーマ設定には時代も大きく影響しており、ちょうど村山談話の後「豪日研究プロジェクト」が開始され、国内で戦争期の兵士の体験に関心が寄せられるようになった頃であった。田村氏も博論執筆の傍ら豪日研究プロジェクトの研究員となり、太平洋戦争の資料整理を行い、戦争関連の文献を中心としたデータベースの構築や日本語による戦史の紹介を作成し、95 年に HP 上でそれを公開した⁶。同プロジェクトの中心になったのは ANU のハンク・ネルソン教授で、オーストラリアの戦争捕虜の歴史を明らかにし、オーラルヒストリーの収集を行った。このプロジェクトの最大の成果は、オーストラリアにとっては対日戦争であったものの、日本にとっては対米戦争であったことなど、戦争そのものの見方や記憶の仕方に対する相違を浮き彫りにした点にある。そうした大きな歴史的うねりの中に田村氏の研究は位置づけられ、人類学の比較の視点がそうしたプロジェクトで大いに役立ったという。

2002 年には 20 世紀初頭に神戸に住んだイギリス人がその時代をどう生きたかという研

⁵ 民間企業に勤めた場合にもオナーズ修了者は初任給が通常の 1.5~2 倍になるという。

⁶ http://ajrp.awm.gov.au/ajrp/ajrp2.nsf/Web-Pages/HomePage_J?OpenDocument

究を National Library of Australia に所蔵されている Harold Williams Collection を利用して行った。現在、日本の科研では二つの研究に携わっており、一つは戦後の南洋真珠の養殖の歴史、いま一つはカウラの戦争墓地の研究である。カウラは捕虜収容所があった土地で、250名の捕虜が脱走を試みて死亡した事件があった。その捕虜と強制抑留の民間人が墓地に埋葬されたが、日本政府が海外に墓地を造ったのはカウラだけで、遺骨を日本に移送しなかった。田村氏はそうした戦争中の政府による捕虜の扱いを研究しているが、こうした研究が可能になりつつあるのは、ABC放送が捕虜の体験のインタビューを放映したように、国内で歴史への見方に変化が生じているためである。

5 ANUにおける日本（東アジア）関連シンポジウムの概要

3月4日から6日まで ARC Laureate Project と ANU College of Asia & the Pacific の主催による「Survival Politics in East Asia : Socio-Environmental Crisis and Grassroots Responses」と題したカンファレンスが開催された。趣旨は、(チベットやモンゴルを含む)東南アジアにおける社会—環境的危機に立ち向かう草の根集団とローカルなコミュニティによる下からの戦略を明らかにすることであり、6つのキーノートスピーチと4つのパネルで構成され、主に海外から招聘された研究者を中心に発表者は16人に及んだ。

また、3月9日、10日にも「Grassroots Regionalization and the Frontiers of the Humanities in East Asia」と題したカンファレンスが開催された。主催は Korea Institute と ANU College of Asia & the Pacific で、Korea Institute と Academy of Korean Studies がスポンサーである。10名の研究者が日本、韓国、オーストラリア国内から招聘され、発表した。

両方のカンファレンスに参加したものの、後者はかなり思想的に左寄りであり理論的枠組みをつかめなかったため⁷、以下では前半のカンファレンスの発表内容に絞り、日本に関連した5つの発表を取り上げる。

アデレード大学の米村正子氏の「Animism: A grassroots Response to Socio Environmental Crisis in Contemporary Japan」では、水俣病と3.11という社会—環境的悲劇が生じた際に、草の根レベルの反応としてアニミズムの高まりが見られることが指摘された。水俣においては、特に漁師である緒方正人によるいのちの世界の認識や石牟礼道子の業績にアニミズムが見られること。3.11の後も、アニミズムとしての文化遺産の再評価が見られるとして、鹿踊りの復興や仏塔の再建、84の神社の再建が挙げられ、それらがいかに被災地の住民に土地との結びつきの感覚をもたらしているかが指摘された。アニミズムは西洋の社会科学の知に対置される概念であり、日本ではそれが政治的含意を持っていることが強調された。

ANUのテッサ・モーリス＝スズキ氏の「Living Politics: Rethinking the Political From Ashio to Fukushima」は、政治の難局に風穴を開ける近代日本のインフォーマルな政治の形式として、足尾銅山をめぐる谷中住民の対応を考えるものであった。1907年に政府は公害被害を軽減するため、谷中村を遊水池にする方法を選び、住民に貯水池建設と移住（廃村）を要請したが、16世帯が移住に反対し村に住まい続けた。谷中住民の lived politics ⁸

⁷ 例えば、安重根がいかに日本で歪められて報道されてきたかが力説されたり、北朝鮮からの脱国者がいかに海外や韓国で虐げられているかが報告された。

⁸ 組織化された抵抗（対抗）運動という意味で用いられている。

は、日常の農業を遂行する中で行われ、彼らは日々の生活の中で汚染の被害を記録し図式化し、政府と鉱山の情報隠蔽工作に対峙するためにその結果を公表した。さらに、戦後の自律的活動の一例として、1940年代後半の名古屋の佐久中央病院の地域医療の歴史が紹介された。戦後帰還兵が多く医療物資が不足する中、佐久中央病院は病院を政府の支配下に置く提案を断った。「農民と共に」というスローガンは、実際に農村コミュニティに支えられ、1949年に火災の被害に遭ったときも地元の農民たちが中心に再建のための資金集めに奔走した。病院側も手術に親族を立ち合わせる、患者の自助組織に協力するなど当時の病院としては画期的な活動をした。このように、病院のスタッフ、患者そして地域住民は、病院とコミュニティを統合し社会医療という視座を発展させ、病院のイメージを大きく変えた。1960年代までに佐久の事例は社会医療の創造的モデルとしてアジアに拡がり、現在まで活動を行っている。東福島では、谷中と同様に多様な方法で *live politics* が展開している。例えば、生活圏内の被害の状況を図式化し、核について勉強し、身体や土地の汚染を測定する機械を購入し、作物や食物の除染を学び、成果を刊行し、他の草の根グループとネットワークを結んでいる。このように、生きられたポリティクスの世界—小規模で日々の生活に根付き、柔軟で時に儂い—は、経験の幅広さを気づかせてくれる。それは、思考と実践がいかに多様かを示し、失敗の余地を有する。谷中の歴史と福島をめぐる政治は相互に関連しており、特に思考と行動の底流において緩やかに連関している。これらの歴史は“被統治者のポリティクス”が交錯しており、政府の権力が圧倒的な状況下で自律性を主張するものである。

オックスフォード大学の小西しょう氏の「*Provincializing the State: Symbolic Nature and Survival Politics in Post-World War Zero Japan*」は、帝国が拡大していく20世紀初頭の日本において、アナーキストの存在と自然と自然科学をめぐる一般的な理解とが知的、文化的、社会的運動の中で立ち現れてくる有り様を論じる発表であった。発表者は不在で原稿が代読されたため理解が不十分だが、およその内容は次の通りである。日露戦争後の日本で生じた科学的転回は“アナーキストサイエンス”という自然、動物行動、進化、宇宙の力学をめぐる固有の理解に端を発していた。例えば、有島武男がロシアの生物学の本を読み、ガイア世界の多様性から人間界のヒエラルキーを相対化し、北海道の農業の実践において相互扶助を重視することで実際にそれを実践した。その中で彼は農業を近代的テクノロジーと接合させ、第二の文化維新を引き起こした。

ANUのポストドク研究者であるオリビエ・クリチャー氏の「*Can 'art' be informal? The case for creative activism in East Asia*」では、近年ジャック・ランシールを嚆矢とした芸術論や文化論で取り上げられる美学と政治の関係性という理論的枠組みに基づき、インフォーマルなライフポリティクスの事例を取り上げた。日本と香港におけるアートの形態をとる運動を事例とし、いかに創造的実践がインフォーマルなライフポリティクスの道具立てや戦略として機能するかを述べた。より具体的には、代々木の宮下公園でカフェ・エノアールを運営し、ホームレスの支援活動を行っていた市村美佐子の作品が、香港や上海の社会派のアートスペースに展示されるようなアートのクロスカルチュラルネットワークの事例が報告され、'アート'はインフォーマルポリティクスを形成する'創造的実践'として展開されていくべきだと結論づけられた。

ANUの研究員であるアダム・ブロイノウスキー氏の「*Things Fall Apart: Oceanic Responsibility and Localized Responses during the Fukushima Daiichi nuclear*

disaster」では、福島をめぐるいかに“正確”で“科学的”データが隠蔽されているか、実際はいかに汚染されているかを提示するのに終始していた。従って、何を根拠に発表者のデータが「科学的データ」であり、政府の情報を非科学的と言えるのか。なぜ発表者は反原発運動は失敗したと思うのか。なぜ発表者の言う「科学的な」データが公共の中で話されないのかを問うべきだといった、厳しいコメントが寄せられた。

以上、ANU の日本研究者の間では、草の根レベルの社会運動とそのグローバルな展開に強い関心が寄せられていることがよくわかったが、そうした運動の日本の特徴までは明らかになっていない。米村氏はアニミズムを日本の特徴として指摘したが、事例に挙げられた神社の再建や鹿踊りの復興は、アニミズムというよりは祖先祭祀やコミュニティ論の文脈で考える方が適切であるように思われる。ANU の日本研究者が帯びている（と報告者が感じる）政治性は、文化的要素抜きに議論され、行為者の認識枠組みや文化的規範がどう彼らの行動を制約したり、助長するかといった点には触れられないため、統治者と被統治者といった二項対立的構図が再生産されてしまう的にあると思われる。

6 Matthew Allen 先生へのインタビュー

Matthew Allen 教授は、シドニー大学卒業後、九州大学の修士課程に進学し、華やかに語られる日本の経済成長の裏側で不可視化されてきた、石炭鉱山労働者の町であった筑豊地方の勃興と衰退について修士論文をまとめた。筑豊地方が、鉱山業の衰退と共にいかに疲弊し、それに伴い人びとの意識や生活がどのように変化したのか。外部から筑豊の復興を試みようとしてやってくる人びととの関係性を含め、衰退していくコミュニティのエスノグラフィを描き、ケンブリッジ大学から『*Undermining the Japanese Miracle: Work and Conflict in a Japanese Coal-mining Community (1995)*』と題した書籍を発刊した。

博士課程では沖縄研究に従事した。その背景には、シドニー大学在学時に沖縄からの留学生がいたこと、以前よりシャーマニズムに興味があったことが影響している。しかし、沖縄研究に着手した最大の理由は、1995年の少女への暴行事件である。事件を知り、日本の「境界」として沖縄に関心が高まったという。なお、筑豊地方も経済成長し続ける都市との「境界」として位置づけられ、研究関心は修士課程以来一貫して「境界」にあったという。

大学在学時に知り合った留学生が精神科の医師となり久米島クリニックに訪問診療をしていたこと、その医師が勤める那覇の病院の看護師がユタになり久米島に帰島したことから、調査地は自ずと久米島になった。フィールドワークは子どもを含む家族連れで、子どもを小学校に編入させながら1年間遂行した。調査ができたのは、自分が外国人であったからで、フィールドの人が外国人に教える義務を感じたためだという。調査費用はオーストラランド大学と文科省からの助成金を得た。博士論文では、久米島島民という複合的・多層的アイデンティティが彼らの日常生活の中でどのように形成・修正され続けるかに関して、記憶、地域性と歴史、メンタルヘルスとシャーマニズム、観光といった幅広い切り口から描いた。同論文は『*Identity and Resistance in Okinawa (2002)*』として刊行された。

その後 Allen 氏の研究は、記憶・博物館・アイデンティティを主題に、沖縄の置かれた文脈を歴史との関係に留意して考察している。現在「戦争と子ども」というテーマに着手しているが、それは神風特攻隊を理解するためにも重要であり、またシリアをはじめとする現代的問題へも有益な視座を与えてくれると考えているためだという。報告者との対話

の中でも、沖縄のコミュニティ内の「子ども世代」の U ターン者がどういう経緯で島に戻ってきたのか、戻らない若者との比較から、現在の沖縄を照射する研究が面白いのではないかというアイデアを頂いた。

7 まとめ

ANU では、JI の組織化をはじめ日本研究の再活性化が試みられているものの、成功しているとは言い難い。その背景には日本政府および ANU の財政削減政策が大きく関係しており、予算縮小が若手研究者の研究遂行に直接的影響をもたらしていることが明らかになった。また、ANU の人類学が先住民研究をはじめとするオセアニア研究に力点を置き、アジア研究の発展に関心を向けてこなかったことが、歴史学や国際関係論等の特定の分野の日本研究における発展をもたらしたと同時に、わかりやすい構図で日本（沖縄）を論じる傾向を高めたと思われる。

但し、ここで安易な批判をするつもりは毛頭ない。むしろ、多くの日本研究者が招聘されたカンファレンスに人類学者が不在であったのは、他領域の研究者にとって人類学者のプレゼンスが低いことを示している。人類学的視座を盛り込んだ日本研究の発展・展開のためには、人類学者自身が（Allen 先生のように）コミュニティを多角的・複層的に見る力を鍛え、他の領域が無視できない研究成果を出していくことが必要不可欠であり、報告者にもその責任の一端が課せられていることを学んだ。

最後に、人類学的見地から日本研究に従事してきた田村、Allen 両氏およびモーリス＝スズキ氏の 3 者の研究に共通しているキーワードは「境界」であり、大英帝国の境界という歴史性を帯びたオーストラリアにおいて、今後も研究の底流にあり続ける概念であろうことが予想された。

謝辞

ANU の池田俊一先生、田村恵子先生、院生の高橋進之介さん、根岸海馬さん、国立図書館の司書の篠崎まゆみさんには、紙面に書ききれない程の多くの情報をお話いただきました。記して感謝致します。また、テッサ・モーリス＝スズキ先生、KI 所長の Hyaewol Choi 先生、Gavan McCormack 先生にも、シンポジウム期間中に大変お世話になりました。

補足：日本研究の変遷（文献資料より）

- ・ 1918 年 シドニー大学東洋学科創設 ジェームズ・マードック着任
- ・ 1922-47 マードックの後任 Arthur Sadler が伝統文化や文学の研究に従事

1960 年～70 年代初期にかけての日本研究ブーム（第一波）

（57 年日豪通商協定、62 年に豪日経済委員会発足。1973 年英国が EC 加盟し貿易額の多い日本に関心の矛先が）

* 50-60 年代の研究は、文学や歴史それも古典文学や古代から中世にかけての歴史を専門とする研究者が多く、考証的な観点から日本文化・社会の本質に迫ろうとしていた。

[池田 2002 : 76]

60 年にオーストラリア国立大学（ANU）にアジア研究学部が創設し日本学科発足。

（当時の首相がアジア文化の知識を身につけた専門家の養成が急務と判断し、アジア研究の拠点づくりを所望）

76年までに13の機関で100の関連授業。日本語学習者が8000人に。

*60年代の日本の高度経済成長期以降、現代日本を対象にした実証研究が多くなり、経済学・政治学・国際関係論に進学するPhdが増加 [池田2002:76]

*60年代後半から中根千枝をはじめとする日本人の特殊性を声高に論じる「日本論・日本人論」への疑問や批判の登場[池田2002:76]⁹

1970年代後半～80年代の第二次日本研究ブーム

*奨学金制度の展開と経済的関心から日本を知る必要があったため

*既存の歴史や文学を中心とした人文的研究から、社会科学や現代日本への批判的アプローチへとパラダイムシフト。既存の日本語教育への疑問も提起。

cf. 杉本良夫,ロス・マオア編『日本人論に関する12章 通説に異議あり』(1982)

1990年代以降

・1992年 高等教育機関改革。大学の数が19から39に。[池田2002:75]

・政治と官僚組織の構造改革に焦点が当てられた他、女性の権利擁護者が保守層にもあったことを示す研究や、農村社会が国家主義を支えていたという視座に反旗を翻す研究、家族制度や職場において前近代的様相を残しているとされるポストモダニズム研究も開始。オーストラリア国内に居住する日本人の研究にも着手。[池田2002:77]

・日本研究の位置づけに対する懸念

日本研究が地域研究の一部として扱われている限り、日本の政治に研究成果が反映されないことに対するどかしさ。

・日本研究者の海外流出。政府の教育関係予算の削減。

2 日本研究者の概要

・2003年時点、40校中33校が日本研究をカリキュラムに入れ、15000人の大学院生が日本語や日本関連の授業を履修 (Drysdale2004:7)。

・96年18000人、94年17000人の学生数に比して、2003年は若干減少傾向。

・日本研究者の総数は251人(2003年)。うち、57%が女性。

・最も多いのは言語学で69名、次に近代史・現代史が18名、そして経済が10名であり、およそ30%が社会科学を専門とする者。35歳以下の教員は5%(55歳以上は23%)

・2003年時点の学位論文数は、修士361(158)、博士193(71) * ()は日本人

3 日本研究のオーストラリア国内における拠点(研究所)

【Australia-Japan Research Center@ANU】

・他の大学の教授を半数含む研究委員会を持ち、A政府や財界、日本政府から提供された独自の潤沢な基金を持った経済学の研究所。1972年開設。

・ANUの院生の2003年までの修了者数、修士70、博士63。博士論文の主なテーマは「政治・外交・防衛」次に「政治」[宮城2003]

【Japan Studies Centre@Monash】

1981年開設。ビクトリア州の日本語研究者の研究交流拠点。日本万国博覧会基金、トヨ

⁹ 70年代、アメリカの日本研究(本質化された日本の地域像やエスノセントリズム)に対する批判として展開[川端2011:72]

タ財団の助成を受けた。但し、常勤スタッフや図書室はない。[疋田 1994 : 325]

4 日本研究に関する学会

- ・ 1978 年に JSAA が創立

「オーストラリアンスタイルの日本研究」(1980 年の JSAA)

神秘主義・異国趣味・妄想的なものではなく、合理的かつ冷静な研究を目指す探求

- ・ JSAA の 2003 年の大会 (25 周年記念)

160 の研究発表 (25%言語教育、20%社会学、15%文学、12%歴史)

同時代の政治学は 5、ビジネスや経済も 6 しかなかった。

ラウンドテーブルは日本のビジネスに関するものだったが 20 人の参加者の多くは年配で個人発表はしなかった[Pokarier2004 : 94]

- ・ 関連学会として「オーストラリア／アジア研究学会」(1978 年創設) もある。

5 オーストラリアの人類学研究

1925 年 シドニー大学に人類学講座開設

1946 年 ANU 太平洋研究所に人類学講座開設

→白人社会と未接触のパプアニューアに吸い寄せられたアメリカ人類学者の研究拠点に[大野 2009 : 371]

1955 年 国立アボリジニ研究所設立 → アボリジニ研究の衰退

1970 年代 アボリジニ研究の再盛

1990 年代 ホーム研究の隆盛

【現状】

- ・ オーストラリア人類学会は会員 200 人程度で、むしろ AAA に参加
- ・ ANU での人類学に関する大学院コース提供機関
 - ①教養部、②考古学、人類学研究所、③太平洋・アジア研究所、④クロスカルチュラル研究センターの 4 つ[大野 2009 : 387]
- ・ A で刊行されている主要人類学雑誌「Oceania (1930,シドニー大)」、「Mankind (1931,博物館)」→「The Australian Journal of Anthropology (1990,学会誌)」、「Social Analysis (1979,アデレード大)」、「History and Anthropology (1984,ANU)」

[参考文献]

池田俊一 2002 「オーストラリアにおける日本研究」『東京大学大学院教育学研究科 教育学研究室』 28 : 73-78

池田俊一 2009 「オーストラリアにおける日本研究(続)」『東京大学大学院教育学研究科 教育学研究室』 35 : 87-95

大野あきこ 2009 「「マルチカルチュラル」オーストラリアにおける人類学」『国立民族学博物館研究報告』 33-3 : 359-395

川端浩平 2011 「越境する知識人と液状化する地域研究ーオーストラリアにおける日本研究の展開」『オーストラリア研究』 24 : 72-88

疋田正博 1994 「オーストラリアにおける日本研究」国際日本文化研究センター編『日本研究』 10 : 323-329

宮城徹 2003 「オーストラリアにおける日本関連研究－修士・博士論文トピック検討」『東京外国大学 留学生日本語教育センター論集』 29 : 85-98

The Japan Fondation(国際交流基金)1997 『Japanese Studies in Australia and New Zealand, Japanese Studies Series XXVII』

The Japan Fondation(国際交流基金)2004 『Japanese Studies in Australia and New Zealand, Japanese Studies Series XXXIII』

(加賀谷真梨)

○ 北米における医療人類学の動向調査

【背景と目的】

昨年度に実施した海外研究動向調査「4S 及びカルフォルニア大学における科学人類学・医療人類学の動向調査」において明らかになった成果として、(1) 医療人類学の中で科学人類学的な研究が増加していること、(2) いわゆる開発途上国においてはグローバルヘルスに関わる研究が増加していること、があった。

本年度の海外研究動向調査では、12月3日から7日にワシントン DC で行われるアメリカ人類学会の研究大会 (Annual Meeting of American Anthropological Association) に参加し、前年度に実施した動向調査のフォローアップを行うとともに、北米における医療人類学全体の動向を調査した。

【調査期間】

11月30日から12月11日までの12日間 (内、12月3日～7日までAAAに出席)

【対象機関】

Annual Meeting of the American Anthropological Association

1902年に創設されたAAAは、現在、1万2千人の会員数を誇る世界最大の人類学関連学会であり、その年次大会には5千人の参加者が平均して参加している。2014年の年次大会では、ワークショップやビジネスミーティングを含めて、1000以上のプログラムが企画され、医療人類学部会では、81のパネルと6つのポスター発表が行われた。本調査では、この医療人類学部会のパネルを中心に、北米における医療人類学研究の最新の動向を調査した。

【参加したパネルの内容の一部】

1. 生成の人類学

生成の人類学と題されたパネルでは、ジョアオン・ビエル(Joao Biehl)さんの他、アンジェラ・ガルシア(Angela Garcia)さん、ブリジット・パーセル(Bridget Purcell)さん、ルーカス・ベシーレ(Lucas Bessire)さん、アドリアナ・ペトリーナ(Adriana Petryna)さんの5名が発表し、マイケル・フィッシャーさんからのコメントが行われた。

ビエルさんの趣旨説明では、今回のパネルが同じタイトルの本の予告となっていること、生成という概念がドゥルーズとベイトソンに由来すること、人々の可塑性や彼/女らの世界のつくり方に注目すること、彼/女についての理論ではなく彼/女と理論をつくることなどについて、自身の代表作である *Vita* に描かれたカテリーナさんの事例を交えながら説明された。

それぞれの発表者は、メキシコにおける治療を通じた暴力や、トルコにおける儀礼の場所と実践の変化、パラグアイの狩猟採集民の無への生成、気候に関する数学的予測と予測不可能性について述べられていた。しかし、15分という時間の制約のためか、発表そのものからは生成という概念を使うことの旨みはほとんど感じられなかった。

2. 規律訓練、ケア、処罰？監獄における苦悩と福祉に対する人類学的アプローチ

ダイナ・ミカエラ・スタンレイ(Diana Michelle Stanley)さんの発表では、受刑者の増加に伴って、アメリカの刑務所ではホスピスの併設が増加していることが述べられた上で、そこでのケアが規律訓練と区別できない状態で併存していることが報告された。

ステファニー・ジェーシタ・モリソン(Stephanie Jacinta Morrison)さんらの発表では、スコットランドの刑務所における作業療法について、それが受刑者の多様なレベルでの不健康（依存、メンタルヘルス、トラウマ、脆弱性、障害、頭部損傷、うつ etc.）を予防するために用いられていることが報告された。

全体的に事例の報告の色彩が強かったが、取り扱っている事例は興味深いものだった。

3. ケアの時間性：医療、科学、時間の見積もり

スザンナ・トリンカ(Susanna Trinkka)さんの発表では、ニュージーランドの喘息患者の非応諾に注目することにより、発作を予防するステロイド吸入剤を定期的を使用するという医師の求める時間性とは異なる、「喘息に入ったり出たりする」という患者の時間性があることが示され、それが製薬会社への批判へと通じていることが示された。

サラ・ピント(Sarah Pinto)さんの発表では、インドにおけるヒステリーと憑依が同一視される背景にある時間性とその割り当てについて報告された。

サミュエル・タイラー・アレクサンダー(Samuel Taylor-Alexander)さんの発表では、顔面の手術について、顔が異なる時間性を持つ部分から構成されていること、その手術においては未来のために現在が犠牲になりうるという実験的な時間性が用いられていることが報告された。

医療における時間性を主題とした研究を並べることで、時間性に関するいくつかのパターンが見えてくるパネルとなっていた。

4. グローバルヘルスの技法と技術

アニータ・チャーリ(Anita Chary)さんの発表では、グアテマラにおける子宮がんのコレポ診の普及について報告し、低コストで容易にできる検査の普及が山間部のインフラの未整備という根本的な問題の解決を隠蔽していることが報告された。

クラレ・イソベル・チャンディアー(Clare Isobel Chandler)さんの発表では、簡易マラリア診断キットの普及が、マラリアの過剰診療と抗マラリア薬の過剰処方を抑制し、薬を欲しがる患者を抑制的な患者に変えるために使われていることが、タンザニアの事例を踏まえながら報告された。

ジャニス・グラハム(Janice Graham)さんの発表では、髄膜炎 A ワクチンがゲイツ財団の支援を受けてどのように開発され、どのような成果を上げているのかが、ブルキナファソの事例を交えながら述べられた。同時に、成果を確かなものにするためには持続性が必要で、そのためには資金が必要なことも述べられた。

マーガレット・マクドナルド(Margaret MacDonald)さんの発表では、妊娠後の出血を防ぐために NGO などによって処方されているミソプロストゾールが、グローバルヘルスを推進するための技術的・企業家的で、市場に基づく解決の一例になっていることを示していることと、同時に、ミソプロストゾールが中絶に使用されていることも報告された。

サマー・ウッド(Summer Wood)さんの発表では、タンザニアにおける出生証明書について、なぜそれがそれほど普及しないのかについて報告された。

グローバスの現場において、新しい医療技術がどのような振る舞いをしているのかを検討するという問題意識には共感できることが多く、改めてグローバルヘルスについての研究に可能性を感じることができた。

5. ケアという労働：作業、市場、生政治の生産

ナタリー・ポーター(Natalie Porter)さんの発表では、ベトナムにおける、鳥インフルエンザへの対応としてのワクチン接種について、概要が報告された。人間と動物の関係や、生政治、政治経済と関わる主題と関わるテーマで、今後の実りある展開を予感させる発表だった。

ラマー・マッケイ(Ramah McKay)さんの発表では、モザンビークにおける、ブラジルとの南南協力の影響として、製薬会社や薬局での仕事が生まれてきていることが報告された。

サイダ・ホジック(Saida Hodzic)さんの発表では、ガーナの看護師が置かれている状況と、彼女たちが近代化のエージェントになっていることが報告された。

クレア・ウェンドランド(Claire Wendland)さんの発表では、マラウイにおける助産師に焦点をあて、出産介助の際に血に曝されることから衛生的・霊的に危険な仕事として認識されていることが報告された。

シェリーン・ハムディ(Sherine Hamdy)さんの発表では、エジプトの動乱時の医師の活動に焦点を当てながら、医師の中立性がどのように作り出されているのか、上からの権力と下からの権力がどのように交渉しているのかについて報告された。まだ整理はされていなかったが、映像を多用していたこともありわかりやすく、今後の展開を楽しみにさせるものだった。

ケアを主体化論からだけでなく、労働という側面から捉え直そうというパネル全体の趣旨は、実際に分析にはほとんど活かされていないように思えたが、統治とケアの関係について再考するという意味で触発的だった。また、ポーターさんとハムディさんの議論は、個別の話としても、きわめて興味深いものだった。

6. バイオソーシャルを組み立てる：身体化された環境、健康、生命科学と人類学の学際性の様式

エリザベス・ロバーツ(Elizabeth Roberts)さんの発表では、メキシコシティにおける都市環境（セメント工場、家族の安定性、社会関係の強度、食べ物、薬剤、社会福祉・階級対立・ドラッグ戦争）が胎児と幼児の生育に与える影響について、エピジェネティクスの観点から探るための、生物学者と人類学者が共同して行うバイオエスノグラフィの試みが紹介された。ロバーツさんによると、すでに一部の成果は都市政策に影響を与えているという。

ステファニー・ロイド(Stephanie Lloyd)さんとユージン・レーケル(Eugene Raikhel)さんは、エピジェネティクスという発想について、概括的な説明がなされた。人間の成長の特定の段階において、特定の物理的・化学的・社会的環境に置かれることが、特定の遺伝子の発現を促すという発想が、これまでとは違う形で人間と環境の関係を捉えうること、一方で、新たな形の還元主義に陥りうるということが述べられた。具体的には、マギルにおいて、エピジェネティクスの観点から自殺の原因を説明するというプロジェクトが進行中である

ことが述べられた。

ダニエル・レンデ(Daniel Lende)さんからは、依存についての研究を行った立場から、エピジェネティクスが、古典的な「氏か育ちか」論争の焼き直しになること、依存に関して、社会文化的な説明を自然科学的な説明に還元することになりうるということが述べられた。

コメンテーターのモーリツィオ・メローニ(Maurizio Meloni)さんからは、生物学と民俗生物学を分ける必要があることや、エピジェネティクス自体は環境を改変しないこと(つまり相互作用ではなく一方通行)、獲得形質の遺伝をどう考えるかについて、問題提起がなされた。

エピジェネティクスに関する議論への注目は確かに有意義だが、この分野で議論を進めていくためには、エピジェネティクスに関する実証的研究がどのように真実として定式化されるのか、とともに、それがどのように一般に普及し、環境を改変していくかというニッチ構築に関する議論が不可欠となる。その一連のプロセス自体をモニターするという、生物学による自己観察のプロセスまで視野に収める研究の可能性を予感させるパネルとなっていた。

7. 「脳的な主体」の時代における精神と身体を再考する

ダナ・ゴールドSTEIN(Donna Goldstein)さんの2011年にニューヨークのレロイで起きたてんかんの集団発症についての発表では、神経学者による生物学的な説明が、環境要因を隠蔽していることについて報告された。

レベッカ・プレット(Rebecca Plett)さんの発表では、カナダのメノー派の人々の歴史に基づく態度が、メランコリーやうつといった生物医学の単語に翻訳されていることについて報告された。

ダニエル・カー(Danielle Carr)さんの発表では、脳深部刺激療法がいかに主権や自律性、所有といった啓蒙思想の根底に有る概念を揺り動かしているのかについて、医学の言葉と法学の言葉を対比しながら報告されていた。

ベス・セメル(Beth Semel)さんの発表では、アメリカにおける精神病研究が、脳に還元する研究、病理のメカニズムを脳の働きから解明しようとする研究に、制度的に傾いていることが報告された。その上で、それらの研究は実用化に時間がかかるため、目の前にいる患者の治療に役立たないという批判が医療者の中から寄せられていることが報告された。

エレン・バドネ(Ellen Badone)さんの発表では、自閉症の若い男性の語りを丹念に紹介することで、医学における議論ではすくいとれない、意志や経験、主体性を描き出そうという試みがなされた。

脳の器質的な特徴に関する研究の進展がはらむ問題性についての報告がなされたが、その主題の広がりや想像できるほどの問題提起はまだできていないように思えた。その中で、ダニエル・カーさんの発表は、まだ十分に煮詰まっていけないように思えるものの、医療技術の進展が人間という概念に与える影響について議論する野心的なものであり、今後の展開が期待できるものだった。

8. ゲノムの反復：ポストゲノム時代における、公衆衛生、倫理的ジレンマ、権力

ジェシカ・モゼルスキー(Jessica Mozersky)さんの発表では、母体血を用いた新しい出

生前診断を受けた人々の語りが紹介され、そこで浮上してくる知ることへの戸惑いなどの倫理的問題が、決して新しいものではないということが指摘された。

ガレン・ジョセフ(Galen Joseph)さんの発表では、乳ガンを含めた複数のガンについての遺伝子診断について、遺伝子の特許化や遺伝子診断の商業化などの影響を受けて、実験とケアの境界が曖昧になっていることや、今後も、遺伝子検診の進展に伴って、技術的には抱えているリスクについての情報が増えていくという見通しが述べられた。

ジュリー・ハリス-ワイ(Julie Harris-Wai)さんの発表では、マイノリティに対する遺伝子診断を推進するために、コミュニティベースでの検診が行われており、それを遂行するためにアフリカ系アメリカ人が集う教会において行われた読書会を通じた対話プロジェクトについて報告された。

バーバラ・ケニグ(Barbara Koenig)さんの発表では、昨今の遺伝子研究の進展と人種概念の関係について整理された。もともと、人間の遺伝子の多様性はグラディエーションをなしており、人種の境界を引くことが難しいというのが、正統的な科学的見解であったが、遺伝子検査によって外見的特徴やルーツについて分かるようになってきている。しかし、そこで明らかになる過去の共有された集団は人種と必ずしも重なるわけではないという。

遺伝学の進展が人間観に与える影響について、不可知だったものの可知化、実験とケアの曖昧化、マイノリティ、人種といった幅広いトピックから議論するパネルとなっており、遺伝医療の影響について人類学的に考える可能性を改めて確認させるものとなっていた。

9. 逆境で健康と生を求める

スーザン・ホワイト(Susan Whyte)さんのコペンハーゲン大学就任 40 周年を記念して組まれたこのパネルでは、ホワイトさんの友人や学生を中心に 9 つの発表がなされた。

ナンシー・シェパー・ヒューズさんの発表では、*Death Without Weeping* で描かれたブラジルのスラムの現在の姿が報告された。ブラジルの様々な場面で著書が引用されていることその他、乳幼児の死亡数が激減していることや出産数が減っていることが紹介された。

ティーン・ガメルトフト(Tine Gammeltoft)さんの発表では、ベトナムにおけるうつが、異なる二つの語り口、プレッシャーに晒されることと打ちひしがれていることの 2 つの方法で説明されていることが報告され、前者が集団的で不可避なものとして、後者が個人的で一回性の苦悩として表現されていることが紹介された。

ヘレ・サムエルセン(Helle Samuelson)さんの発表では、ブルキナファソの農村部において、過剰にマラリアの診断がなされていることについて、村人たちの主体的な選択の結果として考えられることが報告された。

ロッテ・メイナート(Lotte Meinert)さんの発表では、ウガンダとケニアの国境地帯において、飢餓とトウルカナの襲撃に焦点を当てながら、それらに対する人々の対象をプラグマティズムとして捉える報告がなされた。

アニータ・ハードン(Anita Hardon)さんの発表では、フィリピンとインドネシアのローカルマーケットで入手可能な化学物質と、それがどのように使用されているのかについて報告された。特に、美白製品について、インドネシアでは女性が職を得るために、フィリピンでは男性が女性を惹きつけるために使用しているという報告がされ、いかに、商品としての化学物質がアイデンティティやジェンダーを媒介しているのかという議論がなされ

た。

ルース・プリンス(Ruth Prince)さんの発表では、ケニアの病院において、研修医がチーム医療を進めるために、事務員や看護師との関係の作り方を学ぶことや、患者の社会的状況についての大量の情報をカルテに書きつけることについて、解放性と閉鎖性をキーワードにしながら議論された。

医療人類学の中でも特に社会人類学よりの発表が集まっていたパネルで、スーザン・ホワイトさんの影響を受けたアフリカを対象とする医療人類学の層の厚さを感じさせるパネルとなっていた。

1.0. 疾病のドクサと遍在：非日常を日常にする

エミリー・メンデンホール(Emily Mendenhall)さんの発表では、糖尿病が増加しつつある南アフリカ共和国において、糖尿病の認識が HIV/AIDS との比較によって成立していることが報告された。

レスリー・ジョー・ウィーバー(Lesley Jo Weaver)さんの発表では、インドにおける中年女性の糖尿病の経験が日常を形作っていく形について、苦悩の表出の仕方、娘の反応、病の正当性、社会的苦悩の4つにわけながら、二つのケースの比較がなされた。

サラ・ルイス(Sara Lewis)さんの発表では、インドにおけるチベット難民が、どのようにトラウマを乗り越えていくのかについて、チベットにおけるレジリエンスの概念が鍵となっていることが報告された。

メンデルホールさんが報告した、HIV/AIDS の存在が自明となった上で、それに基づいて糖尿病が理解されているという報告は興味深いものだった。医学的知識が、物事の理解や判断の前提になる可能性について、ますます敏感になっていく必要性が感じられた。

特別講演「アントロポセンの時代における人類学：研究すべきことについての私見」(ブルーノ・ラトゥール)

ブルーノ・ラトゥール(Bruno Latour)さんの特別講演は、アントロポセン(anthropocene)¹に関するものだった。やや正確性に欠けるが、おおまかには以下のような話がされた。

ラトゥールによると、アントロポセンは人類学者への贈り物だという。アントロポセンという言葉が作られるという、小さなイノベーションによって、地質学者や歴史学者の関心が大きく変わった。

アントロポセンが興味深いのは、第一に、それが、人間がいかに地球の気象に影響を与えているのか、つまり人間のエージェンシーを問題にするからである。第二にそれは、自然科学と人間のエージェンシーの関係の両方と関連している。そのため、アントロポセンについて考えるためには、あらゆる学問分野に対して、形質人類学と文化人類学の融合に関するものと同じ問題について提起する必要がでてくる。

¹ アントロポセン(anthropocene)は、ノーベル賞受賞者でもある大気化学者パウル・クルツツェンが提案した造語であるとされる。地質時代における新生代第四紀更新世の次の時代区分とされ、地球の気候に対する人間の影響力を強調するために、人類を表す anthropo- という接頭辞が用いられている。英語版の wikipedia によると、少なくとも 1960 年代には、ロシアの科学者たちの中で使われ始め、1980 年代にユージン・ストーマーによって現在の意味で用いられるようになったとされる。なお、2014 年の AAA において、anthropocen に言及したパネルと発表は 64 に上っており、注目度の高さがうかがえる。

自然と文化の対立や、自然化や社会構築への還元といった問題は古く、退屈なものかもしれないが、第三に、アントロポセンは、ダナ・ハラウェイの言うところの、責任=応答可能性とも関連している。地球の気象が人間によって変わっているというのなら、それはいったい誰によって変わっているのか。正確には誰なのか。人類はひとつのまとまりとは考えられない。そのため、誰に責任があるのかという観点から、数多くの学問分野が様々な人間の生活に関心を持つようになる。またそれは、責任を特定のネットワークに帰する可能性を惹起し、たとえば、キャピタロセン(*capitalocene*)という他の用語も提起しうる。

第四に、アントロポセンは、多くの学問分野に人類学が抱えていたものと同じ政治的妥当性を突きつけることになる。人類学者と同じように政治参加が求められることになる。

アントロポセンに生きる人々の研究をする、ということは、人類の中の特定の人々や特定の側面を研究するという一般的な人類学の定義とは異なる。「形質」の側に注目すると、様々なものがエージェンシーを持っている。あるいは、私たちが驚かせるという意味で、活動している(*animated*)。ヤン・ザラシェヴィチの *The planet in a pebble* のように、科学者たちは、たとえば石を、単なるモノとしてではなく活動しているものとして扱い、地球を多くの構成要素のすべてがそれぞれの世界を作り続けているようなものとして扱う。

「形質」がエージェンシーを扱うからと言って、「文化」の側が「自然の力」を扱う必要はない。アントロポセンはオントロジーに関わる問題を提起し、これまでとは異なる時間と空間に関する概念を要請する。そのようなきっかけを与える贈り物である。

なお、この講演の読み上げ原稿は、ラトゥール自身の web ページ (<http://www.bruno-latour.fr/sites/default/files/139-AAA-Washington.pdf>) から入手可能である。

【海外の研究者との対話】

企画時に予定していた、ペンシルベニア大学のアドリアナ・ペトリーナ教授とは長時間話すことはできなかったが、今回の調査では、ロンドン大学名誉教授のマリー・ラスト(Murray Last)さんの紹介により、ヨーロッパにおけるアフリカを対象とする医療人類学の大家であるスーザン・ホワイト(Susan Whyte)さんと、若手のホープであるルース・プリンス(Ruth Prince)さんと特に親しく議論させてもらう機会を得た。

ウガンダをフィールドに研究を続けてきたコペンハーゲン大学のスーザン・ホワイトさんは、ヨーロッパを代表する医療人類学者のひとりであり、妖術や占い、薬剤など幅広い主題を取り扱った主著、*Questioning Misfortune* の著者として知られる。その後も、HIV/AIDS プロジェクトや糖尿病を含めて幅広く研究を続けており、2014年に *Second Chance* を上梓している。

Making and Unmaking Public Health in Africa の共編者のひとりであるルース・プリンスさんは、2000年代にケニアで盛んになった HIV/AIDS 対策によって大量のカネが流入したことにより、当該地域の医療状況がどのように変化したかを記述する論文(患者の周辺のみならず焦点を当てるのではない論文)を書いている。特に、HIV/AIDS クリニックとそれ以外の医療施設のコントラストについて、プロジェクトイフィケーション(プロジェクト化/突起作成)と、曝され(*exposure*)という概念を用いて記述している点に特徴がある。お互いの研究について議論を交わし、今後も議論を継続していくことを確認した。

【その他の訪問先】

1. スミソニアン・国立アフリカ美術館

スミソニアン・国立アフリカ美術館では、常設展に加え、「Conversations: African and African American Artworks in Dialogue」、「Chief S.O. Alonge: Photographer to the Royal Court of Benin, Nigeria」、「Africa ReViewed: The Photographic Legacy of Eliot Elisofon」の3つの企画展が行われていた。

このうち、「Conversations」は、Spiritualities、A Human Presence、Power and Politics、Memory、Family and the Domestic Sphere、Nature as Metaphor、Music and Urban Culture という7つのテーマに沿って、アフリカの美術や器物とアフリカンアメリカンの作品を並置して展示するという興味深い企画を行っていた。アフリカの美術と器物を並べて展示するという方法は、全館的に意識的に行われているようで、器物に関してはそれほど驚きはなかったが、絵画の展示が充実していたことが興味深かった。

また、「Chief S.O. Alonge」では、ナイジェリアのベニンシティで S.O. Alonge によってとられた写真が、ベニンシティの歴史やエドの芸術家によって作られた作品とともに展示されていた。写真は魅力的に撮られたポートレートが多かったが、個人的には、人々の衣装に引き付けられた。いわゆる欧米風の衣装だけでなく、ワックスプリントを仕立てた服を着ている人も多く、その絵柄も現在に通じるものが多く見られた。昨年訪れた、アフリカディアスポラ博物館でもナイジェリアのポートレート写真の展示が行われており、20世紀に西アフリカで撮られた写真は、興味深い研究の対象になりうるということが分かった。

2. スミソニアン・国立アメリカ歴史博物館

スミソニアン・国立アメリカ歴史博物館では、東館の二階で行われている「アフリカ系アメリカ人の歴史と文化」の企画展を訪問した。これは2016年に開館予定の「アフリカ系アメリカ人歴史博物館」の予告展示を兼ねているが、訪問時には、「Rising Up: Hale Woodruff's Murals at Talladega College」という展示が行われていた。これは、ホール・ウッドラフがタラデーガ・カレッジの図書館に描いた、奴隷制度と奴隷解放に関する壁画を展示したもので、アフリカ系アメリカ人の置かれている状況や奴隷解放が抱える矛盾が独特の筆致でアイロニカルに描かれていた。

3. ペンシルベニア大学考古学人類学博物館

ペンシルベニア大学考古学人類学博物館は、フィラデルフィアにあるペンシルベニア大学に併設されている博物館である。全体の展示の傾向としては、考古学が中心となっており、特に、エジプト、ローマ、ギリシアなどの発掘品などが目玉となっている。それに加えて、自然人類学に関する展示もなされていた。アフリカに関する常設展は、博物館の中では、アメリカ先住民のものと並んで、現代的な器物が展示されていたが、どうしても他の地域の考古学的な展示との関係で、同時代性が感じられないような展示になっていた。それを補うためか、「アフリカを想像する」という特別展が開催されており、そこでは、アカンのアディンクラをシンボルにしながら、美しさ、強さ、神、変化、癒し、力、創造性という7つの項目ごとに、器物と映像を用いながらアフリカ地域を全体的に（地域ごとではなく）紹介する展示がなされていた。

【総括】

今回、はじめて AAA に参加することで、北米の医療人類学の動向の広がりをおおまかに掴むことができた。AAA の特性として、短期間に数十件の研究発表を聞くことができる点があげられる。これだけの数の医療人類学に関連する研究を一気に聞く機会は滅多になく、分野全体の広がりや流行を知ることができた。全体的な傾向としては、欧米の先端医療を対象とするものや科学人類学的アプローチを採用する研究が多く見られた。このことは、特別講演を行ったブルーノ・ラトゥールの研究とも密接に関係しており、医療人類学だけではなく、人類学全体の動向とも関連していると考えていいだろう。同時に、アフリカ地域の生物医療を対象とする研究も散見されたが、その中でも、コペンハーゲン大学のスーザン・ホワイトさんの影響を受けて北欧で展開している、東アフリカを対象とする医療人類学研究は、濃密な現地調査に基づいた民族誌を生産していることがわかった。また、個別的には、時間性、物質性、生政治、ケア、グローバルヘルス、存在論といった主題が特に有望に思えた。これらのトピックについて今後、医療人類学の中でどのような研究が展開していくのか、注視していく必要がある。

(浜田明範)

○ロンドンにおけるアフリカ地域を対象とする医療人類学の動向調査

【背景と目的】

昨年度と今年度を実施した海外研究動向調査「4S 及びカルフォルニア大学における科学人類学・医療人類学の動向調査」、「北米における医療人類学の動向調査」によって、(1) 医療人類学の中で科学人類学的な研究が増加していること、(2) いわゆる開発途上国においてはグローバルヘルスに関わる研究が増加していること、(3) 北欧を中心にアフリカ地域の生物医療に関する重厚な民族誌的研究が展開していることの3点が分かった。一方で、アフリカ研究の拠点であるイギリスの研究動向については、まだ明確にはつかめていない。そこで、今回の海外研究動向調査では、これまでの動向調査を発展させる形で、ロンドンにおけるアフリカ地域を対象とする医療人類学の研究の動向を調査することを目的とした。

【調査期間】

- ・ 3月7日から15日までの9日間

【対象機関】

- ・ University College of London (UCL)
- ・ The London School of Hygiene and Tropical Medicine (LSHTM)
- ・ The School of Oriental and African Studies, University of London (SOAS)

【ロンドンにおける医療人類学の概況】

今回の調査では、アフリカにおける医療人類学を実施している研究者を中心に、UCL のマリー・ラスト (Murray Last) 名誉教授、LSHTM のメリッサ・パーカー (Melissa Parker) 博士、SOAS のチャールズ・ゴア (Charles Gore) 博士の3名と面会し、ロンドンにおける医療人類学とアフリカ研究の現状について伺うことができた。

現在、ロンドンでは医療人類学が非常に盛んに行われており、UCL、LSHTM、SOAS だけではなく、London School of Economics (LSE) やキングス・カレッジ、ゴールドスミスカレッジにも研究者が所属しており、その対象や関心も非常に幅広いものになっている。現在、UCL と LSHTM ではジョイントセミナーを実施しているが、今後、このセミナーを他のカレッジにも広げていく計画があるという。比較的狭い範囲内に多くの研究機関が存在し、活発に研究交流が行われていることが、ロンドンにおける医療人類学の他の地域とは異なる特徴となっている。

現在、UCL には、アフリカを対象とする医療人類学の教員としてサラ・ランドール (Sara Randall) 博士が所属しており、彼女のもと、ソマリランド、ブルキナファソ、モロッコ、南スーダン、ケニア、エチオピアなどを対象とする研究を行う大学院生がいる。また、UCL には人類学部以外に、グローバルヘルス研究所や母子保健研究所にも複数の医療人類学者が在籍しており、中でも南アジアを対象としているオードリー・プロスト (Audrey Prost) 博士の評判はとてよく、今回の調査期間中に面会する予定であったが、調査者の体調不良のためにお会いすることができなかった。ただし、その後もメールで連絡を取り合っており、今後、研究交流を続けていく予定である。UCL では、長い間医療人類学の教授を務

められた、ナイジェリア研究者のマリー・ラスト名誉教授と面会し、近況について情報交換をした上で、ロンドンにおける医療人類学者について教えていただくことができた。

SOAS には、アフリカを対象とする医療人類学の教員として、クリストファー・デイビス (Christopher Davis) 博士が所属している。デイビスさんは、中央アフリカのタバワの人々の治療と病気についての研究 (Death in Abeyance: Illness and Therapy among the Tabwa of Central Africa) で知られており、2012 年に Medical Anthropology Quarterly 誌に掲載された論文 What is Life Worth? A Rough Guide to Valuation では、ゴールドスミスカレッジに在籍している医療社会学者ニコラス・ローズの『生そのものの政治』を意識しながら、フィールドワークに基づく葬儀についての議論とステラークのパフォーマンス (Ear on Arm) を並置し、Deadly と Leathal を再定義する刺激的な議論を展開している。当初、今回の調査中にデイビスさんとの面会を希望していたが、残念ながら連絡を取ることができなかった。SOAS では、アフリカ地域研究を専攻しているチャールズ・ゴアさんにお会いし、SOAS における西アフリカ研究の状況について伺い、今後の交流を約束することができた。

イギリスにおける熱帯医学の拠点である LSHTM には、多くの医療人類学者が在籍しており、医療援助や医学研究と共同しながら研究が進められている。今回の調査では、そのなかでもメリッサ・パーカーさんとお会いし、話を伺うことができた。LSHTM では、医療人類学は、Anthropology, Politics and Policy Group (APP) という部署に所属しており、大学院生を対象とする教育活動と研究活動の両方が行われている。LSHTM においても、医療人類学者の研究は多岐にわたっており、特定の傾向があるというわけではないが、必ずしも応用研究が盛んというわけではなく、生物医療の実践に対する批判を重視する批判的医療人類学 (critical medical anthropology) も盛んに行われているという。

以上のように、ロンドンでは多数の医療人類学者が存在し、盛んに研究活動が行われている。この背景には、医学部を抱える UCL や医学系の研究施設である LSHTM において多くの医療人類学者がポストを得ていることがある。また、USL、SOAS、LSHTM は非常に近接しており、このことも研究者同士の相互交流を可能にしている。

【UCL の医療人類学セミナーについて】

ロンドンにおける医療人類学は、UCL における医療人類学セミナーとともに発展してきたと言われる。現在は、この UCL の医療人類学セミナーは、LSHTM で行われることもあるという。

今回の動向調査の期間中、3 月 13 日 (木) に、UCL の医療人類学セミナーに参加し、LSE のティム・アレン (Tim Allen) 教授による、「バブルの外側の生：北ウガンダにおける認知的不協和と人道主義的な免責 Life Beyond the Bubbles: Cognitive Dissonance and Humanitarian Impunity in Northern Uganda」と題する北ウガンダにおける人道主義的活動についての発表を傍聴する機会に恵まれた。

タヴィストック・プレース (Tavistock Place) にある LSHTM の 1F で実施されたセミナーには、大学院生と思しき若手の研究者を中心に 30 名ほどの参加者があり、その中には、UCL のローランド・リトルウッド (Roland Littlewood) 教授など一線級の研究者も参加し、議論を盛り上げており、ロンドンの医療人類学の盛んさを伺わせるものとなっていた。

ティム・アレンさんは、柵で囲まれたひとつのコンパウンドの画像から話をはじめた。そのコンパウンドの中では、人道主義的な援助団体による活動が行われているという。この人道主義的な活動は、柵に囲まれ、外界から隔絶されており、泡のような存在だという。そして、人道主義は、生命を大切にするものではあるが、泡の外側の生については無頓着でありうるという。

人道主義のこの両義的な性格は、北ウガンダにおける「見えない子供たち (invisible children)」の事例に明確に現れている。「見えない子供たち」の活動は、2003年に遡ることができる。北ウガンダでは、ジョセフ・コニー (Joseph Kony) とその私兵 Lord's Resistance Army (LRA) による子供の誘拐と兵士化が行われていた。「見えない子供たち」は子供たちを誘拐から守るための避難所を建設し、子供たちを守ってきた。

だが、子供たちを救うためのこの人道主義的な活動は、思わぬ結果ももたしている。まず、もっとも明確なことは、この当初だれの目にも触れていなかった「見えない子供たち」は、結果的に、世界中の人たちによく見える存在になっている。「見えない子供たち」に関する施設には、ヨーロッパから観光客が訪れることも珍しくなくなっているという。

次に、「見えない子供たち」はいくつかの問題点も抱えている。子供たちの帰還がうまくいっていかず、子供たちと親の間に亀裂が生じている他、「見えない子供たち」は、北ウガンダにおける HIV/AIDS の感染率の高さにも寄与している。北ウガンダはウガンダ国内の他の地域に比べ HIV/AIDS の感染率が高いという特徴を持っている。人道主義的な援助団体はこの感染率の高さを LRA の蛮行によるものとしているが、アレンさんによるとアフリカの他の地域における HIV/AIDS のリスクファクターである、人の移動がここにも当てはまるという。つまり、人道主義的な援助によって引き起こされた大規模な人の移動の結果、HIV/AIDS の感染率が上昇しているのだという。ここでは、人道主義的な援助は、子供の命を救うものであると同時に、HIV/AIDS を蔓延させるものともなっている。

最後に、人道主義の呪医への態度も両義的である。一方で、和解のための儀礼を推奨し、呪医の力を借りる一方で、どれほど一般的であるかも疑わしい子供の供犠を撲滅するための啓発活動を盛んに行うことで、呪医に対する否定的なイメージを喚起してもいる。ここでも、人道主義的な活動は、一貫しているというよりは両義的なメッセージを発している。

以上のような報告に対し、アレンさんの人道主義的な活動への批判性は理解できるが、では、このような状況に対してどのように対処することができるのか、あるいは、人道主義的な活動が単純になればいいのかといった、質問がなされた。アレンさんは、歯切れ良く答えていたわけではないものの、発表自体の説得力があったので、全体としては人道主義的な援助の両義性や、それに対する批判性は説得的だったように思えた。

私自身が直接参加したわけではないが、この UCL の医療人類学セミナーでは、以下のようなタイトルで講演がなされている。この日程表からは、ロンドンを中心とするイギリスの研究機関から多くの発表者が参加をし、医療人類学に関する議論が活発に行われていることが窺える。

2014 年秋

10月9日：ローランド・リトルウッド (UCL) 「対抗者の出現：宗教-治療的システムにおける対立的な力」

- 10月16日：サラ・ギブソン (Sahra Gibbon) (UCL) 「「多数よりも少ないもの」ブラジルのガン遺伝子におけるローカル生理学」
- 10月23日：カルロ・カドゥフ (Carlo Caduff) (Kings College) 「正しい処方」
- 10月30日：チャールズ・スチュワート (Charles Stewart) (UCL) 「ギリシア精神の植民地化？ギリシアにおける西洋の精神治療薬の出現」

2015年春

- 1月15日：ポール・ブロードウィン (Paul Brodwin) (University of Wisconsin) 「ケアの身振り：精神保健改革の民族誌」
- 1月22日：ベン・ベレク (Ben Belek) (University of Cambridge) 「感情の語りと自閉症の自己支援」
- 1月29日：ポール・リチャーズ (Paul Richards) (Wagenigen University) 「エボラの終焉？シエラレオネ農村からの新証拠」
- 2月5日：スーザン・フィリップ (Susan Phillips) (Pitzer College, California) 「報復の解剖学：法医学的証拠、ストーリーテリング、ギャングの集団的暴力」
- 2月12日：ハンナ・キエンズラー (Hannah Kienzler) (Kings College London) 「紛争と紛争後におけるグローバル・メンタル・ヘルス：コソボとパレスチナにおけるメンタルヘルシステム改革を交渉する」
- 2月26日：シアラ・キーランス (Ciara Kierans) (University of Liverpool) 「動きの中の身体：メキシコにおける両義的な技術と臓器移植の政治」
- 3月5日：ヘイジ・ラーセン (Heidi Larsen) (LSHTM) 「噂の人類学：なぜ噂は公衆衛生にとって重要なのか？」
- 3月12日：ティム・アレン (Tim Allen) (LSE) 「バブルの外側の生：北ウガンダにおける認知的不協和と人道主義的な免責」
- 3月19日：クリストス・リンテリス (Christos Lynteris) (University of Cambridge) 「目に見える見えないもの：疫病の写真と光学的無意識」

【その他の訪問先】

・大英博物館・アフリカギャラリー

大英博物館のアフリカギャラリーでは、モザンビークの TAE (Transforming Arms into Tools) プロジェクトで作成された the Tree of Life やエル・アナツィの木彫や金属彫刻、アディンクラをモチーフにしたオウス・アンコマの絵画「自由 free」といった、アフリカ由来の現代美術とともに、東アフリカで日常的に使用されているワックスプリントのカンガやガーナの織り布であるケンテ、仮面やベニン王国の真鍮製の飾り板、仮面や壺などの器物が高い密度で展示されていた。

展示は、布や仮面、土器、青銅器といった種類ごとにまとめて展示されており、また、それぞれの作品についての説明はそれほど詳細ではなかった。どちらかというと、ひとつひとつの作品を文脈とは関係なく見せる展示になっているが、いまひとつ展示の意図が分かりづらかった。

・オクトーバー・ギャラリー

ロンドンにおいて、非西洋の美術を定期的に展示・販売する数少ないギャラリーのひとつであるオクトーバー・ギャラリーでは、2月12日から3月18日までの予定で、エル・アナツイの企画展が開催されており、6点の金属彫刻と2点の木彫が展示・販売されていた。世界中の博物館・美術館で展示されているアフリカ由来の現代美術が販売されている画廊を訪れることで、アフリカに関する展示の文脈をよりよく理解することができた。

(浜田明範)

○ 米国を中心とした民族音楽学の動向調査—マテリアリティと環境の視点から

【背景と目的】

本調査は、米国を中心とした民族音楽学の最新の動向について、主に、ピッツバーグ大学において開かれる Society of Ethnomusicology (SEM) を訪れて明らかにするものである。なおここで民族音楽学とよぶ領域には、歌や楽器演奏といったいわゆる音楽を対象とした研究を主に想定しているが、演劇や舞踊を含むその他の芸能に関する研究も可能な限り考察の対象とする。本調査の一つ目の目的は、SEM の全体の傾向を把握し、現在民族音楽学やその周辺分野においてどのようなテーマが重視されているのか、その最新の動向を明らかにすることである。また、二つ目の目的は、マテリアリティと環境に関わる民族音楽学的研究の動向を明らかにすることである。楽器など芸能に用いられるモノ、上演する人間の身体性、音を奏でたり聴いたりする物質的な環境、音楽を流通・再生させる媒体、上演を物質的・身体的レベルから切り離すインターネットなどに注目する研究が、近年どのような展開をみせているのかについて考察する。このテーマに関連して、SEM の会期の後は、コネチカット州の人形劇博物館、およびマサチューセッツ工科大学を訪れた。

【調査期間】

- ・ 11月12日～16日 Society of Ethnomusicology (ペンシルベニア州・ピッツバーグ大学)
 - ・ 11月18日 Ballard Institute and Museum of Puppetry (コネチカット州マンスフィールド)
 - ・ 11月19～20日マサチューセッツ工科大学 (マサチューセッツ州ケンブリッジ)
- ※ 渡航期間 11月11日～22日

【Society for Ethnomusicology (ピッツバーグ大学／ウィンダム・グランド・ホテル)】

会期 11月12日～16日

アメリカにおける民族音楽学の最大の学会である。いわゆる民族音楽から、ポップスまで幅広い音楽や芸能を対象とする。本年は民族音楽学の代表的な著作 B. ネットルの *Theory and Method in Ethnomusicology* とアラン・メリアムの *The Anthropology of Music* の出版 50 周年目にあたり、記念の座談会が開催されていた。プレカンファレンスでは、ピッツバーグという土地柄を意識して、音楽と労働の関わりをテーマにしたプレ・シンポジウムが開催された。

翌日から始まった研究大会では、計 116 のパネルおよび座談会が組織された。理論や方法論を中心的に取り上げる発表は少数派で、多くはフィールドワークに基づく事例研究であり、その中で特定のトピックを取り上げている¹。

2005 年大会の際の発表タイトルを分析しながら、当時の学会長の T. Rice は研究発表されたトピックを 15 に分類している。彼の統計によると、取り上げられたトピック上位 3 つは、多い順に、①民族音楽学の歴史および特徴、②アイデンティティ (そのうちジェンダ

¹ただし理論に対する関心が低いわけでもないようだ。民族音楽学における理論をテーマに挙げたパネル *Critical Perspectives on Ethnomusicological Theory* には多くのオーディエンスが詰め掛けていたことが印象的であった。

一や性別に関わるものが最多)、③空間や場所や地理、である (Timothy 2005 : 3)。彼の統計の基準が明らかではないので、厳密な比較はできないが、9年後の今回の研究大会では、民族音楽学の特徴や歴史に関する議論は(先述の出版50周年記念の座談会はあるものの)、全体的にはそれほど多くなかった。他方、アイデンティティ、そして空間や場所や地理、に関しては引き続きパネルや個々の発表で取り上げられていた。

今年のトピックの中で、特に数が多かったのが、ジェンダー (あるいはセクシュアリティ) であった。これまで男性が担ってきた音楽ジャンルで、女性の進出がみられる事例など、ジェンダー役割分担の変化や揺らぎを扱ったものや、LGBTの音楽実践を扱ったパネルがあった。また、社会のコンフリクトや暴力や抵抗に関わる音楽実践、そして音 (sounding) やサウンドスケープを取り上げた発表も比較的多く、若手研究者と意見交換した際にも、注目を浴びているトピックとして話題に上った。



2014年の今回の研究発表のうちマテリアリティおよび環境という本調査の関心に関わる
ところでは、以下のような研究発表があった：

- (1) 音楽を作ったり再生したりするモバイルデバイスの発達によって生まれる新しい状況について分析するもの。モバイルデバイスによって音楽制作や再生の環境が変わるだけでなく、作り手と聞き手の関係が変わったり、再生音と周囲の自然音との新しい関わりが生まれたりもする。iPhoneでのバンド演奏や、MP3プレイヤーにて語りや音楽を再生しながら町を歩く新しい観光開発の試みなどが報告された。
- (2) 楽器と演奏者の関係を、楽器の物質的な特徴や演奏者の身体的な感覚、そしてそこから生じる愛着などの感情に着目しながら考察するもの。ウクレレのマテリアリティを論じたこの研究では、ギターからウクレレに持ち替えた3名のミュージシャンへの聞き取り調査を行っていた。言語化しにくいこれらの感覚的な要素を、ギターとウクレレの経験の対比という形でうまく聞き出していた。
- (3) 楽器をエージェントとしてとらえ、製作者、演奏者、その師匠などとの関係をアクター・ネットワーク理論やそれに類似するアイデアで記述しようとするもの。バリにおいてガムランの楽器や演奏がいかに宗教間の交流を触発した両者の間のネットワーク形成に寄与しているかを論じるものや、アンデスの弦楽器工房の役割に着目し、そこがいかに音楽実践におけるネットワークの拠点となっている

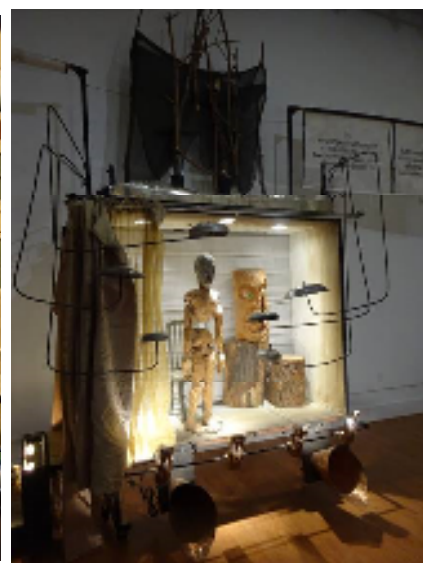
のかを論じた上で、その工房もまたモノの流通や自然環境との関わりの中で変化していることなどを指摘するものがあった。

なお、モノのエージェント性やヒトとモノのネットワークに着目した民族音楽研究は、数的には全体のほんの一部であり、マイナーなトピックであるという印象をうけた。筆者が直接話を聞いた発表者たちは、彼らにとって取り組み始めたばかりの、新しいテーマだと語っていた。彼らが参照している先行研究としてしばしば SEM の学会誌に発表された Bates の「楽器の社会生活」(2012) が挙げられた。これは、ANT や近年の物質文化研究の潮流を紹介し、弦楽器 saz についての自らの研究に適応しながら、民族音楽学における有用性を示そうとする論考である。

【Ballard Institute and Museum of Puppetry】

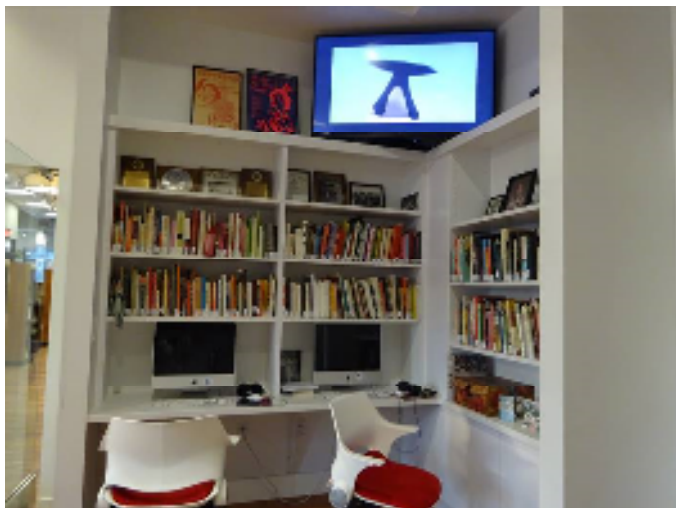
コネチカット大学は、人形劇専攻のある非常に珍しい大学である。そこでの教育に功績のあったフランク W. バラードの作品や彼の集めたその他の人形からなるコレクションから生まれた Ballard Institute and Museum of Puppetry は、大学の敷地内にあり、現在人形劇の発展と促進を目的に展示、上演イベント、講義を開催している。展示室のほか、人形制作などが行えるワークスペース、そして隣の書店と共用の小さなイベントスペースを有している。

ディレクターの John Bell 博士は、パフォーマンスに現れるモノ (performing object, e.g. 人形、仮面) を横断的に研究する複数の論集を編集している。今回ご本人との日程が合わなかったが、アシスタントの Wick 氏にお手伝いいただき、施設見学および、人形劇研究の資料やビデオ・アーカイブの閲覧をさせていただいた。人形劇の実践や、人形劇を用いた児童教育、世界の人形劇文化に関する書籍が幅広く収集されており、一部仮面についての資料もある。これらの文字資料はこの博物館と学内の資料室に保存されている。



2014年には、パフォーマンスにおけるモノや物質性をキーワードの一つに掲げる論集が2つ出版された。そのうち Schowetzer & Zerdy eds. 2014 は、(演劇史を含む) パフォー

マンス研究からの、そして Dassia et al eds. 2014 はこの博物館を拠点の一つとした人形劇研究からの成果である。いずれの出版物についても、この博物館を舞台にシンポジウムが開催されており、モノや物質性に着目した芸能研究の重要拠点の一つとなっていることがわかった。今回そのシンポの記録ビデオも提供していただくことができた。



【マサチューセッツ工科大学】

マントル・フッドが、バイ・ミュージカルティ²を提唱して以来、民族音楽学では、研究者自らが、時間をかけ、対象の音楽の演奏技術を学ぶことが一つの主要な研究手法となっている。具体的なモノ（楽器）との身体的な関わりの中で、音楽理解が目指されるのである。こうした大学での民族音楽学の実技の教材として最も典型的なものの一つがガムランである。

今回は、バリ音楽の若手研究者の Petet Steele 氏に紹介いただき、MIT を拠点とするガムラン演奏チーム Galak Tika の活動を見学した。Galak Tika は、1993 年に設立された。このチームは、多くの創作曲を発表していることに加え、他ジャンルとのセッションが多く、またバリのガムラン楽器を元とした電子楽器 gamelan elektrika を製作している点の特徴的である。このガムラン・エレクトリカについては、従来のガムランとは違う、多種多様な音を出すこと、音階が変更可能であることに加え、持ち運びの簡便さなども利点として挙げられている。ガムラン音楽を従来の音楽構造、音の響き、そして物質性から分離しつつ、彼らが目指しているのは、革新的で間文化的（cross-cultural）な音楽である。

訪問時には大学の授業としてはバニユワンギ地方のガムラン、夜の社会人主体の演奏サークルとしてはバリの伝統曲と創作曲を練習中であった。社会人メンバーの殆どは、大学外からやってきており、大学教育が外へと展開し、地域に新たな音楽実践を生んでいることがわかる。バリや日本とも比較しながら、楽器の扱いや、練習の進め方について観察し、情報交換をした。

² 二つの言語を身につけるバイ・リンガルのように、二つの音楽性を身につけること。自らの音楽に加えて、対象とする音楽を学ぶことによって、「内側から」理解しようとする研究方法。



【参考文献】

Bates, E. 2012 The Social Life of Musical Instruments. *Ethnomusicology* 56(3) pp. 363-395.

Rice, Timothy. 2005 “President’s Soundbyte: What are we thinking?” SEM Newsletter39 (4):1, 3, 40.

Schweitzer, Marlis and Joanne Zerdy eds. 2014 *Performing Objects & Theatrical Things*. Palgrave Macmillan, Hampshire & New York.

Posner, Dassia N., John Bell, & Claudia Orenstein 2014 *The Routledge Companion to Puppetry and Material Performance*. Routledge, Oxfordshire & New York.

(吉田ゆか子)

○ ハワイ大学におけるインドネシア芸能研究に関する動向調査

本研究は、ハワイ大学マノア校における、芸能研究の動向を明らかにするものである。地理的にアジアに近いことや、ハワイがアジア系の住民を多く抱えることから、この大学は、米国のアジア・太平洋地域研究の重要拠点となっている。またこの大学は、アジアのパフォーミング・アーツに特化した珍しい専攻 **Asian Theater** を有しており、アジア芸能研究の主要な拠点の一つでもある。今回、特にインドネシアを対象とした芸能研究に着目しながら、どのような体制でどのような研究が行われているのかを調査した。また特に、**Asian Theater** 専攻および民族音楽学専攻の特徴的な活動、すなわち民族芸能を学び調査研究で得られた知見や芸を、学生や地元の人々に伝えながら上演作品の製作という形で学内のホールにて発表し、それを更に学校などでの公演を通じてアウトリーチ活動へとつなげてゆく一連のプロセスについて調査した。

【調査期間】

・2015年2月24日～3月3日

【インドネシア芸能研究に関わる組織】

インドネシア芸能は、以下のような多様な組織において研究することができる。

- ① 民族音楽の分野では **Music Department** 中の **Ethnomusicology** 専攻
 - ② 演劇と舞踊の分野では、**Department of Dance and Theater** 中の **Asian Theater** 専攻
 - ③ 人類学の分野では、**College of Social Science** の **Department of Anthropology**
 - ④ 地域研究の分野では、**School of Pacific and Asian Studies (SPAS)** の **Asian Studies**
- ※④以外はそれぞれ学士・修士・博士プログラムを有している。SPASは学士と修士のみ

その他、リソースセンターとして④の下に⑤**The Center for Southeast Asian Studies (CSEAS)**があり、こちらでは資料や講演会、言語や地域研究に関する授業が提供されている。また大学の組織ではないがキャンパス内に⑥**East-West center**が設置されている。こちらはアジア・太平洋地域からの留学生や研究者を受け入れて、ハワイ大学で研究する上でのサポートを行っているほか、文化紹介のための展示や芸能上演イベントが実施される。

なお、これらの組織間を跨いだ形での研究も行われている。例えば、**Asian Theater** 専攻の学生が地域研究センターから博士論文の審査員を選ぶということがある。また今回出会った中では、インドネシアのカソリックについての人類学的研究の成果を、一部演劇作品として発表することを企画している院生や、民族音楽学と人類学にダブルメジャーしながら、インターカルチュラルな作曲プロセスを人類学的に分析しようとする学部生の例などがあつた。

【アジア・シアター専攻と民族音楽学専攻におけるインドネシア芸能】

上記のように、インドネシア芸能を行う研究組織は多様であるが、今回はインドネシア芸能が最も盛んに研究・教育されている **Asian Theater** 専攻および民族音楽学専攻に重点をおきながら調査を行った。両専攻においてはジャワ芸能研究に多くの蓄積がある。民族

音楽者の R. D. Trimillos 博士（名誉教授）によれば、ハワイ大学では、日本、中国、フィリピンなど、ハワイに大きな移民コミュニティの存在する文化圏の芸能の研究・教育が早くから行われてきたが、その次に導入されたのが、ジャワ芸能研究・教育であった。1971年頃、ジャワ・ガムランを購入。ジャワ人講師 H. Susilo 氏を迎え、当時米国中でもまだ数例しかなかったガムランの実技教育を開始した。

現在ではこれに、スマトラとバリの芸能が加わっている。スマトラのマーシャルアーツの要素を含んだ舞踊劇ランダイ研究の K. Pauka 博士がいるほか、博士論文執筆中で同校の非常勤講師も務める A. Reynolds 氏による、バリ芸能の創作過程に関する研究がある。

両専攻の特徴は、こうした芸能研究について（１）身体的な学びを重視すること（２）その成果を上演作品として提示する上演プロジェクト型プログラムがあること（３）そしてその成果をさらにアウトリーチ活動に用いていることの３点にある：

（１）身体的実践・学びの重視

両専攻においては、多様な実技科目が用意されている。その主要な目的の一つは、様々なジャンルの演劇・舞踊の表現方法を学ぶことで、学生の表現や発想の幅を広げることにある。しかし、両専攻の在籍者が必ずしも、パフォーマーを目指すわけではない。Pauka 教授によると、研究者や教育者、またアート・マネジメント系の進路を選ぶ者もいるが、そういった者たちの研究においても、身体的実践が重視されるという。自らが身体を動かしてやってみることで、当該芸能やその伝承者への敬意の気持ちが養われるほか、芸能の細かい部分についての理解も得られるという。それを実践せずに、分析すべきではないというのが Pauka 教授の見解であるが、その他の講師陣からも、実践に重きを置くハワイ大学の傾向がしばしば語られた。

米国の大学における民族音楽教育については、ポストコロニアルな状況下で、オリエンタリズム批判や文化表象批判を受けた内省的な検討が行われてきた（cf Solis 2004: 10-13）。非西洋人の文化（音楽）を西洋人が代表し表象することの孕む権力性・政治性が認識されるようになった（cf Solis 2004: 10-13）。加えて学問全般の傾向として、具体的かつ身体的な理解や表現よりも、抽象的な理論に、より価値を見出す風潮もある。これらに対し、ハワイ大学には、米国本土の傾向とは一線を画すアジア芸能重視・実技重視の取り組みが行われてきたという。人形劇の専門家であり、上述の⑥East-West center のキュレーターでもある M. Schuster 博士は、非西欧の芸能を対象化しすぎるあまり、それについて語りにくくなるという膠着した状態を指摘しながら、実際にやってみることの重要性を主張した。彼、そしてバリ芸能の実技レッスンを担当する先述の A. Reynolds によれば、ハワイという地理的に周縁部に位置するこの大学では、米国学术界の主流の傾向に関わらず、比較的自由にアジア芸能の実践が行われてきたという。

今回は、バリ舞踊、バリ演劇、バリ音楽の授業に参加したが、実際のクラスでは Asian Theater 専攻の学生はもちろんのこと、アジア地域研究や、人類学、また全くインドネシアと関わりのない、経済学専攻などの学生も履修していた。彼らは卒業に必要なパフォーマンス・クラスの単位として、これら芸能のレッスンの単位を数えることができる¹。

¹ 実技のクラスでは学部生から博士課程の院生までが共に学ぶ。またアジア系留学生も多い。

A. Reynolds による舞踊レッスンでは、動きや役柄を体系づけて分析的に解説する点が特徴的であった。男性舞踊および演奏練習では、彼女の夫でありバリ人の I Made Wijana 氏が中心となって進める²。次にこれらの実技クラスと深くかかわる上演プロジェクト型のプログラムについて述べる。



(2) 上演プロジェクト

シアター・舞踊専攻は、年に一度学内のホールでの大きな公演を企画する。日本、中国、東南アジア、そしてハワイの各プログラムが順番に4年に一度ずつ上演する。調査中には **Hawaiian theater** の本番、そして来年に予定されている、バリの影絵を応用した創作影絵劇 **ワヤン・リストラック (Wayang Listrik)** の準備が進行中であった。

これらのプロジェクトでは、1セメスターの正式なレッスンに加えて、エクストラの練習や夏季休暇中の練習も含め、多くの時間を費やして、上演作品を準備する。当該文化圏、あるいはハワイ島内のコミュニティーから芸家を講師として数か月招き、学生と共に上演作品を作り上げてもらう。オーディションをへて出演学生が選出され、また地元のコミュニティーからも出演者を受け入れ、作品は学内外の観客の前で有料公演として公開される。これまでは、英語による、歌舞伎、狂言、能、京劇、ランダイ、ワヤン（影絵）などが行われてきた。そして来年度にむけて用意されている創作影絵劇 **ワヤン・リストラック** とは、舞踊と影絵劇とライティングを融合させたものであり、米国人アーティストによって開発された最新の形式である。このことからわかるように、これらプロジェクトは必ずしも古典、伝統にこだわるものではなく、近代的な手法やアレンジも加えた作品となることもある。

ちなみに、調査時にちょうど公開されていた **Hawaiian Theater** は、フラダンスやハワイの独特の歌唱法を取り入れ、ハワイの神話をストーリーに用いた、3時間に上るハワイ語によるミュージカルであった。ハワイの演劇が、大学のメインの劇場で上演されるのは今回が初めてのことであり、“**Lā‘ieikawai.**”と



² 楽器演奏の授業はその補講も含めると、2時間～2.5時間の練習が週に3回用意されており、かなり集中的なものであった。

題されたこの作品は **Department of dance and theater** にとって歴史的な出来事になるとも言われていた。通訳を全くはさまず、全てハワイ語で上演したが、観客席には、ハワイ先住民の方々が多くいたと思われ、ハワイ語でのジョークに反応するたくさんの笑いが聞かれた。



<写真出典> <http://www.hawaii.edu/kennedy/>

このように上演プロジェクトは、出演者や観客として、大学外の人々を巻き込んだ形で展開する。そして次に述べるように、芸能を通じた大学と社会との関わりは、学内での上演終了後も、アウトリーチ活動として展開する。

(3) 地元社会との関わり重視—アウトリーチ活動

Ricardo D. Trimillos 博士によると、50年代に米国の大学で民族音楽の実技(演奏)が始まった当初、その目的は研究者自身の音楽理解を深めることにあった。しかし、80年代以降、大学における民族音楽の演奏実践は、様々な効果・貢献を期待されるようになった。それは、例えば、多文化主義(および異文化理解)の実現や、学内における民族音楽学部の活動のアピール、そして地元のエスニック・コミュニティとの連携といったものである(Trimillos 2004: 24-25)³。今回見学したバリおよびジャワの芸能のレッスンでは、ハワイ在住のインドネシア人を含む、一般住民の参加が複数みられた。自分の子どもにバリ文化を学ばせたくて連れてくる、ハワイ在住のバリ人もいた。大学の民族芸能教育やその上演は、大学と地域社会との接点、そして地元のエスニック・コミュニティにとっての文化伝承でもある。

そしてハワイ大学の民族音楽学部およびシアター・舞踊学部では、地元や周辺の島の小学校、中学校、高校へ出向いての上演やワークショップを実施するアウトリーチ活動が重視されている。バリ芸能に関しても、来年度の大型プロジェクトの終了後、作品の一部やその他の演目を用いながらアウトリーチ活動を行うことが計画されていた。3月より、K. Pauka 教授によってクラウド・ファンディングによる資金調達が始まった。大学はアウトリーチ活動への予算を供給しているが、教員側はその規模を超えた活動を希望しており、インターネットを通じて一般社会に広くその資金を募ろうと試みている⁴。

³ ハワイ大学の民族音楽学プログラムもまた、多民族が集うこの大学において、民族的アイデンティティや民族的遺産を肯定することを目指していた(Trimillos 2004: 25)。

⁴ <https://www.classy.org/events/bring-balinese-performing-arts-to-hawaii-schools/e41645>

【おわりに】

ハワイ大学からはバリ芸能を含めアジア芸能研究者とその研究業績が生まれていたが、今回その背景にある、ハワイという土地柄を反映した、アジア地域重視、実技重視のプログラムの存在を知ることができた。また実際の非常に熱気を帯びた実技練習にふれることもできた。実技を学び、現地出身の芸能家および学生と共に創作活動を行うという研究方法が、研究の成果にどのように影響しているのかは興味深い点である。今回 Pauka 教授および Reynolds 氏と筆者とでパネル発表などで協力してゆく計画が生まれた。こうした研究交流も通じて今後考えてゆきたい。

【参考文献】

- Ricardo, D. Trimillos. 2004 Subject, Object, and the Ethnomusicology Ensemble: the Ethnomusicological “We” and “Them”. In Solis, Ted. ed. *Performing Ethnomusicology: Teaching and Representation in World Music Ensembles*, University of California Press.
- Solis, Ted 2004 Teaching What Cannot Be Taught: An Optimistic Overview. In Solis, Ted. ed. *Performing Ethnomusicology: Teaching and Representation in World Music Ensembles*, University of California Press.

(吉田ゆか子)

資料 2. RA による研究動向調査報告書

先史アマゾンニア社会に関する研究動向調査

井上 恭平

1. 研究目的

本調査は、近年における先史アマゾンニア¹社会の研究動向について、先行研究に関する資料を渉猟し、その把握を行うものである。

アマゾンニアにおける人類学研究は、先住民社会を対象とした文化人類学的研究を中心に、ヨーロッパ接触以降に記された文献記録をもとにした歴史学的研究など多岐にわたる。しかしながら、ヨーロッパとの接触以前である先史アマゾンニアに関する発掘調査、研究は、1990年代に入るまで大きく着目されてこなかった。これには、1940年代から80年代にかけてパラダイムを形成していた新進化主義の影響が指摘できる。新進化主義の骨子となる文化生態学的視点では、熱帯低地を特徴とするアマゾンニアの生態条件は、人類が複雑で大規模な社会を築くには制限が大きく不可能であるとされてきた (Meggers 1971, Myers 1993)。これは主に、複雑な社会を築くために不可欠な集約的な定住農耕 (Bellwood 2004) を行うためのポテンシャルを熱帯低地の生態環境は持ち合わせておらず、その厳しい環境に「適応」した小規模社会に留まるか、あるいはある程度の規模の社会を形成しても、押し戻されてしまうためである。こうした見解は、国家形成論に傾倒していた当時の先史社会研究の関心からアマゾンニア先史社会を除外するとともに、その社会・文化適応が先史においても、現在の先住民社会においても、根本的には同質であるとまで見なされた (Meggers 1971)。その結果、先史アマゾンニア社会の人々は「未開の処女地」に自然と調和して生きる「高貴な野蛮人」 (Denevan 1992) として位置付けられることとなった²。

しかし90年代に入り、それまでの見解に反する調査成果が次第に提示され始めると、定説に対し修正を促す研究者たちが台頭を始める。これらの研究者によれば、先史アマゾンニア社会の人々は、厳しい生態環境に一方的に制限されながら「適応」していたのではなく、積極的に生態環境を「改変」し、人工的な景観を熱帯低地に創造していたと主張する (Erickson 2008, 実松 2004)。そして、その独自の複雑性の在り方とプロセスを重要視している (Heckenberger and Neves 2009)。

本調査は、90年代以降に転換を迎えた先史アマゾンニア研究の近年の動向について、主に国立民族学博物館附属図書館の資料を用いて先行研究の渉猟³を行うことでその把握を行う。これにより、先史アマゾンニア社会への研究姿勢と人類学における位置づけ、そして生態環境と人類社会の関係に関する動態論の検討を行うための一助となることを目指す。

¹ 南米9か国を流れるアマゾン川とその支流の流域を指し、西はアンデス山脈の東斜面、北はギアナ高地、南はブラジル高原を含む地理的領域である (実松 2010)。また、「先史アマゾンニア」とは新大陸の諸社会とヨーロッパの接触以前の時期を指す。新大陸の中でも地域により直接的な接触時期は異なるが、本稿では便宜的にコロンブスの到来する1491年までを対象とする。

² この説は広く受け入れられ、当時のアマゾンニアの環境破壊や先住民問題に対して一般社会の関心を集めることに繋がったという点では高く評価されている (Man 2005)。

³ 本調査で扱う言語は日本語、英語、スペイン語とする。

2. 調査結果報告

先述のメガーズが示した、先史アマゾニア社会の複雑化における環境制限の重視に対し、90年代以前より疑義を唱える研究は存在したものの⁴ (Lathrap 1970, Denevan 1976, 1987)、先史アマゾニア研究の主流を形成するまでには至らなかった。これらの研究への着目と従来の見解に問題を投げかける大きなきっかけとなったのは、ルーズベルト夫妻によるアマゾン川河口のマラジョ島の発掘の果たした役割が大きい。メガーズ夫妻も40年代に同地で発掘を行っており、島に残る大規模な集落跡に対して、中央アンデスからの移住者が築いた短命な社会であったことを指摘していた (Meggers and Evans 1957)。しかし、90年代当時の最新技術を用いたルーズベルト夫妻の調査では、中央アンデスに由来した集団ではなく、在地集団による、非常に長命で複雑な社会であったことが提示された (Roosevelt 1991)。また、マラジョ島に続いて行われたサンタレンに位置する洞窟遺跡ペドラ・ピンターダの調査では、B.C.11000に遡る、南米でも最古級の居留地であることが明らかにとなった (Roosevelt, Lima da Costa, Lopes, Michab, Mercier et al. 1991)。さらにその上に堆積する包含層からは、B.C.6000に比定された土器が出土し、アマゾニアに南北アメリカでも最古の土器伝統が存在したことが示された (Roosevelt, Imazio, Maranca, and Jhonson 1991, Roosevelt, Lima da Costa, Lopes, Michab, Mercier et al. 1991)。新機材を用いたより実証的な調査に基づくルーズベルトの発見や提示した社会像は、先史アマゾニア社会に対する新たな視点を提供するものであったと評価できる。

先史アマゾニア考古学が着目されてこなかったもう一つの理由として、熱帯低地における考古学の方法論的な問題が挙げられる。アマゾニアでは、地形形成上の理由により‘石材’が非常に乏しい、あるいは地域によってはほぼ存在しない (Lathrap 1970)。したがって土製品では代用できない物質文化の多くが有機物で形成されるが、高温多湿と多量の降雨、毎年の川の氾濫と頻繁に発生する流路の変更は考古資料の保存という観点では大きな問題となる (Stahl ed. 1995)。しかし、ルーズベルトが導入した新しい調査機材のほか、人骨のコラーゲン分析 (Norr 1995)、動植物の理化学分析技術の導入 (Piperno 1995, Stahl 1995, Ubelaker 1995) などにより、様々な方法論がアマゾニア考古学でも実践されるようになっていく (Pearsall 1995)。他地域の先史考古学に比べ資料的な制約が大きなことには現状にも変化はないものの、その障害は改善されつつあると言えよう。これにより、アマゾニアに含まれる各国において、ブラジルを除いては周辺的な扱いであることは否めないものの、徐々にではあるが研究の蓄積は継続してなされているように思われる。

90年代を転換点とし、それ以前の社会像に疑義を投げかけた先史アマゾン研究であるが、近年の研究の特徴として顕著な傾向が、生態環境の社会に対する制限への適応ではなくヒトの積極的な生態改変、ないし景観改変である (Bray 1995, Balée and Erickson 2006, Hechenberger, Russell, Fausto, Toney and Schmidt et al. 2008, Moran 1993, Neves 2008)。この観点は、歴史生態学的の影響が大きいと指摘できる (Balée 1988)。これまで未開発の処女林であったアマゾニアの熱帯雨林やサバンナは、ヒトが長い時間をかけて介入して飼育慣らした景観 (domesticated landscape) であったとする歴史生態学の視点

⁴ Lathrap 1970 では、先住民が住居周辺の森林を徐々に有用樹に植え替えていく「家の庭」説が提唱されており、先史アマゾニア社会による生態改変への視点は、この時期から一部の研究者に重要視されていたことが伺われる。

(Balée 2006, Erickson 1995) は、先史社会におけるヒトと生態の関係の動態論という考古学的アプローチで解決すべき問題へと結びつく。研究者によりその見積もりは様々であるが、現在ではアマゾンの熱帯雨林の少なくない部分が直接的、間接的にヒトによって造り上げられたものであると主張されている (Balée and Erickson 2013, Clement 2006)。こうした研究では、歴史生態学者と考古学が共同研究を積極的に推進し、学際的な姿勢が見取れることが興味深い (Balée and Erickson 2006, 2013)。加えて、先史アマゾニアの人々は森林だけではなく、「テラ・プレータ」(*terra preta*) と呼ばれる土を生成し、土壌改良を行っていたことも明らかになりつつある (Oliver 2008, Neves, Petersen, Bartone and Silva 2003)。この土はリン、カルシウムなど農耕を行う上で重要な成分が多量に含まれるだけでなく、それら必要養分を吸着させる木炭が含まれており、高い生産性を持つ。多くの場合、この土には土器片が含まれていることから、人工的に生成されたものであることが指摘されているが、この土を含む土地がアマゾン中流域を中心に、アマゾン川に沿って広がる氾濫原地域において、かなりの範囲⁵に分布していることが指摘されている。

アマゾニアの氾濫原には、熱帯雨林地帯とは異なる景観を持つサバンナ地帯に区分される地域も存在する。その一つとして知られているボリビア、モホス平原においては、テラ・プレータの分布は確認されていないものの、居住用マウンド、耕作地跡 (raised field)、道路、人工の貯水池など大規模で大量の土木工事の痕跡から、複雑な農耕定住社会の存在が指摘されている (Denevan 2001, Walker 2008)。集約農耕に適切であるとは言い難いサバンナ地帯に広がるこれら土木工事の痕跡もまた、先史社会の人々による生態環境への介入、景観改変の視点から議論が提起されている (Erickson 1995)。モホス平原に関しては、ヨーロッパとの接触時点ですでに大規模な集約農耕は廃れていたと考えられており、それは今日においても同様である。つまり、先史社会とヨーロッパ接触以後とでの文化的断絶が強調される傾向があると指摘できる。一方で、接触以降に大きな社会変化があったことを認めながらも、先史社会からの文化的連続性に着目する研究も数多く存在する (Deboer 1995)。先史アマゾン研究が最も進展しているブラジルでは特にこの傾向が顕著であり、シングレー川上流域で調査を行っているヘッケンバーガーらの研究はその好例と言えよう (Heckenberger 2005, Fausto and Heckenberger 2006)。シングレー川上流での調査では、発掘調査と並行して先住民集団の社会組織に注意が向けられ、先史社会に存在した大規模な政体での複雑な社会階層の区分が、現代の小規模な先住民集団の中に残存していることを指摘し、考古資料の分析と解釈に組み込む試みがなされている。ヘッケンバーガーの主張する「連続性」は、熱帯低地での適応形態とその共通性に着目し、歴史的変化に十分な注意を払えなかった新進化主義の主張する「連続性」とは同じ言葉でも、接触以降の急激な社会変化に対する認識と、各地域の歴史的コンテクストを重視している点で大きく意味合いが異なっており興味深い。

以上の概括から、長期的スパンから見た人類の社会変化をテーマとした人類学研究として見た際、先史アマゾニア研究は以下の面で重要な意義を持つ。地域研究としての側面では、90年代以前の見解から脱却し、先史アマゾニアに存在した諸社会の見直しとヨーロッパとの接触が与えた影響の再考、そして先史から現代までの歴史的連続性の再評価が今後

⁵ 2~6 ha にかげ広がる場合が多いが、広いものでは 300 ha ほどの広がりを持つ例も存在する (Man 2005)

進展していくと考えられる。特に歴史的連続性について着目する場合は、たとえ先史社会研究であっても、ヨーロッパ接触以降に残される歴史文献と考古学データの比較分析が不可欠になると思われる。

そして人類史的意義としては、ヒトと生態環境の関係について新たな動態論に踏み込める大きな可能性を指摘できる。環境問題をはじめとする、自然と人間との関係の有り方が様々な文脈で問われている昨今、自然の破壊や収奪とも、過剰な保護とも異なる、生態の改変が繰り返り広げられていた先史アマゾンから得られる知見は大きな意義を持つと考えられる。

参考文献

Balée, William.

1988 *Advances in historical ecology*, Columbia University Press, New York.

2006 'The research program of historical ecology', *Annual Review of Anthropology* Vol.35:75-98.

Balée, William and Erickson, Clark L. (ed.)

2006 *Time and Complexity in Historical Ecology: Studies in the Neotropical Lowlands*, Columbia University Press, New York.

2013 *Cultural forests of the Amazon : a historical ecology of people and their landscapes*, University of Alabama Press, Tuscaloosa.

Bellwood, P.

2004 *The First Firmers: The Origins of Agricultural Societies*, Wiley-Blackwell, London (長田俊樹・佐藤洋一郎監訳、『農耕起源の人類史』、京都大学出版会)

Bray, Warwick.

1995 'Searching for environmental stress: climatic and anthropogenic influence on the landscape of Colombia', in *the lowland American tropics : current analytical methods and applications*, edited by Peter W. Stahl, pp. 96–112. Cambridge University Press, Cambridge.

Clement, C.

2006 'Frute tree and the transion to food production in the Amazon.', in *Time and Complexity in Historical Ecology: Studies in the Neotropical Lowlands*, edited by Balée W. and Erickson L., pp.85-165, Columbia University Press, New York.

Deboer, Warren R.

1995 'Returning to Pueblo Viejo: history and archaeology of the Chachi (Ecuador)', in *the lowland American tropics : current analytical methods and applications*, edited by Peter W. Stahl, pp. 243–262. Cambridge University Press, Cambridge.

Denevan, William M.

1976 *The native population of the Americas in 1492*, University of Wisconsin Press, Madison.

- 1987 *Swidden-fallow agroforestry in the Peruvian Amazon*, New York Botanical Garden.
- 1992 'The Pristine Myth: The landscape of the America in 1492.' *Annals of the Association of American Geographers*, 82:369-85.
- 2001 *Cultivated landscapes of Native Amazonia and the Andes*. Oxford University Press Inc., New York.
- Erickson, Clark L.
- 1988 *An archaeological investigation of raised field agriculture in the Lake Titicaca Basin of Peru*, University Microfilms International
- 1995 'Archaeological methods for the study of ancient landscape of the Llanos de Mojos in the Bolivian Amazon' in *Archaeology in the lowland American tropics : current analytical methods and applications*, edited by Peter W. Stahl, pp. 66–95. Cambridge University Press, Cambridge.
- 2008 'Amazonia: the historical ecology of a domesticated landscape' , in *Handbook of South American Archaeology*, edited by H. Silverman and W. H. Isbell, pp. 83-157. Springer, New York.
- Fausto C. and Heckenberger M. (eds.)
- 2006 *Time and memory in indigenous amazonia : anthropological perspectives*, University Press of Florida.
- Heckenberger, Michael.
- 2005 *The ecology of power : culture, place, and personhood in the southern Amazon, A.D. 1000-2000*, Routledge, New York.
- Heckenberger M. and Neves Eduardo Góes.
- 2009 'Amazonian Archaeology' *Annual Review of Anthropology* Vol.38:251-266.
- Heckenberger M. , Russell J. C. , Fausto C. , Toney J. R. , Schmidt M. J. , et al.
- 2008 'Pre-Columbian urbanism, anthropogenic landscapes, and the future of the Amazon.', *Science* 321:1214-1217
- Hornborg, Alf. and Hill, Jonathan(ed.)
- 2011 *Ethnicity in ancient Amazonia : reconstructing past identities from archaeology, linguistics, and ethnohistory*, University Press of Colorado.
- Lathrap, D. W.
- 1970 *The Upper Amazon*, Thames & Hudson, London.
- Man C.
- 2005 *1491: New Revelation of the Americans before Columbia*, Knopf.
- Meggers Betty J.
- 1971 *Amazonia: man and culture in a counterfeit paradise*, Aldine, Atherton, Chicago. (大貫良夫訳 1977 『アマゾンニア 偽りの楽園の人間と文化』, 岩波書店)
- Betty J. Meggers and Clifford Evans.
- 1957 *Archeological investigations at the mouth of the Amazon*, United States

Government printing Office, Washington.

Moran, E.

1993 *Through Amazonian Eyes: The Human ecology of Amazonian Populations*, Iowa University Press, Iowa City.

Myers, T.

1992 'Agricultural limitations of the Amazon in theory and practice.', *World Archaeology* 24(1):82-97.

Neves Eduardo Góes.

2008 'Ecology, ceramic chronology and distributions, long-term history, and political change in the Amazonian floodplain.', in *Handbook of South American Archaeology*, edited by H. Silverman and W. H. Isbell, pp. 359-379. Springer, New York.

Neves E. G. , Peterson J. B.

2006 'Political economy and Pre-Columbian landscape transformations in Central Amazonia.', in *Time and Complexity in Historical Ecology: Studies in the Neotropical Lowlands*, edited by Balée W. and Erickson L., pp.279-309, Columbia University Press, New York.

Neves, Eduardo G., James B. Petersen, Robert N. Bartone, and Carlos A. da Silva

2003 Historical and sociological origins of Amazonian dark earths. In *Amazonian Dark Earths: Origin, Properties, Management*, edited by Johannes Lehmann et al., pp. 29–50. Kluwer Academic, Dordrecht.

Norr, Lynette

1955 'Interpreting dietary maize from bone stable isotopes in the American tropics: the state of the art', in *the lowland American tropics : current analytical methods and applications*, edited by Peter W. Stahl, pp. 198–224. Cambridge University Press, Cambridge.

Oliver, J.

2008 'The archaeology of agriculture in ancient Amazonia.', in *Handbook of South American Archaeology*, edited by H. Silverman and W. H. Isbell, pp. 185-216. Springer, New York.

Pearsall, Deborah M.

1995 ' 'Doing' paleoethnobotany in the tropical lowlands: adaptation and innovation in Methodology', in *the lowland American tropics : current analytical methods and applications*, edited by Peter W. Stahl, pp. 113–129. Cambridge University Press, Cambridge.

Piperno, Dolores R.

1995 'Plant microfossils and their application in the New World tropics', in *the lowland American tropics : current analytical methods and applications*, edited by Peter W. Stahl, pp. 130–153. Cambridge University Press, Cambridge.

- Politis, Gustavo G.
 2006 'The different dimensions of mobility among the Nukak foragers of the Colombian Amazon', *Archaeology and ethnoarchaeology of mobility*, University Press of Florida.
- Posey, D. A. and Balée, W.
 1989 *Resource management in Amazonia : indigenous and folk strategies*, New York Botanical Garden, New York.
- Raymond, Scott J.
 1995 'From potsherds to pots: a first step in constructiong cultural context from tropical forest archaeology', in *the lowland American tropics : current analytical methods and applications*, edited by Peter W. Stahl, pp. 224–242. Cambridge University Press, Cambridge.
- Roosevelt, Anna C.
 1991 *Moundbuilders of the Amazon: Geophysical Archaeology in Marajó Island*, San Diego.
- Roosevelt, A. C. , Imazio, M. , Maranca S. , Jhonson R.
 1991 'Eight millennium pottery from a shell mound in the Brazilian Amazon.', *Science* 254:1621-1624
- Roosevelt, A. C. , Lima da Costa M. , Lopes Machado C. , Michab, M. , Mercier, N. , et al.
 1996 'Paleoindian cave-dwellers in the Amazon: the peopling of the Americas.', *Science* 272:373-84.
- 実松克義
 2004 『衝撃の古代アマゾン文明—第五の大河文明が世界史を書きかえる』、講談社、東京。
 2010 『アマゾン文明の研究—古代人はいかにして自然との共生をなし遂げたのか』、現代書館、東京。
- Schan, Denise P.
 2012 *Sacred geographies of ancient Amazonia : historical ecology of social complexity*, Left Coast Press, Walnut Creek.
- Siegel, Peter E.
 1995 'The Archaeology of community organization in the tropical lowlands: a case study from Puerto Rico', in *Archaeology in the lowland American tropics : current analytical methods and applications*, edited by Peter W. Stahl, pp. 42–65. Cambridge University Press, Cambridge.
- Snead, James E. , Erickson, Clark L. and Darling, Andrew J.
 2009 *Landscapes of movement : trails, paths, and roads in anthropological perspective*, University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology, Philadelphia.
- Stahl, Peter W.
 1995 'Differential preservation histories affecting the mammalian zooarchaeological

record from the forested neo tropical lowlands', in *the lowland American tropics : current analytical methods and applications*, edited by Peter W. Stahl, pp. 154–180. Cambridge University Press, Cambridge.

Stahl, Peter W.(ed)

1995 *The Lowland American tropics : current analytical methods and applications*, Cambridge University Press, Cambridge.

Ubelaker, Douglas H.

1995 'Biological research with archaeologically recovered human remains from Ecuador: methodological issues', in *the lowland American tropics : current analytical methods and applications*, edited by Peter W. Stahl, pp. 181–197. Cambridge University Press, Cambridge.

Walker, Jhon H.

2008 'The Llanos de Mojos', *Handbook of South American Archaeology*, edited by H. Silverman and W. H. Isbell, pp. 926-939. Springer, New York.

Zeider, James A.

1995 'Arcaheological survey and site discovery in the forested neotropics', in *Archaeology in the lowland American tropics : current analytical methods and applications*, edited by Peter W. Stahl, pp. 7–41. Cambridge University Press, Cambridge.

カリブ海域世界における人文地理学研究の動向

高木 仁

1. はじめに

本稿の目的は、カリブ海域世界における人文地理学の研究動向についての調査結果を報告することである。

カリブ海をふくむ熱帯、サンゴ礁海の人文地理学研究は南西諸島や東南アジア、オセアニアといった海域が研究対象となってきた。カリブ海域世界の研究は非常にすくない（例えば石塚編 1991）。以前、この地域の海産資源についてその研究動向を調査し日本地理学会で報告したのだが、この地域の情報は極めて限られており、その動向がとらえにくいと感じた（高木 2013）。そのため本調査では、博士論文の対象地域の特色（西カリブ、東ニカラグア海域）をつかむため、若干の陸域をふくめた広義のカリブ海域世界の人文地理学分野へと調査をひろげ、文献調査をおこなった。本稿ではその結果を報告する。

なお、紙面の関係上、収集したすべての文献の紹介はできないため、一部を抜粋したものを報告させていただくこととする。

2. 方法・対象

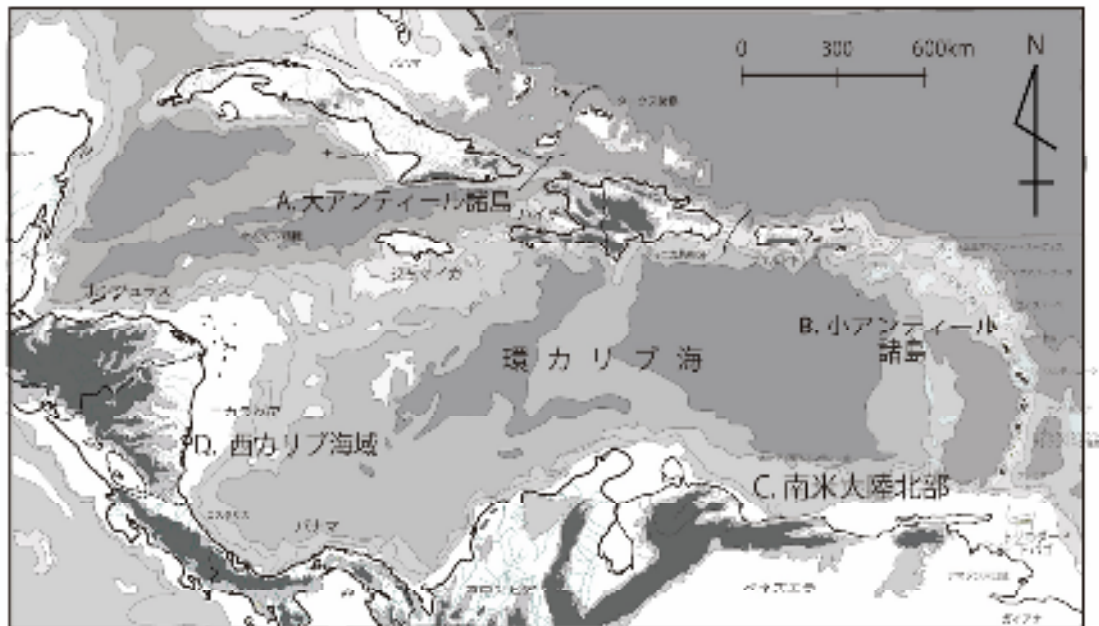
調査の方法はカリブ海域世界の人文地理学的研究の英語文献の渉猟である。調査対象は AAA Geographers (1911~2013)、The Geographical Review (1916~2013)、Human Ecology (1972~2013)、Journal of Latin American Geography (1996~2013) などを中心とした。また、補足として The Journal of Geography や Scottish Geographical Magazine、Caribbean Geography、The Geography などに残る論考もおった。

結果は 1) 大アンティール諸島、2) 小アンティール諸島、3) 南米大陸北部、4) 西カリブ海域に大別して記載した。次頁の図 1 にはこの地域分類を図示したので参考にさせていただきたい。報告の最後に博士論文の研究対象地である（4. 西カリブ海域、東ニカラグア海域）と他の地域（1~3）を比較し、その研究動向の特色について考察した。

3. 結果

1) 大アンティール諸島

A) まず、キューバであるが Vaughan and Spencer が記した「The Geography of Cuba」があった。紙面には山地、台地、河川流域、港についての概要が記載されている (Vaughan and Spencer 1902)。また Platt によるキューバ東北部の砂糖生産区 (The Geography of Sugar District) についての研究もかなり詳細で見逃せない (Platt 1929)。また、30~40 年代に経済地理学に投稿された 3 本の論文もみつけることができた。その内容はそれぞれ中央ハイウェイ (Foscue 1933)、サトウキビ生産 (Boyer 1939) やその農場の経営 (Tuthill 1949) についてであった。都市化 (Dyer 1957) や観光なども比較的近年では研究対象となっていたようである。



出典：原図は人文社『新世界大地図』の51. 中央アメリカ、西インド諸島。

図1. カリブ海域世界

B) 次にハイチである。研究は極めて少なかった。幾つかの古い文献は複写も入手できなかった。Hallによる「The Geography of the Republic of Haiti」(Hall 1930)、Plattによる「Cuba, Haiti and Santo Domingo」(Platt 1923)、Fennellによる「Rubber from Haiti」(Fennell 1944)などがあった。災害、病気や貧困といった研究のほうがめだっていた。

C) 地理学雑誌掲載のジャマイカの研究で特に目を引いたのは、農業地理についての研究であった。その概要は「Agricultural Geography of Jamaica」(Whitbeck 1932)や「Agriculture of Jamaica」(Floyd 1972)があった。小作人や農家の暮らしについての研究もあった(Ishemo, Semple and Thomas-Hope 2006、Beckford 2002、Beckford and Barker 2007)、天候の変化と耕作者の知識を論じたもの(Gamble et al 2010)や東部の河川流域の農耕地利用についての研究(Floyd 1970)などもあった。ジャマイカの一般的な植生についての研究(Asprey and Robbins 1953)や山地面の量的な植生分布についての研究(Tanner 1977)、その浸食作用を詳しく研究したもの(McGregor and Barker 1991)などもあった。幾つかの研究は、首都キングストンにある西インド諸島大学で発行されるCaribbean Geography誌に掲載されているものであった。

2) 小アンティール諸島

数多くの国家や地域があるが、かなり幅広い研究がおこなわれているようであった。例えばバルバドス島での研究は、都市計画についての研究(Potter 1983)から海岸の地形や陥没孔の研究まで幅ひろくあった(Bird et al 1979、Day 1983)。また、北部のサバ島やアンギラ島などではあまり情報がなかった一方、中部のセントビンセント島やマルティニーク島では幾つかの人文地理雑誌で研究があった(例えばAdams 1985の研究など)。幾つかの島では限られた土地の利用についても問題視されているようであった(Augelli 1953)。

海産資源については、タークス・カイコ諸島における巻貝交易の研究 (Doran Jr. 1958) をはじめ、この地域の資源量について水産学系の数多くの業績があがっているようであった (例えば CARICOM 機関はこうした諸島地域の漁業資源の共同管理についておおくの研究をつみかさねている)。熱帯の島嶼部の多様な生物種を対象とした進化についての研究もめだっていた。

3) 南米大陸北部

A) まず、ベネズエラであるが 1940 年代からすでに都市研究がはじまっていた。幾つか例をあげると、石油産業についての研究 (Corfield 1948)、急速な経済発展についての研究、環境汚染についても研究があった。都市部への人口移動 (Jones 1978) や西部地域の開拓 (Eastwood 1979)、不動産 (Mitchell 2000)、貧困や格差についても研究があった。

海に目を向けるとマルガリータ島という名の島での研究が幾つかあった。先住民の Guayqueri と呼ばれる人々が暮らす島らしいのだが、植民地支配の影響で島を出たり戻ったりしてきたりしているらしい。彼らの交易者としての役割が論じられてもいた (Alexander 1961)。島の海岸線の生物相についての研究もあった (Rodrigues 1959)。

ベネズエラの西部にはオリノコ川の河口があり、多くの研究者を惹きつけたようであった。その壮大な地域の概要は Hitchcock の「Orinoco-Ventuari Region」が詳しい (Hitchcock, Phelps and Galavis 1947)。下流域の三角州地形についての研究 (Warne et al 2002) や上流域では焼畑についての研究があった (Harris 1971)。そのいずれも至極詳細な研究であった。

B) 次にコロンビアであるが、海岸部はカリブ海岸都市部の発展史をおった研究があった。その中では各産物 (米やたばこ、バナナやコーヒー、牛肉) の交易や輸出についての史的な研究が展開されていた (Posada-Carbo 1996、Renner Jr. 1927)。

国を貫くマグダレナ川流域にかかわる幾つかの研究が見つかった。その概説は「River of Colombia」が詳しく (Townsend 1981)、それを挟む山地の研究にはシエラネバダ山脈についての研究やシヌ谷の住居「The settlement of the Sinu Vally of Colombia」についての研究 (Parsons 1952)、南米で注目を集めている古代農耕地跡「Ancient Ridged Fields of the San Jorge River Floodplain」についての報告 (Parsons and Bowen 1966) もあった。高低差がある国土における鉄道網や航空交通網についての研究もあった (Stokes 1959、Platt R, R 1926)。

4) 西カリブ海域



出典：原図は人文社『新世界大地図』の51。中央アメリカ、西インド諸島。

図2. 西カリブ海域の自治州

ニカラグアやホンジュラスの東は大陸棚 (Roberts and Murray 1983) がひろがり、複数の民族による共同の統治がおこなわれている。図 2 には東ニカラグアの自治州の位置をしめした。この地域では 1960 年代に東ニカラグアの内陸鉱山 (Parsons 1955a) やサバンナ地帯「Pine savanna of Nicaragua」 (Parsons 1955b)、サン・アンドレアス諸島 (Parsons 1956) などについて地理学関連の雑誌に論稿がのこっていた。海岸域では Nietschmann による極めて詳細な地誌と論考がのこっていた (Nietschmann 1972, 1973, 1979)。このミスキート族のアオウミガメに依存した自給的な暮らしについてのモノグラフの評価は高い (Denevan 2002)。ケイマン諸島の人文地理研究は古い研究が残っていた。

4. 考察

博論の研究対象地である東ニカラグアをふくむ 4 の地域は、1～3 の地域と比べるとその概要や農産物や土地、海上交通網などについての研究はまだまだすくないようである。

その理由は、ミスキートを中心とした複数の先住民族による統治下で農業や土地、交通網についての情報が比較的入手しにくいことが考えられる。4) の海域には広大な大陸棚がひろがっており、この熱帯サンゴ礁海域での先住民族の漁や海辺の暮らしやその環境は、他のカリブ海域世界 (1,2,3) との研究結果と異なる可能性があることを十分に考慮しなければならないだろう。

1,2,3 や 4 の東北ニカラグア以外の地域*1は博士論文の対象地域外であり、未だ訪れることもかなわない。そのため研究動向の調査も憶測の域を出ない部分がおおい。ただしざっと論稿を渉猟したところ、数こそは少ないがいくつかの研究は極めて重厚である。筆者を含め、この地域の研究を志すものには先行する研究から大きな課題が突きつけられているという印象をうけた。

*1 こうした地域は博論の研究対象地域外であるが、当該地域の人文地理学的研究の参考になればとおもい提示するに至った。記載漏れなどは多々あると思うが、どうかご容赦いただきたい。

【文献】

- Adams, J. (1985) The Fisheries and Fish Markets of St. Vincent Island, Eastern Caribbean. *Singapore Journal of Tropical Geography*, 6, (1) pp1-12.
- Alexander, C. S. (1961) Margarita Island, Exporter of People. *Journal of Inter-American Studies*, 3, (4), pp548-557.
- Asprey, G. F. and Robbins, R. G. (1953) The Vegetation of Jamaica. *Ecological Monographs*, 23, (4), pp 359-412.
- Augelli J, P. (1953) Patterns and Problems of the Land Tenure in the Lesser Antilles: Antigua, B. W. I. *Economic Geography*, 29, (4), pp 362-367.
- Beckford, C. L. (2002) Decision-Making and Innovation among Small-Scale Yam Farmers in Central Jamaica: A Dynamic, Pragmatic and Adaptive Process. *The Geographical Journal*, 168, (3), pp 248-259.

- Beckford, C, L. and Barker, D. (2007) The role and value of local knowledge in Jamaican agriculture: adaptation and change in small-scale farming. *The Geographical Journal*, 173 (2), pp 118-128.
- Bird, B, J. et al. (1979) Coastal Subsystems of Western Barbados, West Indies. *Geografiska Annaler. Series A, Physical Geography*, 61, (3), pp221-236.
- Boyer, J, M. (1939) Distribution of Sugar Cane Production in Cuba. *Economic Geography*, 15, (3), pp 311-325.
- Corfield, G, S. (1948) Recent Activities in Venezuela`s Petroleum Industry. *Economic Geography*, 24, (2), pp 114-118.
- Day, M. (1983) Doline Morphology and Development in Barbados. *AAA Geographers*, 73, (2), pp206-219.
- Denevan W, M. (2002) Bernard Q. Nietschmann, 1941-2000: Mr Barney, Geographer and Humanist. *Geographical Review* 92, (1) pp. 104-109.
- Doran, E, Jr. (1958) The Caicos Conch Trade. *Geographical Review*, 48, (3) , pp 388-401.
- Dyer, D. (1957) Urbanism in Cuba. *Geographical Review*, 47, (2) , pp 224-233.
- Eastwood, E,A. (1979) The Méridan Lowlands of Venezuela: A Waste of Agricultural Potential. *Geography*, 64, (3), pp182-189.
- Fennell, T, A. (1944) Rubber from Haiti – A Battle Against Time. *Journal of Geography*, 43, (4), pp 153-158.
- Floyd, B (1970) Agricultural Innovation in Jamaica: The Yallahs Valley Land Authority. *Economic Geography*, 46, (1) pp 63-77.
- Floyd, B (1972) Agriculture in Jamaica. *Geography*, 57, (1) pp 32-36.
- Foscue, E,J. (1933) The Central Highway of Cuba. *Economic Geography*, 9, 406-412, pp 63-77.
- Gamble, D, W. (2010) Climate Change, Drought, and Jamaican Agriculture: Local Knowledge and Climate Record. *AAA Geographers*, 100, (4), pp880-893.
- Hall, R, B. (1930) The Geography of the republic of Haiti. *Scottish Geographical Magazine*, 46, (3), pp 140-152.
- Harris, D, R.(1971) The Ecology of Swidden Cultivation in the Upper Orinoco Rain Forest, Venezuela. *Geographical Review*, 61, (4), pp 475-495.
- Hitchcock,C,B. Phelps Jr, W, H., Glavis, F, A.(1947) The Orinoco-Ventuari Region, Venezuela. *Geographical Review*, 37, (4), pp 525-566.
- Ishemo, A., Semple, H., and Thomas-Hope, E. (2006) Population Mobility and the Survival of Small Farming in the Rio Grande Valley, Jamaica. *The Geographical Journal*, 172,(4), pp 318-330.
- 石塚道子編 (1991) 『カリブ海世界』。世界思想社
- Jones, R, C. (1978) Myth Maps and Migration in Venezuela. *Economic Geography*, 54, (1) pp 75-91.
- McGregor, F, M, D. and Barker, D. (1991) Land Degradation and hillside farming in the Fall River Basin, Jamaica. *Applied Geography*, 11, (2), pp143-156.

- Mitchell, J. (2000) Political Decentralization, Municipal Fragmentation, and the Geography of Real Estate Investment in Caracas, Venezuela. *Urban Geography*, 21, (2), pp 148-169.
- Nietschman, B, Q. (1972) Hunting and fishing focus among the Miskito Indians, eastern Nicaragua, *Human Ecology* 1, pp. 41-67.
- Nietschman, B, Q. (1973) *Between land and water: The Subsistence Ecology of the Miskito Indians*, Eastern Nicaragua. New York: Sminar Press.
- Nietschman, B, Q. (1979) Ecological Change, Inflation, and Migration in the Far Western Caribbean, *Geographical Review*, 69, (1), pp. 1-24.
- Parsons J, J. (1952) The Settlement of the Sinu Vally of Colombia. *Geographical Review*, 42, (1), pp 67-86.
- Parsons, J, J. (1955a) Gold Mining in the Nicaragua Rain Forest. *Yearbook of Association of Pacific Coast Geographers*, 17, pp 49-55
- Parsons, J, J. (1955b) The Miskito Pine Savanna of Nicaragua and Houduras. *AAA Geographers*, 45, (1), pp 36-63
- Parsons J, J. (1956) San Andres and Provincia, English-speaking islands in the western Caribbean. *University of California, Publishing of Geography*. 12.
- Parsons J, J. and Bowen W, A (1966) Ancient Ridged Fields of the San Jorge River Floodplain, Colombia. *Geographical Review*, 56, (3), pp 317-343.
- Platt R, R. (1926) Railroad Progress in Colombia. *Geographical Review* 16 (1), pp 82-97.
- Platt R, S. (1923) Cuba, Haiti and Santo Domingo. *Journal of Geography*, 22, (1), pp 20-26.
- Platt R, S. (1929) Geography of Sugar District: Mariel, Cuba. *Geographical Review* 19 (4), pp 603-612.
- Posada-Carbó, E. (1996) *The Colombian Caribbean: a regional history, 1870-1950*. Oxford University Press.
- Potter, R, B. (1983) Tourism and Development: the case of Barbados, West Indies. *Geography*, 68, (1), pp 46-50.
- Renner G, T. Jr. (1927) Colombia`s Internal Development. *Economic Geography* 3(2) pp 259-264.
- Rodriguez, G. (1959) The Marine Communities of Margarita Island, Venezuela. *Bulletin of Marine Science of the Gulf and Caribbean*, 9, (3), pp237-280.
- Roberts H, H. and Murray S. P. (1983) Controls on Reef Development and the Terrigenous - Carbonate Interface on a Shallow Shelf, Nicaragua (Central America). *Coral Reefs*, 2, (1) pp 104-109.
- Stokes C,J (1959) The Freight Transport System of Colombia, 1959. *Economic Geography* 43 (1) pp 71-90.
- 高木仁 (2013) 「熱帯の先住民社会における海洋資源の利用と管理に関する研究動向ーカリブ海を中心としてー」。2013年度、日本地理学会秋季学術大会、発表要旨集。
- Tanner, E, V, J. (1977) Four Montane Rain Forests of Jamaica: A Quantitative

- Characterization of the Floristics, The Soil and the Foliar Mineral Levels, and a Discussion of the Interrelations. *Journal of Ecology*, 65, (3), PP 883-918.
- Townsend, J. (1981) Magdalena, The River of Colombia. *Scottish Geographical Magazine* 91 (1). pp 37-49.
- Tuthill, R, L. (1949) An Independent Farm in Cuba. *Economic Geography*, 25, (3), pp 201-210.
- Vaughan and Spencer (1902) The Geography of Cuba. *Bulletin of the American Geographical Society*, 34, (2), pp105-116.
- Warne, A,G. (2002) Regional controls on geomorphology, hydrology, and ecosystem integrity in the Orinoco Delta, Venezuela. *Geomorphology*, 44, pp273-307.
- Whitbeck, R,H. (1932) The Agricultural Geography of Jamaica. *AAA Geographers*, 22, (1), pp13-27.

台湾の原住民族群における平埔族の文化復興運動と現状に関する 研究動向調査

呂怡屏

1. 調査の目的

本調査の目的は、分類の基準が曖昧のままであった台湾の平埔族が分類されてきた過程を辿って、近代台湾政府がどのように平埔族を扱ってきたのか、また、公式的には分類がされてこなかった平埔族が民族的アイデンティティを形成する際に、おこなわれた文化復興の活動の現状と研究動向を調査することである。具体的に、本調査は台湾の平埔族の中でも特にクヴァラン族とシラヤ族の事例を取り上げ、関連の文献を概観する。

2. 平埔族とその分類

平埔族とは、単一の民族の名称ではなく、台湾原住民のうちの幾つかの民族を総称する名称であり、漢族文化の影響を強く受けた諸民族を指して用いられる。1900年に伊能嘉矩が平埔族の生活地域に着目すると共に、台湾全域の原住民族調査をおこなった(笠原 2012)。その調査に基づいて、人類学分野において「平埔族」という名称が公式に使用されるようになった。一方で、当時の行政体系の戸籍登録に「種族」分類があり、平埔族はまた「熟蕃」と称された(松岡 2014)。この行政的な分類が各民族集団の存在を示すだけでなく、統治者による社会へのコントロールの力も示されたという(詹 2005)。1945年以後、中華民國政府はこの分類に基本的に従った。しかし、この段階では、平埔族の人々は先住民族として法的にその身分を保障されなかった。

しかし、その分類の基準は統治者の支配に服しているか、税を納めるかどうか、漢化の度合いの強さなど、流動的な要素と曖昧さを含んでいる(清水 1998: 120 - 121)。そのため、平埔族の研究をおこなう際に、最も難しい課題の一つは、どの集団の人が平埔族だと言えるのかという問題である(潘 1995)。民族の漢化が進んで、平埔族の固有文化・言語とも消失し、分類に必要な民族学的・言語学的資料に乏しいことがもっとも大きな原因である(森口・清水 2002)。したがって、平埔族の民族分類および民族数については、台湾と日本の研究者の間で一致した見解も得られていない。

現在、学術の分類¹⁾によるとほとんどが、クヴァラン(噶瑪蘭)、ケタガラン(凱達格蘭)、タオカス(道卡斯)、パゼッヘ(巴宰)、パポラ(拍瀑拉)、バブザ(巴布薩)、ホアニヤ(洪安雅)、シラヤ(西拉雅)、カハブ(噶哈巫)といった、いくつかの民族集団に区分できる(陳等 2013:16)。

3. 平埔族研究の概観

台湾の平埔族に関する研究は三つの時期に分けられる。(1) 1900年～1945年日本の研究者、例えば伊能嘉矩、小川尚義、国分直一、鹿野忠雄などは、宗教と言語や音楽を調査、記録した。(2) 1950年代～1970年代に、李亦園、陳漢光、劉枝萬、劉斌雄らは二十世紀初頭の成果を踏まえて、歴史資料も視野に入れて基礎研究を進めた。(3) 1980年代から平

¹⁾ 日本の人類学者と言語学者は、馬淵東一の民族分類を支持している。馬淵の分類は、クヴァラン、バサイ、ケタガラン、タオカス、パゼッヘ、パポラ、バブザ、ホアニヤ、サオ、シラヤの十民族である。

埔族の研究が再開された。この時期台湾における人類学や歴史学の研究者は台湾の歴史と平埔族の位置づけに関心を持っていた。歴史学、地理学、考古学、言語学、人類学、民族音楽学などの分野——特に歴史学と人類学——が平埔族に関わる研究を始めるようになった（潘 1995；莊英章主編 1988）。

1970年代以後、歴史学の研究は、歴史的文献と土地買収時に交わされた契約書などの資料を用いて、漢人と番人の相互関係（石文誠 2001、2002）、及び国家制度がどのように熟番社会の構造に影響を与えたのかという力学的関係を重視している。それらの中には、熟番が漢人と「生蕃」（平埔族に分類されない原住民族）の間に移住させられたことによって、結果として原住民族と漢族との境界が強化されるようになった現象に関する研究がなされた（洪 2009a）。また、1990年代以後、歴史学における平埔族の研究は、開発を強いられた者という開発史観の視点から、研究されるようになった（王 2006）。

人類学的研究では、時間ごと、空間ごとや各地域に分布する民族集団を分けて、研究が進められてきた。例えば衛惠林と謝繼昌が中部の埔里を調査した。石萬壽（1990）、邵式柏（1987）、潘英海（1994）、山路勝彦（1996、1998、1999、2003、2010）、Brown（1996、2004）や段洪坤（2007）らが南部のシラヤ族に関する調査をした。また、阮昌銳、李壬癸、土田滋（1970、2005）、清水純（1991、2014）、劉璧榛（2010a、2010b）らが東部のクヴァラン族に関する研究もおこなってきた。最近、シラヤ族の衣装に関する物質文化の分野の専門著作も出版された（胡 2014）。さらに、調査のみならず歴史文献をも活かした研究がなされるようになった（詹 1988）。これらの研究テーマに、平埔族が二十世紀末に向き合うべき課題と直接に関連しているのは、原住民族運動と各民族集団のアイデンティティ形成の研究である。

4. 平埔族の原住民族運動

第二次世界大戦後から台湾全土に布かれていた戒嚴令が解除される 1980年代まで、台湾政府による原住民族に対する施策はおもに「山地の平地化」というスローガンのもとに、彼らの生活水準を引き上げる活動、および文化的同化政策というものだった。その一方、80年代半ばから活発化した台湾社会全体での民主化の進行、および台湾ナショナリズムの台頭という背景の下で、台湾原住民もまた自分たちの社会的地位の改善を目指す社会運動を開始した。最初は 1984年に「台湾原住民権利促進会」を設立し、「山胞」という言い方を「原住民」という名称に変える運動であった。この動きは、原住民の主体性への自覚とも言える（林 2006）。

1997年に中華民国憲法改正により「原住民族」という言い方が定められた。2003年に、漢族の氏名と共に原住民族としての名前も登録でき、原住民族の姓名権を保つことができるようになった（抜路兒 2008；黃・章 2010）。ただし、憲法において「原住民族」として認めたものの、それは「中華民族」の下位区分に過ぎないという位置づけだった。中央政府による「マイノリティの保護・救済」というスタンスでは、台湾原住民の自治権・自己決定権を実現することには、多くの困難が存在するのである（石垣 2014）。

また、台湾において法的地位を確保した原住民族の権利回復運動が進む一方で、まだ中央政府から原住民族としては認定されていない平埔族がいるという現実がある。その一番の理由としては長期的に外来勢力や主流文化と接触してきたことによって、それぞれの平埔族のもつ固有の文化要素が薄くなってきたことが指摘された（清水 2014；日本順益台湾

原住民研究会 2002)。しかし、平埔族としての意識が完全に消失したとも言えない。1990年代民主化以降の傾向として、平埔族に分類された各民族を自称する人々は増加の傾向がある（森口・清水 2002）。民族的アイデンティティを形成するための文化復興運動も徐々に始まっている。

だが、この流れの中に、行政的な要素も考えなければならない。政府が定める文化政策と補助金の支給方法により、行政側は各民族集団との間に新たなネットワークが生じた。各民族集団の文化活動に関する主動性を引き出せる一方で、先住民族全体の文化イメージは国家により再構築されるという政策の二面性も指摘された（劉璧榛 2010a）。このような内部の自己認識と外部の環境が変化しつつある状況で、平埔族の人々は民族としての意識を高め、民族の存在を社会的にも認知されたいという要望を強めていった。次にこの文化復興運動に関する研究を具体的に紹介していくことにする。

5. クヴァラン族の文化復興

台湾の行政院は 2002 年にクヴァラン族を「原住民族」の一族であると認定した。クヴァラン族は、自分たちの法的地位を初めて獲得した平埔族である。その認定の内容として、住民の伝統文化と言語の残存状況だけでなく、民族意識の高さも重要視されていることが注目される。また、この点で、政府側の民族政策が従来に比べて大きく変化したこともうかがわれる（清水 2003）。なお、クヴァラン族認定を受けた人々は、原住民族としての登録がすでになされていた花蓮県新社の村人に限定されるという条件がついた。

クヴァランは学術的に古くから認知されてきた原住民のグループであるというだけでなく、新社村におけるクヴァランの子孫たちは、漢化されたものの、祖先を祭る伝統的な儀式をもつため、自分たちのことをクヴァラン族であるという強い自己認識を持っている。このことは彼らの文化変容とアイデンティティの形成を考察する上で、注意すべき要素である（清水 1991a）。

清水（1991b）によれば、クヴァランの社会内部の枠組みから見て、1980年代半ばから、自分たちの文化の消滅という危機感が背景となって、クヴァラン族の知識人が先頭に立ち、民族名称回復の運動が生み出されてきたのである。彼らは自発的な民族文化再生——儀礼、言語、民族舞踏と衣装——の活動を始めた。活動を通して民族同士の個人的な関係を築き、漸進的にそれぞれのアイデンティティを構築した。

また、近年清水（2005a）は、彼らの文化復興運動が、政治と直結した側面をもち、文化活動の場に政党関係が入り込むだけでなく、場合によって政治的力関係と結びついた形で民族間の緊張関係が反映される場にもなりつつあるという考察をおこなった。

一方で、劉（2010b）の研究は、クヴァランの人たちが、外部社会と経済的視線をもって自分を一つの民族集団として再構築する過程、さらに国家の支援を得られる社会的カテゴリーになるメカニズムを明らかにした。

6. シラヤ族の民族的アイデンティティの現状

1990年代にシラヤ族に関する文化復興の事業が盛んになった。その中に、特に儀礼と言語が民族的アイデンティティを形成するために、多く用いられた（呉 2010；謝 2009）。このような文化復興運動の動きとともに、人類学的研究は生活と宗教の側面からシラヤ族のもつ民族的アイデンティティの現状に迫る。

Brown(1996)の研究は個人あるいは世代を考察の単位として、時間と空間の変化を考えながら、シラヤ族が漢民族化された二つの要因を説明した。一つはコミュニティ外部の漢人と結婚することによって、生活様式が漢族式に変わっていったことである。もう一つは、かれらの祖先がもともと中国から台湾に来たことによると主張している。それによって、彼らは自分たちの漢民族アイデンティティを徐々に形成していったという。山路勝彦(1998)は台南でシラヤ族の信仰の調査をすることによって、ある村に暮らしているシラヤ族の人たちの、自分が漢族か平埔族か不明確であるという、自己認識の不確定さを指摘した。続いて、段洪坤(2007)のアリツォ(祖先)を祀る家庭の調査によって、村に在住している世帯の87.9%がアリツォを祀っていたことが明らかになった。段はこの現象を正名運動と文化復興の文脈に置いて、民族的アイデンティティが高まったとみなした。これらの研究により、この十年間、シラヤ族の民族的アイデンティティが、主として信仰により、曖昧な状態から強くなったという傾向が明確になった。

7.今後の研究の展望

上述の文献から、これまでの研究動向とこれからの研究展望についてまとめる。民族分類の課題について、最初に平埔族に関して注目された『台湾蕃人事情』(伊能・栗野 2000)では、西部平地を中心に分布する多様な「ペイボ(平埔)族」の集団を、土俗の異同という基準によって、一つの種族にまとめている。しかし伊能は民族分類をする際に、該当住民のもつ帰属意識の有無について考慮しなかった(笠原 1998b: 32-33; 2012: 3-5)。実際に、先住民がもつ帰属意識を反映して、2001年以後、いくつかのエスニックグループはそれまで属してきた民族から独立し、中華民国政府に認定された。特に他の台湾原住民族と比べて、平埔族の人々の自己認識とアイデンティティは社会環境の変化にしたがい、常に流動的であるという複雑性をもっている(洪 2009)。民族分類を形成してきた学術調査とともに、そういった流動性を持つ当事者の間に生まれる相互作用についても問い直す必要性があると考えられる。

平埔族の文化復興と民族的アイデンティティの研究動向においては、概して、宗教と儀礼の記録に基づいた研究が主流だった。しかし、その中では、実践している人々の相互関係と相互作用について詳細に研究されているものはまだ少ない。これから、儀礼と年中行事などに参加する人々の動機および同じく民族の各集団の間の相互関係を比較し、まだ法的な原住民族としての身分をもっていない平埔族が置かれてきた特殊な状況を背景として、平埔族の人々の主体性および文化復興によって与えられ得る民族的アイデンティティの形成の可能性を描き出す作業が必要な工程である。

ところで、近年は伝統工芸品が平埔族の物質文化を代表するものとして取り上げられることが多い。そして、シラヤ族の物質文化を代表するものはおよそ博物館に収蔵されている。そのことから、平埔族の人々と外部社会にある博物館とがさまざまな関係を築いていく可能性や問題点を探ることも注目すべき課題である。

参考文献

[和文]

浅井・小川未整理資料の分類・整理・研究プロジェクト(代表土田滋)

2005 『小川尚義・浅井惠倫台湾資料研究』三尾裕子・豊島正之編集、東京：東京外

国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

石垣 直

- 2014 「現代台湾における原住民族運動——ナショナル/グローバルな潮流とローカル社会の現実」日本順益台湾原住民研究会『台湾原住民研究の射程 接合される過去と現在』東京：風響社。pp.77-105

伊能嘉矩・栗野伝之丞

- 2000 『台湾蕃人事情』。東京：草風館。(復刻版)

王雅萍著 (及川茜訳、石垣直校閲)

- 2006 「台湾原住民族史研究の回顧」『台湾原住民研究 日本と台湾における回顧と展望』東京：風響社。Pp. 29-53

笠原政治

- 1998a 「台湾原住民——その過去と現在」『台湾原住民研究への招待』東京：風響社。Pp.11-18

- 1998b 「研究史の流れ——文化人類学を中心に」『台湾原住民研究への招待』東京：風響社。Pp.29-50

- 2012 「台湾原住民族を俯瞰する：伊能嘉矩の集団分類をめぐって」『台湾原住民研究』16：2-25

清水純

- 1991a 「漢化のメカニズム—クヴァラン族の事例から—」『国立民族学博物館研究報告別冊 漢族と隣接諸族—民族のアイデンティティの諸動態—』14：299-328

- 1991b 『クヴァラン族——変わりゆく台湾平地の人々』京都：アカデミア出版会。

- 1998 「平埔族」『台湾原住民研究への招待』東京：風響社。Pp.120-125

- 2003 「クヴァラン族の「原住民族」認定」『台湾原住民研究』7：257-259

- 2005a 「クヴァラン民俗文化の再生における二面性——1980年代・1990年代の動向に関する調査」三尾裕子『民俗文化の再生と創造——東アジア沿岸地域の人類学的研究』東京：風響社。pp.103-136

- 2005b 「平埔」綾部恒雄 監修者、未成道男、曾士才 編者『講座 世界の先住民族—ファースト・ピープルズの現在— 01 東アジア』東京：明石書店。pp.106-123

- 2014 「台湾の民族構成」『画像が語る台湾原住民の歴史と文化 鳥居龍蔵・浅井恵倫撮影写真の探究』東京：風響社。pp：12-17

台北帝国大学土俗・人類学研究室編

- 1935 『台湾高砂族系統所属の研究』台北：出版者不明

陳 文玲 (国永美智子訳)

- 2006 「台湾平埔族の収藏品収蔵の現況及び「平埔族文物」に関する考察」『台湾原住民研究』15：26-47

陳 俊男 (及川茜訳)

- 2006 「サキザヤ (奇萊族) の民族認定」『台湾原住民研究 別冊 2 日本と台湾における回顧と展望』

土田滋

- 1970 「台湾の六龜附近に於ける「平埔族の言語」と称される言語について」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』11：31-32

日本順益台湾原住民研究会編

2002 『台湾原住民研究概覧 日本からの視点』東京：風響社。

松岡 格

2014 「日本統治下台湾の身分登録と原住民——制度・分類・姓名」『台湾原住民研究の射程 接合される過去と現在』東京：風響社。Pp.33-76

森丑之助

1917 『臺灣蕃族志』台北：臨時臺灣舊慣調査會

森口恒一・清水純

2002 「平埔族の研究」日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究概覧 日本からの視点』東京：風響社。pp：59-72

山路勝彦

1996 「文明との邂逅と平埔族の漢化」『台湾原住民研究』1：5-74

1998 「蜉蝣の認同、祖先からの出奔—漢族でもなく、シラヤ族でもなく(1)」『台湾原住民研究』3：15-53

1999 「憑依する巫女、原初への追憶と新たなる神々—漢族でもなく、シラヤ族でもなく(2)」『台湾原住民研究』4：41-97

2003 「女神たちの飛翔、歴史への癡痕—漢族でもなく、シラヤ族でもなく(3)」『台湾原住民研究』7：96-120

2010 「隠蔽されたマカタオ族の神々—漢族でもなく、シラヤ族でもなく(4)」『台湾原住民研究』14：25-36

山本春樹 [ほか] 編

2004 『台湾原住民族の現在』東京：草風館

林修澈

2006 「台湾原住民族研究の新趨勢—採蜜から養蜂へ」『台湾原住民研究 日本と台湾における回顧と展望』東京：風響社。pp：19-28

[中文]

石文誠

2001 「清代拍瀑拉(Papora)社群社址與社域範圍之探討」『臺灣風物』51(3)：113-140

2002 「清代拍瀑拉(Papora)地域內的平埔社群關係」『臺灣文獻』53(3)：125-155

石萬壽

1990 『台灣的拜壺民族』台北：台原出版社。

吳昭慶

2010 「從復振經認同到發展—一個平埔族村落的探索研究」修士論文。

邵式柏 (John R. Shepherd)

1987 「西拉雅族的阿立祖信仰」『臺灣風物』37(1)133-147

段洪坤

2007 「當代吉貝要西拉雅人的祀壺信仰與族群認同」『再現西拉雅學術研討會』會議論文(未出版)

洪麗完

2009a 『熟番社會網絡與集體意識——臺灣中部平埔族群歷史變遷』台北：聯經

- 2009b 「國家制度與熟番社會關係(1790-1895)：以清代臺灣番屯組織為例」『國家與原住民：亞太地區族群歷史研究』臺北市：中央研究院民族學研究所。pp：3-70
- 洪麗完、簡史朗
- 2010 「第七篇社會運動（二）：平埔文化復振運動」洪麗完主編『續修臺中縣志.社會志』臺中：臺中縣文化局。
- 拔路兒,夷將
- 2008 『台灣原住民族史料彙編』台北縣：國史館;台北市：原民會
- 胡家瑜主編
- 2014 『針線下的繽紛：大武壠平埔衣飾與刺繡藏品圖錄』高雄：高雄市政府歷史博物館
- 陳玉萃等（撰文）·石文誠·曾婉琳（編）
- 2013 『看見平埔：臺灣平埔族群歷史與文化特展專刊』臺南：國立臺灣歷史博物館
- 莊英章主編
- 1988 『台灣平埔族研究書目彙編』台北：中央研究院民族學研究所
- 黃樹民、章英華主編
- 2010 『台灣原住民政策變遷與社會發展』臺北市：中研院民族所
- 葉婉奇譯
- 1999 『重塑台灣平埔族圖像：日本時代平埔族資料彙編』台北市：原民文化
- 詹素娟
- 1988 「從中文文獻談平埔族研究」莊英章主編『台灣平埔族研究書目彙編』台北：中央研究院民族學研究所
- 2004 「日治初期臺灣總督府的「熟蕃」政策——以宜蘭平埔族為例」『臺灣史研究』11（1）：43-78
- 2005 「臺灣平埔族的身分認定與變遷（1895-1960）——以戶口制度與國勢調查的「種族」分類為中心」『臺灣史研究』12（2）：121-166
- 2009 「差異到混同：日治初期「帝國臣民」架構下的熟番社會」『國家與原住民：亞太地區族群歷史研究』臺北市：中央研究院民族學研究所。pp：71-104
- 潘英海
- 1994 「文化合成與合成文化——頭社村太祖年度祭儀的文化意涵」莊英章、潘英海編『臺灣與福建社會文化研究論文集』台北：中央研究院民族學研究所
- 1995 「平埔研究的再思考與再出發」潘英海、詹素娟主編『平埔研究論文集』臺北市：中央研究院臺灣史研究所籌備處
- 羅春寒
- 2008 『台灣平埔族群文化變遷之研究』北京：民族出版社
- 劉璧榛
- 2010a 「文化產業、文化振興與文化公民權：原住民族文化政策的變遷與辯論」黃樹民、章英華主編『台灣原住民政策變遷與社會發展』臺北市：中研院民族所。pp.405-459
- 2010b 「從部落社會到國家化的族群：噶瑪蘭人 qataban(獵首祭/豐年祭)的認同想像與展演」『臺灣人類學刊』8(2)：37-83
- 謝國斌
- 2009 「西拉雅族群認同的重新建構」『台灣原住民族研究季刊』2(4)：111-126

[英文]

Brown, Melissa J.

1996 On Becoming Chinese. In *Negotiating Ethnicities in China and Taiwan*. Ed. Brown, Melissa J., pp.37-74. Berkeley, CA: Institute of East Asian Studies.

2004 *Is Taiwan Chinese?: the impact of culture, power, and migration on changing identities*. Berkeley: University of California Press.

資料 3

平成 27 年度

大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立民族学博物館共同研究募集要項



申請にあたっては、共同研究（一般）と共同研究（若手）のどちらかを選択して申請してください。重複申請することはできません。

■ 目次

I. 共同研究（一般）

1. 共同研究（一般）の課題区分	3
2. 共同研究（一般）の構成	3
3. 共同研究会の開催場所	3
4. 共同研究（一般）の期間	3
5. 応募資格	4
6. 募集件数	4
7. 申請方法等	4
8. 採否	4
9. 経費	5
10. 研究成果の公開	5

II. 共同研究（若手）

1. 共同研究（若手）の課題区分	6
2. 共同研究（若手）の構成	6
3. 共同研究会の開催場所	6
4. 共同研究（若手）の期間	6
5. 応募資格	6
6. 募集件数	6
7. 申請方法等	6
8. 採否	7
9. 経費	7
10. 研究成果の公開	7

■ 目的

国立民族学博物館は、創設以来今日に至るまで、大学共同利用機関として、我が国の学術研究の総合的推進を目指し、文化人類学・民族学及び関連諸科学の発展に貢献する高度なレベルの共同研究を推進してきました。

近年、本館に対して、文化人類学・民族学及び関連諸分野を含む新しい研究の創出、一般社会から寄せられる期待への積極的対応が求められています。そのような多様な研究の推進をめざして共同研究を募集します。共同研究には一般と若手のふたつの区分を設けており、共同研究（若手）は、若手研究者を育成・支援することを目的としています。

I. 共同研究（一般）

1. 共同研究（一般）の課題区分

共同研究（一般）の課題区分は、次のとおりです。

課題 1. 文化人類学・民族学及び関連諸分野を含む幅広い研究。基礎研究や萌芽的研究も含まれます。

課題 2. 本館の所蔵する資料（標本資料、文献資料、映像音響資料等）に関する研究

2. 共同研究（一般）の構成

共同研究（一般）には、日本国内に在住する研究者（10～15名程度）が参加できます。

現在所属を有さない者（非常勤として勤務している者を除く。）及び研究職としての身分を有さない者については、略歴及び共同研究における役割についての説明書（様式任意）を添付してください。また、各共同研究構成員の共同研究への参加の可否については、申請前に申請者からあらかじめ内諾を取ってください。

研究代表者は、共同研究の推進を図り、研究計画の立案、参加者の選定、共同研究会の主宰、研究成果の取りまとめを行います。

なお、共同研究が採択されたときは、本館の専任教員がその運営を支援します（申請時に本館の専任教員が含まれている必要はありません。）。

特に必要があると認められた研究者については、共同研究会に特別講師として参加することができます。また、研究代表者に参加を許可された者については、特別聴講者として共同研究会に参加できます。

※特別講師には旅費が支給されますが、共同研究会を館外で開催する場合には旅費を支給できません。また特別聴講者には旅費の支給はありません。

3. 共同研究会の開催場所

共同研究会は原則として本館で開催することとします。ただし、研究上必要と認められる場合は、理由書を提出し、妥当と認められれば、本館以外（国内に限る。）で開催することも可能です。ただし、本館以外での開催の回数は原則として1回限りとします。また、共同研究会を公開で開催される場合は館長に事前に届け出てください。

なお、従来の共同研究では、年間3～6回程度の共同研究会が開催されています。

4. 共同研究（一般）の期間

研究期間は初年度を10月スタートとし、研究成果公開準備を含め3年半以内とします。延長は認められません。なお、3年半計画の場合、最終年度の研究会開催回数は3回まで、前年度実績の2分の1以内の予算規模で行っていただきます。

5. 応募資格

研究代表者が、代表して応募することとします。研究代表者は、大学その他の研究機関の専任の教授、准教授、講師、助教、助手、または、これと同等の研究能力があると館長が認めた者（ただし、本館以外の人間文化研究機構内の機関に専任教員として所属する者を除く。）です。長期海外出張等により実質上共同研究会の運営ができないことが見込まれる場合は、応募できません。

申請者が過去に共同研究の代表者であった場合には、研究成果が公開されていることを、申請の条件とします。

6. 募集件数

当該年度につき 5～10 件程度とします。

7. 申請方法等（共同研究（若手）と重複申請することはできません）

(1) 申請手続き

- ① 申請は、所定の様式による申請書を提出してください。所属を有する常勤研究者においては、所属機関の部局長の承認を得てください。
- ② 申請書の作成にあたっては、記入要領を参照してください。
- ③ 応募の際には、共同研究（一般）に参加される共同研究構成員の名簿を添えてください。

(2) 応募書類及び申請期限と申請方法

- ① 応募書類は、次のとおりです（応募書類は、国立民族学博物館ホームページからダウンロードできます。）。

ア 平成 27 年度国立民族学博物館共同研究（一般）計画申請書（様式 1-1（公募用））または
平成 27 年度共同研究（一般）申請書（様式 1-2（館内用）） 1 部

イ 研究業績書（様式 5） 1 部

ウ 現在所属を有さず（非常勤として勤務しているものを除く。）及び研究職として身分を有さない共同研究構成員の略歴及び共同研究における役割についての説明書（様式任意） 1 部

② 申請期限と申請方法

応募書類は、平成 27 年 4 月 17 日（金）までに必着するように、メール添付（下記電子メールアドレス）にて提出してください。また、所属機関の部局長の承認を得た承諾書（申請書 1 ページ目、原紙）は下記提出先へ郵送にて提出してください。なお、提出のあった応募書類は、原則として返却しません。

※ただし、本館の教員（客員教員及び特別客員教員を含む）及び本館の機関研究員においては、応募書類のイ研究業績書（様式 5）、及び所属機関の部局長の承認を得た承諾書（申請書 1 ページ目、原紙）は提出の必要はありません。

(3) 提出先

住 所：565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10 番 1 号

機関名：国立民族学博物館 管理部研究協力課 共同利用係

TEL 06-6878-8364

FAX 06-6878-8479

電子メール kyodo@idc.minpaku.ac.jp

ウェブページ URL

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project>

※申請書の作成にあたって不明な点がありましたら、書面または FAX により照会してください。

8. 採否

- (1) 採否は、本館の共同利用委員会及び運営会議を経て、館長が決定し、平成 27 年 7 月末までに、その結果を館長から申請者及び所属長宛に通知します。

なお、審査の過程におきまして、平成 27 年 6 月下旬開催予定（日程が決定次第、本館ウェブサ

イトで掲載します。)のプレゼンテーションへの出席を依頼する場合があります。プレゼンテーションに係る旅費は支給されません。

(2) 採否の判定は、共同研究(一般)の審査基準(別紙)により行います。

9. 経費

研究代表者、共同研究員、及び特別講師には、共同研究会の開催に要する交通費、日当、宿泊料が支給されます。また、必要に応じて、会場使用料(本館以外で開催の場合)を支給いたします。

※経費には、データベース化、デジタル化のための謝金及び調査のための経費は含まれておりません。

10. 研究成果の公開

(1) 研究代表者の義務

研究代表者は、下記について実施する義務があります。

ア 共同研究年次報告書(様式3)の提出(各年度末)

イ 共同研究実績報告書(様式4)の提出及び共同研究成果報告会での発表(研究終了時)

ウ 『民博通信』での研究内容の紹介、進捗状況の報告(原則、毎年)

エ 研究成果を取りまとめ刊行または発表(原則として研究終了後2年以内)

※なお、公開に際しては、本館共同研究の成果であることを明示し、当該刊行物や関連資料を国立民族学博物館管理部研究協力課共同利用係へ2部送付してください。

(2) 研究成果の内容

研究成果とは以下のものを指します。

ア 『国立民族学博物館論集』、あるいは Senri Ethnological Studies (SES)で刊行される論文集

イ 出版社等から刊行される論文集

ウ 特別展示、企画展示で刊行された論文集に相当する図録

エ 公開のシンポジウム、フォーラム、ワークショップ、学会分科会などの研究集会で刊行された、Proceedings か論文集

オ 代表者及びその他構成員が『国立民族学博物館研究報告』または学会誌(電子ジャーナルを含む)などに投稿した個別の論文

カ 特許

※特別展示、企画展示、ホームページ、データベース、資料集等は、研究成果の一部として認められますが、別に最終的な論文集等の出版が求められます。また、書評等、研究について、学会や社会から評価された資料を併せて提出してください。

※研究終了後、2年を経過した段階で、研究成果の公開状況について、調査を行います。

II. 共同研究（若手）

1. 共同研究（若手）の課題区分

共同研究（若手）の課題区分は、次のとおりです。

課題 1. 文化人類学・民族学及び関連諸分野を含む幅広い研究。基礎研究や萌芽的研究も含まれます。

課題 2. 本館の所蔵する資料（標本資料、文献資料、映像音響資料等）に関する研究

2. 共同研究（若手）の構成

現在所属を有さない者（非常勤として勤務している者を除く。）及び研究職としての身分を有さない者については、略歴及び共同研究における役割についての説明書（様式任意）を添付してください。また、各共同研究構成員の共同研究への参加の可否については、申請前に申請者からあらかじめ内諾を取ってください。

研究代表者は、共同研究の推進を図り、研究計画の立案、共同研究構成員の選定、共同研究会の主宰、研究成果の取りまとめを行います。

特に必要があると認められた日本国内に在住する研究者については、共同研究会に特別講師として参加することができます。また研究代表者に参加を許可された者については、特別聴講者として共同研究会に参加できます。

※特別講師には旅費が支給されますが、特別聴講者には旅費の支給はありません。

3. 共同研究会の開催場所

共同研究会は本館で開催することとし、館外での開催は認められません。また、共同研究会を公開で開催される場合は館長に事前に届け出てください。

4. 共同研究（若手）の期間

研究期間は初年度を10月スタートとし、研究成果公開準備を含め2年半以内とします。延長は認められません。

5. 応募資格

研究代表者が、代表して応募することとします。研究代表者は、申請時39歳以下の研究者で、共同研究を遅滞なく遂行する能力をもつものとします。研究代表者以外の共同研究構成員の条件については、特に定めませんが、その趣旨に添い、基本的には研究代表者と同様の年齢層の若手研究者等で構成されるものとします。長期海外出張等により実質上共同研究会の運営ができないことが見込まれる場合は、応募できません。また、本館以外の人間文化研究機構内の機関に専任教員として所属する者は応募することはできません。

一度、本館の共同研究（若手）に採択され実施した者は、再度、共同研究（若手）では応募できません。

6. 募集件数

当該年度につき3件程度とし、1件について年額70万円を上限規模とします（ただし、初年度は、年額の半分程度とします。）。

7. 申請方法等（共同研究（一般）と重複申請することはできません）

(1) 申請手続き

① 申請は、所定の様式による申請書を提出してください。所属を有する常勤研究者においては、所属機関の部局長の承認を得てください。

② 申請書の作成にあたっては、記入要領を参照してください。

③ 応募の際には、共同研究（若手）に参加される研究者の名簿を添えてください。

(2) 応募書類及び申請期限と申請方法

① 応募書類は、次のとおりです（応募書類は、国立民族学博物館ホームページからダウンロードできます。）。

ア 平成27年度国立民族学博物館共同研究（若手）計画申請書（様式1-3） 1部

イ 研究業績書（様式5） 1部

ウ 現在所属を有さず（非常勤として勤務しているものを除く。）及び研究職として身分を有さない共同研究構成員の略歴及び研究会における役割についての説明書（様式任意） 1部

② 申請期限と申請方法

応募書類は、平成27年4月17日（金）までに必着するようにメール添付（下記電子メールアドレス）にて提出してください。また、所属機関の部局長の承認を得た承諾書（申請書1ページ目、原紙）は下記提出先へ郵送にて提出してください。なお、提出のあった応募書類は、原則として返却しません。

※ただし、本館の教員（客員教員及び特別客員教員を含む）及び本館の機関研究員においては、応募書類のイ研究業績書（様式5）、及び所属機関の部局長の承認を得た承諾書（申請書1ページ目、原紙）は提出の必要はありません。

(3) 提出先

住所：565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10番1号

機関名：国立民族学博物館 管理部研究協力課 共同利用係

TEL 06-6878-8364

FAX 06-6878-8479

電子メール kyodo@idc.minpaku.ac.jp

ウェブページURL

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project>

※申請書の作成にあたって不明な点がありましたら、書面またはFAXにより照会してください。

8. 採否

(1) 採否は、本館の共同利用委員会及び運営会議を経て、館長が決定し、平成27年7月末までに、その結果を館長から申請者及び所属長宛に通知します。

なお、審査の過程におきまして、平成27年6月下旬開催予定（日程が決定次第、本館ウェブサイトに掲載します。）のプレゼンテーションへの出席を依頼する場合があります。プレゼンテーションに係る旅費は支給されません。

(2) 採否の判定は、共同研究（若手）の審査基準（別紙）により行います。

9. 経費

研究代表者、共同研究員、及び特別講師には、共同研究会の開催に要する交通費、日当、宿泊料が支給されます。

※経費には、データベース化、デジタル化のための謝金及び調査のための経費は含まれておりません。

10. 研究成果の公開

研究代表者は、下記について実施する義務があります。

ア 共同研究年次報告書（様式3）の提出（各年度末）

イ 共同研究実績報告書（様式4）の提出及び共同研究成果報告会での発表（研究終了時）

ウ 『民博通信』での研究内容の紹介、進捗状況の報告（原則、毎年）

エ 『国立民族学博物館研究報告』へ論文または研究ノートとして投稿（共同研究終了後2年以内）

※共同研究成果を論文集などで公開する予定がある場合には、『国立民族学博物館論集』、あ

るいは Senri Ethnological Studies (SES)で刊行することも可能です。ただし、本館からの刊行助成による外部出版はできません。その他の媒体による研究成果の公開については、共同研究（一般）に準じます。

※研究成果を公開した場合は、本館共同研究会の成果であることを明示し、当該刊行物や関連資料を国立民族学博物館管理部研究協力課共同利用係へ2部送付してください。

共同研究（一般）の審査基準

(1) 研究課題の学術的重要性

これまでの研究経緯や目的などに関する記載から、学術的重要性を判断する。

評価区分

4. 優れている 3. 良好である 2. やや劣っている 1. 劣っている

(2) 研究組織の妥当性

メンバー構成や各自の役割分担などに関する記載から、研究組織の妥当性を判断する。

評価区分

4. 優れている 3. 良好である 2. やや劣っている 1. 劣っている

(3) 研究計画の妥当性

開催日程や開催方法（公開、非公開等）などに関する記載から、研究計画の妥当性を判断する。

評価区分

4. 優れている 3. 良好である 2. やや劣っている 1. 劣っている

(4) 研究課題の独創性

期待される成果などに関する記載から、研究課題の独創性や革新性を判断する。

評価区分

4. 優れている 3. 良好である 2. やや劣っている 1. 劣っている

(5) 研究課題の発展性

期待される成果などに関する記載から、研究課題の発展性を判断する。

評価区分

4. 優れている 3. 良好である 2. やや劣っている 1. 劣っている

共同研究（若手）の審査基準

(1) 研究の目的や内容等

若手主体の挑戦的な研究であり、個人研究の範囲をこえて共同で行う必要性が明らかな研究であること。

評価区分

4. 優れている 3. 良好である 2. やや劣っている 1. 劣っている

(2) 研究組織の妥当性

プロジェクトの趣旨に沿い、若手研究者を主体として組織されていること、メンバー構成や各自の役割分担などに関する記載から、研究組織の妥当性を判断する。

評価区分

4. 優れている 3. 良好である 2. やや劣っている 1. 劣っている

(3) 研究計画の妥当性

研究テーマ、共同研究構成員の役割分担、開催日程などに関する記載から、研究計画の妥当性を判断する。

評価区分

4. 優れている 3. 良好である 2. やや劣っている 1. 劣っている

(4) 研究課題の独創性

期待される成果などに関する記載から、研究課題の独創性や革新性を判断する。

評価区分

4. 優れている 3. 良好である 2. やや劣っている 1. 劣っている

(5) 研究課題の発展性、成果アウトプットへの期待

期待される成果などに関する記載から、研究課題の発展性を判断する。本共同研究に応募した課題を発展させて、共同研究構成員が新たなプロジェクト等への申請につなげていく意欲があるものが望ましい。

評価区分

4. 優れている 3. 良好である 2. やや劣っている 1. 劣っている

平成 27 年度国立民族学博物館共同研究計画申請書記入要領（一般用）

共同研究（一般）を申請する者が共同研究（若手）に重複して申請することはできません。

【研究課題】

- ・研究期間が 3 年半以内であることを踏まえて記入してください。

【共同研究構成員】

- ・大学院博士後期課程に在籍する学生も参加できます。
- ・本館の客員教員、特別客員教員および総研大・文化科学研究科の地域文化学専攻・比較文化学専攻在學生は本館の教員に、本館外来研究員および総研大の上記以外の専攻在學生は本館以外の研究者に区別してください。
- ・本館の共同研究に参加できる数は、館外の研究者（本館外来研究員を含む。）は 2 つ以内、館内の教員（本館客員教員及び特別客員教員、機関研究員を含む。）は 5 つ以内です。

【開催回数】

- ・初年度は 10 月スタートであることを考慮してください。

【承諾書】

- ・所属を有する常勤研究者においては、所属機関の部局長の承認を得たうえ申請してください。機関に所属されていない方は、承諾書欄の記入は不要です。
- ・所属機関の部局長の承認を得た承諾書（原紙）は期日までに郵送にて提出してください。

【研究組織】

- ・共同研究に参加される本館以外の研究者については、平成 27 年 5 月 1 日現在の所属機関・学部等名、職名および共同研究への参画の意思を本人に確認のうえ記入してください。所属等の変更予定のある場合は、（〇〇年〇月異動予定）と付記してください。
- ・専任の所属機関住所の記入がある場合は、自宅住所の記入は任意とします。

平成 27 年度国立民族学博物館共同研究計画申請書記入要領（館内用）

共同研究（一般）を申請する者が共同研究（若手）に重複して申請することはできません。
共同研究（若手）は若手用申請書にて申請してください。

【研究組織】

- ・ 研究代表者が客員教員又は特別客員である場合は、申請時の当該研究組織に本館の専任教員を必ず含むものとします。
- ・ 共同研究に参加される本館以外の共同研究構成員については、平成 27 年 5 月 1 日現在の所属機関・学部等名、職名および共同研究への参画の意思を本人に確認のうえ記入してください。所属等の変更予定のある場合は、（〇〇年〇月異動予定）と付記してください。
- ・ 専任の所属機関住所の記入がある場合は、自宅住所の記入は任意とします。
- ・ 共同研究に参加される本館の教員については、住所等の記入は不要です。
- ・ 大学院博士後期課程に在籍する学生も参加できます。
- ・ 本館の共同研究に参加できる数は、館外の研究者（外来研究員を含む。）は 2 つ以内、館内の教員（客員教員及び特別客員教員、機関研究員を含む。）は 5 つ以内です。

平成 27 年度国立民族学博物館共同研究計画申請書記入要領（若手用）

共同研究（若手）を申請する者が共同研究（一般）に重複して申請することはできません。一度、本館の共同研究（若手）に採択され実施した者は、再度、共同研究（若手）では応募できません。

【研究課題】

研究期間が 2 年半以内であることを踏まえて記入してください。

【共同研究構成員】

- ・本館の客員教員、特別客員教員および総研大・文化科学研究科の地域文化学専攻・比較文化学専攻在學生は本館の教員に、本館外来研究員および総研大の上記以外の専攻在學生は本館以外の研究者に区別してください。
- ・大学院博士後期課程に在籍する学生も参加できます。
- ・本館の共同研究に参加できる数は、館外の研究者（本館外来研究員を含む。）は 2 つ以内、館内の教員（本館客員教員及び特別客員教員、機関研究員を含む。）は 5 つ以内です。

【開催回数】

- ・初年度は 10 月スタートであることを考慮してください。
- ・年額 70 万円が上限ですので共同研究構成員数を考慮してください。（ただし初年度は半分程度とします。）

【承諾書】

- ・所属を有する常勤研究者においては、所属機関の部局長の承認を得たうえ申請してください。本館の機関研究員および機関に所属されていない方は、承諾書欄の記入は不要です。
- ・所属機関の部局長の承認を得た承諾書（原紙）は期日までに郵送にて提出してください。

【研究組織】

- ・共同研究に参加される本館以外の研究者については、平成 27 年 5 月 1 日現在の所属機関・学部等名、職名および共同研究への参画の意思を本人に確認のうえ記入してください。所属等の変更予定のある場合は、（〇〇年〇月異動予定）と付記してください。
- ・専任の所属機関住所の記入がある場合は、自宅住所の記入は任意とします。
- ・共同研究構成員の年齢も審査において考慮しますので、必ず記入してください。

平成27年度国立民族学博物館共同研究 (一般) 計画申請書

平成 年 月 日

国立民族学博物館長 殿

1. 申請者	ふりがな		
	氏名		印
	専攻分野		
	研究テーマ		
	所属機関・職名		
	所属機関の住所	〒	
	TEL	()	FAX ()
2. 研究課題区分 (該当する課題番号1つに○をつけてください。)	課題1 文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究 課題2 本館の所蔵する資料(標本資料, 文献資料, 映像音響資料等)に関する研究		
3. 研究課題	(和文)		
	(キーワード) () () () ()		
	(英文)		
	(Keyword) () () ()		
4. 研究計画	共同研究の目的、意義等について、研究計画に記入してください。		
5. 共同研究 構成員	計 人	内 訳	本館以外の研究者 人
			本館の教員 人
参加される研究者の氏名、所属機関、職名等を研究組織表に記入してください。			
6. 共同研究会 開催回数	平成 27 年度	回 (予定)	平成 28 年度
	平成 29 年度	回 (予定)	平成 30 年度
<h2>承 諾 書</h2> <p>上記申請者(研究代表者)が、国立民族学博物館共同研究に申請することを承諾します。</p> <p>平成 年 月 日</p> <p style="text-align: center;">所属長(部局長)</p> <p style="text-align: center;">職 名</p> <p style="text-align: center;">氏 名</p> <div style="text-align: right; border: 1px dashed black; width: 80px; height: 40px; margin-left: auto;">公 印</div>			

※承諾書は、所属機関を有する常勤研究者による申請の場合のみ必要です。

略 歴 書

ふりがな				生年月日	昭和	年	月	日	生	
氏 名				電話番号	(自宅)	()			
				FAX番号	(自宅)	()			
				メールアドレス						
ふりがな										
自宅住所	〒									
学 歴 (大学から記入してください。)										
大 学 名 ・ 学 部 等 名				就 学 期 間				卒・修了・退学の別及び学位		
				昭和	年	月	～	昭和	年	月
				平成				平成		
				昭和	年	月	～	昭和	年	月
				平成				平成		
				昭和	年	月	～	昭和	年	月
				平成				平成		
				昭和	年	月	～	昭和	年	月
				平成				平成		
職 歴										
自 年 月	至 年 月	履 歴 事 項 (所属機関・職名を具体的に記入してください。)								
昭和	昭和									
年 月	年 月									
平成	平成									
昭和	昭和									
年 月	年 月									
平成	平成									
昭和	昭和									
年 月	年 月									
平成	平成									
昭和	昭和									
年 月	年 月									
平成	平成									
昭和	昭和									
年 月	年 月									
平成	平成									
所属学会および 受賞等										
本館の客員教員・特別客員教員・委員会委員の委嘱および共同研究会への参加状況										
自 年 月	至 年 月	共同研究の課題名、その他事項					研究代表者名・備考			
昭和	昭和									
年 月	年 月									
平成	平成									
昭和	昭和									
年 月	年 月									
平成	平成									
昭和	昭和									
年 月	年 月									
平成	平成									

研 究 計 画

申請者氏名 _____

1. 共同研究の課題区分（下記の課題番号1つに○をつけてください。）

課題1 文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題2 本館の所蔵する資料（標本資料，文献資料，映像音響資料等）に関する研究

2. 研究課題

（和文）

（キーワード）（ ）（ ）（ ）

（英文）

（Keyword）（ ）（ ）（ ）

3. 研究の目的（400字程度）

4. 研究の意義（400字程度）

5. 期待される成果（400字程度）

6. 研究の実施計画（800字程度）

7. 研究成果の公開計画（200字程度）

8. 関連プロジェクト（本共同研究と関連するプロジェクトの実施、あるいは計画がある場合は、その正式名称（含代表者名）等を明記してください。）

9. 経費（平成27年度計画分のみ記入）

研究会開催予定	参加人数（人）	所要額(円)	開催場所	特別講師	備考
月 日～ 月 日			<input type="checkbox"/> 民博 <input type="checkbox"/> 館外	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
月 日～ 月 日			<input type="checkbox"/> 民博 <input type="checkbox"/> 館外	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
月 日～ 月 日			<input type="checkbox"/> 民博 <input type="checkbox"/> 館外	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
月 日～ 月 日			<input type="checkbox"/> 民博 <input type="checkbox"/> 館外	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
計					

※ 開催場所に関しては募集要項 3. 共同研究会の開催場所 を参照してください。

※ 本館以外で開催する場合は、以下に開催理由を明記してください。

※ 特別講師を招聘する場合、備考に所属機関または自宅の所在する都道府県名をご記入ください。

館外開催理由

・ 月 日（開催場所： ）
理由：

研 究 組 織

申請者氏名 _____

ふりがな		年 齢		
氏 名		才	共同研究内での 役 割 分 担	
所属機関名	学部名等			職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢		
氏 名		才	共同研究内での 役 割 分 担	
所属機関名	学部名等			職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢		
氏 名		才	共同研究内での 役 割 分 担	
所属機関名	学部名等			職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢		
氏 名		才	共同研究内での 役 割 分 担	
所属機関名	学部名等			職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢		
氏 名		才	共同研究内での 役 割 分 担	
所属機関名	学部名等			職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail

様式1-2 (館内用)

平成27年度 共同研究 (一般) 申請書

※共同研究(若手)は若手用申請書にて申請してください。

1. 共同研究の課題区分(下記の課題番号から1つ選択して○をつけてください。)

課題1 文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題2 本館の所蔵する資料(標本資料, 文献資料, 映像音響資料等)に関する研究

2. 研究代表者

代表者(氏名) (所属・職名)

3. 研究課題

(和文)

(キーワード) () () ()

(英文)

(Keyword) () () ()

4. 研究期間(下記の研究期間から1つを選択して○をつけてください。)

ア 1年半 イ 2年半 ウ 3年半

5. 研究の概要

5-1. 研究の目的(400字程度)

5-2. 研究の意義(400字程度)

5-3. 期待される成果 (400字程度)

5-4. 研究の実施計画 (800字程度)

6. 研究成果の公開計画 (200字程度)

7. 関連プロジェクト (本研究と関連するプロジェクトの実施、あるいは計画がある場合は、その正式名称 (含代表者名) 等を明記してください。)

8. 研究代表者が過去5年間に実施した共同研究の実績

(1) 研究課題

研究期間

研究成果 (共同研究としてまとまった形で公表した成果のみ)

(2) 研究課題

研究期間

研究成果（共同研究としてまとまった形で公表した成果のみ）

9. 経費（平成27年度計画分のみ記入）

研究会開催予定	参加人数（人）	所要額（円）	開催場所	特別講師	備考
月 日～ 月 日			<input type="checkbox"/> 民博 <input type="checkbox"/> 館外	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
月 日～ 月 日			<input type="checkbox"/> 民博 <input type="checkbox"/> 館外	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
月 日～ 月 日			<input type="checkbox"/> 民博 <input type="checkbox"/> 館外	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
月 日～ 月 日			<input type="checkbox"/> 民博 <input type="checkbox"/> 館外	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
計					

※ 開催場所に関しては募集要項 3. 共同研究会の開催場所 を参照してください。

※ 本館以外で開催する場合は、以下に開催理由を明記してください。

※ 特別講師を招聘する場合、備考に所属機関または自宅の所在する都道府県名をご記入ください。

館外開催理由

・ 月 日（開催場所： ）

理由：

研 究 組 織

申請者氏名

ふりがな		年 齢		共同研究内での 役割分担	
氏 名		才			
所属機関名		学部名等		職名	
所属機関住所	住所				
	〒		Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所				
	〒		Tel		e-mail
ふりがな		年 齢		共同研究内での 役割分担	
氏 名		才			
所属機関名		学部名等		職名	
所属機関住所	住所				
	〒		Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所				
	〒		Tel		e-mail
ふりがな		年 齢		共同研究内での 役割分担	
氏 名		才			
所属機関名		学部名等		職名	
所属機関住所	住所				
	〒		Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所				
	〒		Tel		e-mail
ふりがな		年 齢		共同研究内での 役割分担	
氏 名		才			
所属機関名		学部名等		職名	
所属機関住所	住所				
	〒		Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所				
	〒		Tel		e-mail
ふりがな		年 齢		共同研究内での 役割分担	
氏 名		才			
所属機関名		学部名等		職名	
所属機関住所	住所				
	〒		Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所				
	〒		Tel		e-mail

平成27年度国立民族学博物館共同研究（若手）計画申請書

平成 年 月 日

国立民族学博物館長 殿

1. 申請者	ふりがな		
	氏名		印
	専攻分野		
	研究テーマ		
	所属機関・職名		
所属機関の住所	〒		
	TEL () FAX ()		
2. 研究課題区分 (該当する課題番号1つに○をつけてください。)	課題1 文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究 課題2 本館の所蔵する資料（標本資料，文献資料，映像音響資料等）に関する研究		
3. 研究課題	(和文)		
	(キーワード) () () () ()		
	(英文)		
(Keyword) () () () ()			
4. 研究計画	共同研究の目的、意義等について、研究計画に記入してください。		
5. 共同研究 構成員	計 人	内 訳	本館以外の研究者 人 本館の教員 人
			参加される研究者の氏名、所属機関、職名等を研究組織表に記入してください。
6. 共同研究会 開催回数	平成 27 年度	回 (予定)	平成 28 年度
	平成 29 年度	回 (予定)	
<h2>承 諾 書</h2> <p>上記申請者（研究代表者）が、国立民族学博物館共同研究に申請することを承諾します。</p> <p>平成 年 月 日</p> <p>所属長（部局長）</p> <p>職 名</p> <p>氏 名</p>			

※承諾書は、所属機関を有する常勤研究者による申請の場合のみ必要です。

略 歴 書

ふりがな				生年月日	昭和	年	月	日生
氏 名				電話番号	(自宅)	()	
				FAX番号	(自宅)	()	
				メールアドレス				
ふりがな								
自宅住所	〒							
学 歴 (大学から記入してください。)								
大 学 名 ・ 学 部 等 名				就 学 期 間				卒・修了・退学の別及び学位
				昭和	年	月	～	昭和
				平成	年	月		平成
				昭和	年	月	～	昭和
				平成	年	月		平成
				昭和	年	月	～	昭和
				平成	年	月		平成
				昭和	年	月	～	昭和
				平成	年	月		平成
職 歴								
自	年	月	至	年	月	履 歴 事 項 (所属機関・職名を具体的に記入してください。)		
昭和	年	月	昭和	年	月			
平成	年	月	平成	年	月			
昭和	年	月	昭和	年	月			
平成	年	月	平成	年	月			
昭和	年	月	昭和	年	月			
平成	年	月	平成	年	月			
昭和	年	月	昭和	年	月			
平成	年	月	平成	年	月			
昭和	年	月	昭和	年	月			
平成	年	月	平成	年	月			
所属学会および 受賞等								
本館の客員教員・特別客員教員・委員会委員の委嘱および共同研究会への参加状況								
自	年	月	至	年	月	共同研究の課題名、その他事項	研究代表者名・備考	
昭和	年	月	昭和	年	月			
平成	年	月	平成	年	月			
昭和	年	月	昭和	年	月			
平成	年	月	平成	年	月			
昭和	年	月	昭和	年	月			
平成	年	月	平成	年	月			

6. 研究の実施計画（800字程度）

7. 研究成果の公開計画（200字程度）

8. 関連プロジェクト（本共同研究と関連するプロジェクトの実施、あるいは計画がある場合は、その正式名称（含代表者名）等を明記してください。）

9. 経費（平成27年度計画分のみ記入）

研究会開催予定	参加人数（人）	所要額（円）	開催場所	特別講師	備考
月 日～ 月 日			民博	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
月 日～ 月 日			民博	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
月 日～ 月 日			民博	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
月 日～ 月 日			民博	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
計					

※ 共同研究（若手）の共同研究会は館内開催に限られる。

※ 特別講師を招聘する場合、備考に所属機関または自宅の所在する都道府県名をご記入ください。

研 究 組 織

申請者氏名 _____

ふりがな		年 齢		
氏 名		才		共同研究内での 役割分担
所属機関名	学部名等			職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢		
氏 名		才		共同研究内での 役割分担
所属機関名	学部名等			職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢		
氏 名		才		共同研究内での 役割分担
所属機関名	学部名等			職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢		
氏 名		才		共同研究内での 役割分担
所属機関名	学部名等			職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢		
氏 名		才		共同研究内での 役割分担
所属機関名	学部名等			職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail

国立民族学博物館共同研究年次報告書 (年半計画の 年度目)

1. 研究課題

(和文)

(キーワード) () () ()

(英文)

(Key word) () () ()

2. 研究代表者

氏 名 所 属 機 関 職 名

3. 研究期間

平成 年 月 から 平成 年 月 まで

4. 研究組織 (共同研究員として参加された方)

氏 名 所 属 機 関 職 名

5. 研究目的 (400字程度)

6. 本年度の研究実施状況

7. 研究成果の概要 (400字程度)

8. 共同研究会に関連した公表実績 (出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など)

国立民族学博物館共同研究実績報告書

1. 研究課題

(和文)

(キーワード) () () () ()

(英文)

(Key word) () () () ()

2. 研究代表者

氏 名 所 属 機 関 職 名

3. 研究期間

平成 年 月 から 平成 年 月 まで

4. 研究組織 (共同研究員として参加された方)

氏 名 所 属 機 関 職 名

5. 研究目的 (400字程度)

6. 研究成果の概要 (800字程度)

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

様式 5

平成 年 月 日

研 究 業 績 書

共同研究代表者： _____

専門分野	
------	--

【著書】 (著者名編者・刊行年次・書名・出版地および出版社)
1. ○○○○○○ 2. ○○○○○○ 3. ○○○○○○
【論文】 (著者・刊行年次・論文の標題・収録雑誌等巻号・収録ページ・雑誌等の出版地および出版社)
1. ○○○○○○ 2. ○○○○○○ 3. ○○○○○○
【その他】 (映像作品など)
1. ○○○○○○ 2. ○○○○○○ 3. ○○○○○○

※提案したプロジェクトに関連した研究業績を記載すること (合計10点以内)

※直近のものから順次記載すること

館外開催理由書

共同研究代表者： _____

A 館外開催に関する事項

日 程	平成 年 月 日 () ~ 平成 年 月 日 ()
開催場所	
館外開催の 目的・理由	<input type="checkbox"/> 研究代表者本務校のため
	<input type="checkbox"/> 共同研究員本務校のため (共同研究員名 : _____)
	<input type="checkbox"/> その他 (具体的に記載すること)
会場使用料	<input type="checkbox"/> 不要
	<input type="checkbox"/> 必要 ※B表に詳細を記入し、料金表など根拠資料を添付すること。

B 会場使用に関する事項

会場使用 予定日時	平成 年 月 日 () : ~ :	平成 年 月 日 () : ~ :
	(準備 : ~ : 研究会 : ~ : 片付け : ~ :)	(準備 : ~ : 研究会 : ~ : 片付け : ~ :)
会場使用料	【料金内訳】	
	内 容	単 価・数 量
	※必要に応じて 加除修正ください	[記入例] ○○ : ○○ ~ ○○ : ○○ ¥ ¥ / 時間 × ○時間 学内者による割引 (50%) など
	会場費	小 計 (円)
	冷暖房使用料	税抜き表記の場合は、(税込) を取消線で消してください
	附帯設備料	(税込)
その他	(税込)	
		(税込)
	総 額	(税込)

みんぱく



平成26年度

みんぱく若手研究者 奨励セミナー 募集要項

平成26年

11月26日[水]～28日[金]の3日間

国立民族学博物館 第6セミナー室(2階)

「包摂と自律の人間学 ―宗教と社会的つながりをめぐって―」

本年度の若手セミナーでは、本館の機関研究「包摂と自律の人間学」をテーマに、宗教と社会的つながりの関係を扱う研究を募集します。

近年の人文・社会科学では、グローバル化の進展や新自由主義の浸透に伴い、社会的つながりの減退と責任の個人化が起きているという認識が一般的になりつつあります。

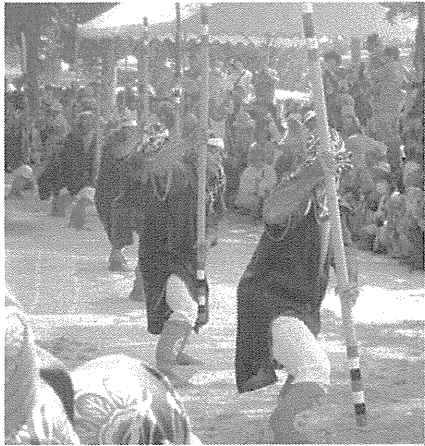
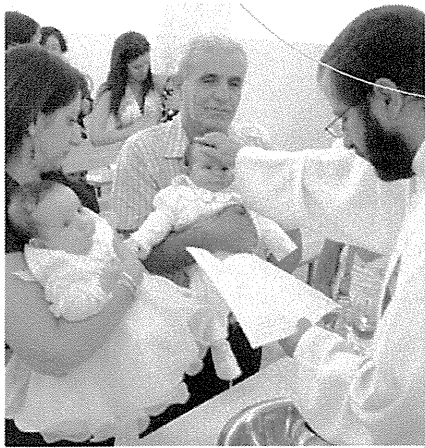
それと呼応するかたちで、宗教が人々をつなぐ働きをもつことにもあらためて注目が集まっています。

ここで言う宗教には、長い歴史を経て体系化された宗教だけでなく、講や新興宗教、民間信仰や社会思想も含まれます。

これらの宗教は、人々をつなぐ働きをもつ一方で、つながりの範囲を限定する理由を人々に与えることもあります。

また、宗教を基盤とした人々のつながりは、顔の見える範囲に収まることもあれば、ナショナリズムと密接に結びつくことや、国家を超える動きを見せることもあります。

本年度の若手セミナーでは、人々のつながりを生み出し、また、それを限定する宗教の働きについて人類学的発想に基づいて議論することを目指します。



■ セミナーの内容

- ①本館の共同利用制度の紹介(共同研究(若手)など)
- ②施設案内(図書室、展示場、収蔵庫など)
- ③本館教員による発表(各60分)
 - i) 菅瀬晶子「聖者崇敬をめぐるムスリムとキリスト教徒、ユダヤ教徒の共存と反発—イスラエル・パレスチナとレバノンの事例」
 - ii) 杉本良男「南インドにおける津波災害と社会的つながり」
- ④参加者による研究発表
50分(発表30分、質疑応答20分)の持ち時間のなかで研究発表をおこない、質問・コメントを受ける。

■ 表彰制度

- ①優秀発表者の選定:優秀発表者を選定し「みんなく若手セミナー賞」を授与する。受賞者はHP等で公表する。
- ②セミナー終了後、参加者の発表要旨はHP等で公表する。また、参加者は全員『国立民族学博物館研究報告』(査読有)への投稿資格を得る。

■ 応募資格

日本国内の大学院博士後期課程の大学院生あるいはPD、または左記に相当する研究歴を有し、積極的に参加する意志を持つ者。
※ただしフィールドワークに基づく研究発表をおこなうことが望ましい。

■ 募集人数 約10名

■ 参加費 無料(参加者には人間文化研究機構の規定にもとづき旅費・宿泊費を支給)

■ 応募方法 以下の書類を応募先に郵送する。

- ①履歴書(所定の様式をHPよりダウンロード)【URL】<http://www.minpaku.ac.jp/offer>
 - ②発表要旨(1200字程度で発表内容を記載、様式自由)
 - ③その他の要望
- ※特別な補助等が必要な場合には、その旨明記すること。

■ 応募/お問い合わせ先

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
国立民族学博物館 研究協力課共同利用係 宛
kyodok@idc.minpaku.ac.jp 06-6878-8347(ダイヤルイン)
【URL】<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/youngseminar>

■ 応募締切

平成26年9月26日[金] 必着

■ 参加者の決定

応募書類にもとづき本館研究戦略センターにおいて選考の上、10月中旬に通知する。

■ その他

- ①セミナー開催期間中の宿泊場所は、各参加者が手配すること。
- ②参加者はセミナーの全日程に参加すること。
- ③応募書類は返却しない。

写真提供: 加賀谷真梨、吉田ゆか子、菅瀬晶子

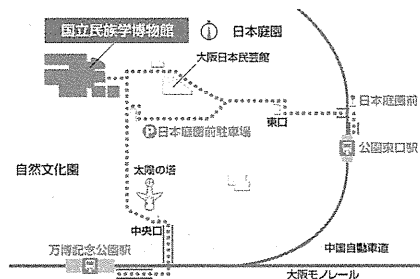
● 国立民族学博物館

交通のご案内

- 大阪モノレール…「万博記念公園駅」徒歩約15分
*自然文化園窓口で、当館の観覧券をお買い求めください。
同園内を無料で通行できます。
- 「公園東口駅」徒歩約15分
*自然文化園(有料区域)を通行せずに来館できます。
- バス……………[近鉄/バス](阪大本部前行き)阪急茨木市駅から約20分、JR茨木駅から約10分「日本庭園前」下車徒歩約13分
- 乗用車……………万博記念公園「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分
*「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。

みんなく クリック

[大阪・万博記念公園]
〒565-8511
大阪府吹田市千里万博公園10番1号
Tel:06-6876-2151(代)
<http://www.minpaku.ac.jp/>



平成 26 年度 若手研究者奨励セミナー プログラム

11 月 26 日(水)

10:00～10:30 挨拶・趣旨説明 (司会：菅瀬 晶子)

10:30～11:30 教員発表① 菅瀬 晶子「聖者崇敬をめぐるムスリムとキリスト教徒、ユダヤ教徒の共存と反発—イスラエル・パレスチナとレバノンの事例」

11:30～12:00 共同利用制度の紹介

12:00～13:00 昼食

13:00～14:30 施設見学

13:00～13:40 収蔵庫見学

13:40～14:30 図書室および 4 階研究部案内

14:30～14:45 コーヒーブレイク

15:00～16:40 セッション 1 (司会：浜田 明範)

15:00～15:50 荒木 亮 (首都大学東京大学院人文科学研究科博士後期課程)「スカーフ着用の言説からみる『イスラーム的なるもの』と『自律的な信仰』」

15:50～16:40 蒲生 裕恵 (岡山大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程)「パレスチナの女性労働の現状と変容—農村の既婚者と都市の未婚女性を事例として—」

16:40～16:50 コーヒーブレイク

16:50～17:50 教員発表② 杉本 良男「南インドにおける津波災害と社会的つながり」

11 月 27 日(木)

10:00～12:00 カムイノミ・展示場見学

12:00～13:00 昼食

13:00～15:30 セッション 2 (司会：河合 洋尚)

13:00～13:50 伏見 裕子 (日本学術振興会特別研究員 (PD))「出産をめぐる地域のつながりと船霊信仰—香川県伊吹島を事例として—」

13:50～14:40 松崎 遼子 (大阪大学人間科学研究科博士後期課程)「韓国都市部における民間信仰ネットワーク」

14:40～15:30 尾崎 (井内) 智子 (元公益財団法人生活協同組合総合研究所研究員)「戦時下リベラリズムの軌跡—消費組合運動を事例として—」

15:30～15:45 コーヒーブレイク

15:45～17:25 セッション 3 (司会：吉田 ゆか子)

15:45～16:35 下田 健太郎 (慶應義塾大学大学院博士後期課程)「水俣病経験の『翻訳』を通じたネットワークの構築—『本願の会』メンバーのライフヒストリーをめぐる—考察—」

16:35～17:25 深田 淳太郎 (拓殖大学国際学部非常勤講師等)「遺骨と遺された人々の

つながり～ソロモン諸島ガダルカナル島における遺骨収集活動を事例に～」

17:45～19:45 懇親会

11月28日(金)

10:00～12:30 セッション4 (司会：加賀谷 真梨)

10:00～10:50 岡田 紅理子 (上智大学グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻
博士後期課程) 『アミらしさ』の維持・強化から『自分らしさ』の確保へ：台北に移住
した原住民族アミと都市カトリック共同体」

10:50～11:40 モリ カイネイ (立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫性博士課程)
『短期宣教』－華人キリスト者を繋ぐトランスナショナルな宗教実践」

11:40～12:30 宇田川 彩 (東京大学総合文化研究科超域文化科学科) 「ユダヤ教におけ
る言葉と食べ物について：アルゼンチン・ブエノスアイレスでの現地調査を通して」

12:30～13:30 昼食

13:30～15:30 総合討論

15:30～15:45 コーヒーブレイク

15:45～16:15 アンケート記入

16:15～16:45 講評・表彰・閉会

国立民族学博物館の共同利用制度に関するアンケート

国立民族学博物館（みんぱく）は大学共同利用機関であると同時に、博物館をもつ研究所でもあります。さらに総合研究大学院大学文化科学研究科の2専攻がおかれ、教育機関としての機能も果たしています。こうした多様な側面をもつみんぱくの共同利用制度を改善するために、セミナーに参加された皆様からご意見をいただきたいと思えます。みんぱくがもつ研究資源へのアクセスに関する制度的な問題やメリットなどについて、忌憚のないご意見を頂ければ幸いです。皆様からのご意見は、みんぱくの内部資料としてとりまとめ、今後の事業運営の参考にさせていただきます。

I 大学共同利用機関としてのユーザビリティ

みんぱくには、特別利用共同研究員・外来研究員などの若手研究者の受け入れ制度や、1) 本館展示・特別展示などの展示物、2) 民族学アーカイブズ・HRAF・文献資料などの図書室の資料、3) 映像音響資料・標本資料、4) みんぱくデータベースといった各種資料の共同利用制度、また共同研究・ワークショップ・シンポジウムなどがあります。本日の説明を参考とし、以下の該当する項目を選んで、質問にお答えください。

- ・ みんぱくを利用した経験のある方は、これまでどのようなかたちで共同利用制度利用したか、また、どのような点を改善する必要があると感じたかお書きください。
 - 1) 展示には学部生の頃から趣味で何度も足を運んでいる。
 - 2) 図書室の資料は、修士・博士課程を通して複写サービスを何度も利用している。
修士・博士課程のころに研究員制度を詳しく知れていればよかった。

- ・ みんぱくを利用した経験のない方は、今後どのようなかたちで共同利用制度を利用していきたいか、お書きください。

II 大学院生、ポスト・ドクターの支援制度

大学院生またはポスドク研究者が、みんぱくで研究活動を続けるための受け入れ制度として、特別共同利用研究員、外来研究員、機関研究員を設けています。また、若手研究者の共同研究を支援する制度として、共同研究（若手）も公募もしています。本日の説明を参考とし、これら現行の若手研究者支援制度への感想、または今後の改善点について教えてください。また、現行の制度以外に、どのような支援制度があれば望ましいか教えてください。

III 今回の「みんぱく若手奨励セミナー」の感想

1. セミナーの開催をどのように知ったかをお答えください。

現在みんぱくに在籍中の所属大学 OB より研究室の ML に告知があった。

2. 応募するにいたった経緯・動機についてお答えください。

宗教と社会というキーワードが自分の研究内容に近かったため。

また、興味関心が近いがフィールドが異なる人たちとの議論から、研究を発展させるヒントを得たかったため（フィールドが同じ人同士での集まりは頻繁にあるが、逆はあまりない）。

3. プログラムの内容や時間、議論・討論は適切でしたか。

ハードだが良かったと思う。

4. セミナーの開催時期（11月末の平日に3日間開催）は適切でしたか。

私は参加可能だったが、非常勤などが休めず来られない優秀な人が多いだろうと考えるともったいない気もする。長期休暇の始め又は終わり頃のほうが人が集まるかもしれない。

5. 「みんぱく若手セミナー賞」について、どのように思いますか。

ひとつでも業績を増やしたい若手の立場から考えると、有難いと思う。

6. 次回のセミナーではどのようなテーマがふさわしいと思いますか。

7. セミナー全体についての感想をお答えください。

大変勉強になった。自分の研究と発表の穴が多くあることに気づいた。

特に先生方の「若手を育てよう」という気持ちにあふれたコメントの数々に感激した。

ありがとうございました。

資料 5 文献図書資料整備状況

平成26年度図書室関連統計

[受入部門]

年間受入冊数

資料種別		日本語	外国語	計
図書	購入	1,243	1,562	2,805 (冊)
	寄贈	1,014	319	1,333
	館内刊行物	15	10	25
図書(小計)		2,272	1,891	4,163
マイクロ資料		0	0	0
AV資料		86	8	94
図書+マイクロ+AV(小計)		2,358	1,899	4,257
製本雑誌		236	488	724
合計		2,594	2,387	4,981

* 上記資料冊数は、備品にかぎる。

蔵書冊数

資料種別		日本語	外国語	計
蔵書総冊数	図書	233,347	331,841	565,188 (冊)
	製本雑誌	33,476	62,373	95,849
合計		266,823	394,214	661,037

* 上記資料冊数は、備品にかぎる。

* 除却資料は除く。

雑誌購入タイトル数

日本語	外国語	計
175	414	589 (タイトル)

* 電子オンリー契約タイトルは含まない。

雑誌所蔵種類数

日本語	外国語	計
10,104	6,830	16,934 (タイトル)

電子ジャーナルタイトル数

パッケージ名称	タイトル数
BioOne	207
Cambridge Journals	340
Cell Press	28
ProQuest Research Library	3,139
ProjectMUSE	356
ScienceDirect	166
SpringerLINK	1,836
Wiley-Blackwell	1,654
その他	74
合計	7,800

* 3/31 現在でE-Journal Portal で閲覧可能なタイトル数。

電子ジャーナル・データベース 年間アクセス統計

単位:件

形式	名称	2012年	2013年	2014年	導入時期
電子ジャーナル	BioOne	-	-	-	2006.5
	Cambridge Journals	222	230	141	2008.1
	JSTOR	-	-	-	2002
	Project MUSE	438	734	159	2006.1
	Science Direct	258	183	217	
	SpringerLINK	337	1,868	251	
	Wiley-Blackwell	-	-	-	
データベース	Anthropological Index Online	-	-	-	
	Anthropology Online	332	105	60	2012.4
	CNKI	306	618	722	2011.1
	Hapi Online	7	15	14	2004
	Index Islamicus	224	157	184	2006.1
	KISS	144	62	763	2011.1
	ProQuest Dissertation & Theses	273	163	170	2008.1
	ProQuest Research Library	235	181	187	2010.1
	RILM	212	156	193	2009.8
	Scopus	-	-	-	2005.4
辞典類	Encyclopaedia Britannica Online	1,978	3,399	4,188	2006.1
外部情報検索	Dialog	0	1	18	
	G-Search	0	60	0	
	日経テレコン21	7,480	7,785	5,641	

2014 年度 学術潮流サロン

コミュニケーションの由来と未来

第1回 10月9日(木)

中垣 俊之 北海道大学電子科学研究所

『粘菌のエソロジーからヒトの振る舞いを考える』

第2回 10月24日(金)

傳田 光洋 資生堂研究所

『人間(ヒト)を創る皮膚』

第3回 10月31日(金)

岡田 美智男 豊橋技術科学大学 情報・知能工学系

『コミュニケーションに対する構成論的理解にむけて～
「弱いロボット」と人との関わりを手がかりとして』

第4回 11月17日(月)

岡ノ谷 一夫 東京大学大学院総合文化研究科

『鳴き声から言葉へ』

場所：特別研究室 時間：15時半～17時

資料 8 人間文化研究機構連携研究一覧

■連携研究「人間文化資源」の総合的研究

民博	総括班	久保 正敏
民博	人間文化資源の保存環境研究	園田 直子
民博	映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用	福岡 正太

■人間文化研究連携共同推進事業 小型連携研究

カテゴリー I

民博	驚異と怪異の現象－比較研究の試み	山中 由里子
----	------------------	--------

カテゴリー III

民博	文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究－大学共同利用機関の視点から	日高 真吾
----	---	-------

カテゴリー IV

民博	第 3 回手話言語と音声言語に関する国際シンポジウム「言語の記述・記録・保存と通言語種型論」の開催	菊澤 律子
----	---	-------

■広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」

民博	日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築に係る事前調査	日高 真吾
----	-------------------------------------	-------

連携研究活動一覧

■機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究：研究集会・シンポジウム関係

班	日時	場所	内容
園田班	7月21日～23日	東北歴史博物館	システム運用指導
	2月20日～22日	民博	フォーラム 国際シンポジウム
	2月28日	名古屋工業大学	打ち合わせ
福岡班	5月18日	民博	国際シンポジウム
	12月13日～14日	東京音楽大学	成果発表、打ち合わせ
	1月17日	沖縄県 天久ヒルトップ会議室	映像上映会、意見交換会
	3月5日～7日	鹿児島県 三島村 硫黄島	映像上映会

■小型連携研究：研究集会・シンポジウム関係

カテゴリーⅠ

班	日時	場所	内容
山中班	7月4日～5日	東京古書会館、天理ホール	打ち合わせ、フォーラム
	10月12日～13日	民博	フォーラム

カテゴリーⅢ

班	日時	場所	内容
日高班	10月12日～13日	ソニーミュージックスタジオ 赤坂	打ち合わせ
	10月24日	庄内小学校	打ち合わせ
	11月1日	民博	フォーラム

カテゴリーⅣ

班	日 時	場 所	内 容
菊澤班	10月3日～6日	民博	打ち合わせ、国際シンポジウム

■機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究：調査研究関係

班	日 時	場 所
福岡班	8月25日～27日	三島村役場硫黄島出張所、硫黄島
	9月27日～29日	徳之島
	2月14日～15日	徳之島

■小型連携研究：調査研究関係

カテゴリーⅢ

班	日 時	場 所
日高班	10月6日～11日	久之浜大久自安我楽念仏保存継承会、岩沼市ふるさと展示室、東北歴史博物館

■法人第3期中期目標・中期計画期間における問題解決指向型基幹研究プロジェクト形成に係る準備調査

班	日 時	場 所
日高班	3月2日～3日	東京文化財研究所
	3月14日～15日	東北大学 川内北キャンパス
	3月20日～22日	新潟県十日町情報館

平成26年度科学研究費補助金課題一覧 (H27. 2. 23現在)

研究種目	審査区分	所属	職	氏名	計	(単位: 千円)
新学術領域研究 (研究領域提案型)	新学術領域	民族文化研究部	准教授	鈴木 紀	8,060	植民地時代から現代の中南米の先住民文化
	1件				8,060	
基盤研究 (S)		研究戦略センター	教授	關 雄二	35,490	権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築
	1件				35,490	
基盤研究 (A)	一般	民族社会研究部	教授	西尾 哲夫	9,620	アラブ世界の都市部中層文化とアラビアンナイト-エジプト系伝承形成の謎を解く
	一般	民族文化研究部	教授	竹沢 尚一郎	11,700	世界の中のアフリカ史の再構築
	海外		名誉教授	山本 紀夫	8,450	熱帯高地における環境開発の地域間比較研究-「高地文明」の発見に向けて
	海外	民族文化研究部	教授	池谷 和信	9,100	熱帯の牧畜における生産と流通に関する政治生態学的研究
	4件				38,870	
基盤研究 (B)	一般	民族文化研究部	准教授	山中 由里子	3,640	中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究
	海外	民族社会研究部	外来研究員	辻 輝之	910	宗教と移民のアイデンティティ・共生: 南アジア系ディアスポラを事例として
	一般	文化資源研究センター	教授	園田 直子	5,070	劣化の進んだ図書・文書資料の長期保存に向けた大量強化法の開発
	一般	文化資源研究センター	准教授	福岡 正太	4,550	映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究
	海外	民族文化研究部	教授	杉本 良男	5,460	経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究
	一般	先端人類科学研究部	准教授	丸川 雄三	7,670	ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合
	海外	文化資源研究センター	教授	野林 厚志	3,380	台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究
	海外	先端人類科学研究部	教授	佐々木 史郎	5,200	北方寒冷地域における織布技術と布の機能
	特設分野研究	研究戦略センター	教授	鈴木 七美	2,860	多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想と実践の国際共同研究
	9件				38,740	
基盤研究 (C)	一般	民族文化研究部	教授	笹原 亮二	1,300	瀬戸内海及び西日本における多島海世界の民俗芸能の研究
	一般	民族社会研究部	外来研究員	松岡 葉月	130	博物館における全周期科学映像の開発および評価に関する人文・社会学的研究
	一般	研究戦略センター	教授	平井 京之介	1,820	水災被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究
	一般	研究戦略センター	准教授	丹羽 典生	1,300	トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学: オセアニア大国の移民を事例に
	一般	先端人類科学研究部	准教授	飯田 卓	910	バイパス型私企業活動の活性化による、マダガスカル山間部の住民行動と地域構造の変容
	一般	研究戦略センター	教授	鈴木 七美	1,430	スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究
	一般	民族社会研究部	外来研究員	西本 太	2,875	近代化とラオス農村社会の再生産戦略: 1975-2012
	一般	民族社会研究部	外来研究員	金谷 美和	1,170	インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源としての「手工芸」の意義
	一般	文化資源研究センター	准教授	上羽 陽子	2,210	現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究
	一般	民族社会研究部	准教授	宇田川 妙子	1,300	現代イタリア社会におけるローカリティに関する文化人類学的研究
	10件 (うち転入1件)				14,445	
若手研究 (A)		研究戦略センター	機関研究員	山本 睦	1,820	神殿をめぐる活動と地域間交流の相関からみたアンデス文明形成期の社会動態
		研究戦略センター	助教	伊藤 敦規	5,980	日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究
2件					7,800	
若手研究 (B)		民族社会研究部	外来研究員	相島 葉月	1,170	現代エジプトのオルタナティブ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究
		民族社会研究部	外来研究員	鈴木 博之	910	言語多様性の記述を通して見る中国雲南省子バット語の方言形成の研究
		民族社会研究部	外来研究員	武田 和久	650	17-19世紀南米ラプラタ地域イェズ会布教区の住民名簿に関する歴史人類学的研究
		研究戦略センター	助教	河合 洋尚	1,040	漢族の特色の空間利用とエスニシティの再編—中・越隣接エリアの調査研究
		文化資源研究センター	助教	川瀬 慈	650	アフリカの無形文化保護における民族誌映画の活用
		研究戦略センター	機関研究員	加賀谷 真梨	1,430	高齢者介護と相続の相関にみる沖縄の「家族」に関する人類学的研究
		民族社会研究部	准教授	太田 心平	1,040	博物館展示の再編過程の国際比較による「真正な文化」の生成メカニズムの解明
		民族社会研究部	外来研究員	宮本 万里	1,300	現代ブータンの多元的宗教空間における仏教と層層に関する政治人類学的研究
		民族社会研究部	外来研究員	岡本 尚子	1,430	『千一夜物語』仏語訳者マルドリュス再考—遺贈コレクション>の分析を中心に
		民族社会研究部	外来研究員	栗田 梨津子	910	オーストラリア多文化主義下の先住民とスーダン難民の緊張関係をめぐる人類学的研究
		民族社会研究部	外来研究員	中井 信介	1,300	生業の域内多様性とその形成過程: 東南アジア大陸部におけるモン村落の事例比較
		文化資源研究センター	機関研究員	呉屋 淳子	1,430	境界領域における民俗芸能の教授・創生に関する研究: 奄美諸島の高等学校を中心に
		現代インド地域研究研究拠点	拠点研究員	豊山 亜希	1,430	植民地インドにおける商業カーストの邸宅建築に関する基礎的研究
13件 (うち転出2件、転入1件)					14,690	
挑戦的萌芽研究		文化資源研究センター	教授	久保 正敏	1,820	動的共創型デジタルアーカイブ構築—梅神忠夫資料に基づいて
		民族社会研究部	外来研究員	岩谷 洋史	2,340	人類学におけるフォト・エスノグラフィの手法の探求
2件					4,160	
研究活動スタート支援		民族社会研究部	外来研究員	猪股(松井) 智子	910	女性移民・人身売買被害者支援運動の変容とその多元的リアリティの解明: タイを事例に
		先端人類科学研究部	機関研究員	浜田 明範	1,170	西アフリカにおける生権力の複数性: ガーナ南部における結核対策を事例に
		先端人類科学研究部	機関研究員	吉田 ゆか子	1,170	モノからみる芸能文化のグローバル化—パリの仮面と楽器を事例として
		民族社会研究部	外来研究員	近藤 宏	1,170	気候変動の政治経済と中南米低地先住民の所有実践
		文化資源研究センター	機関研究員	末森 薫	1,430	中国石窟芸術技法・材料の解明による美術史観再考- 麦積山石窟を事例として-
		民族社会研究部	外来研究員	神本 秀爾	910	ジャマイカ、スキン・ブリーチングが刷新する黒人性に関する文化人類学的研究
	6件 (うち転入1件)					6,760
研究成果公開促進費	学術図書	先端人類科学研究部	機関研究員	浜田 明範	1,200	薬劑と健康保険の人類学
	学術図書	民族社会研究部	外来研究員	竹村 嘉晃	1,600	神聖を生きること、その世界
	学術図書	民族社会研究部	外来研究員	大場 千景	4,600	Oral Chronicles of the Borana in Southern Ethiopia
	データベース	文化資源研究センター	教授	久保 正敏	5,100	梅神忠夫資料のデジタルアーカイブ
4件					12,500	
特別研究員奨励費			PD	八塚 春名	1,560	タンザニアにおける狩猟採集民の生業複合に関する研究
			PD	岡部 真由美	1,430	タイにおける仏教僧ネットワークにみるコミュニティの編成過程に関する人類学的研究
			PD	市川 彰	1,690	紀元後5世紀イロバン火山噴火前後のメソアメリカ太平洋沿岸部の生業と社会の研究
			PD	比嘉 夏子	1,560	社会空間の動態と行為の演劇性をめぐる人類学的研究: ポリネシアにおける贈与の全体性
			PD	田中 鉄也	650	近現代インドにおけるヒンドゥー寺院運営の意義—商業集団マールワリーを事例として
			PD	松嶋 健	1,430	社会的なるもの生態学—イタリアの社会協同組合を軸とした統治と連帯の人類学的研究
			PD	奈良 雅史	1,560	宗教と公共性をめぐる人類学的研究—現代中国におけるイスラーム復興運動の事例から—
			RPD	藤原 潤子	520	現代ロシアにおける新興教主義: 歴史認識、マイノリティ性、地位向上運動に注目して
			外国人特別研究員	鈴木七美/CAIJILAHU	400	内モンゴルにおけるシャマニズムと民間医療に関する文化人類学的研究
	9件 (うち転出2件、転入1件)					10,800
総計					192,315	

資料 10 機関研究プロジェクト

平成27年度 機関研究採択プロジェクト一覧

(平成 27.4.1 現在)

代表者氏名	所 属 研究部 職 名	研究プロジェクト名	研究期間 (3 年間)	館内 研究員	共同 研究員 (機関研究)	国際 共同 研究員	総 数
マテリアリティの人間学(領域代表: 先端人類科学研究部部長 寺田 吉孝)							
菊澤 律子	先端人類科学研究部 准教授	手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生	平成 25 年 4 月 ～ 平成 28 年 3 月	7	15	7 (3)	29 (3)
飯田 卓	先端人類科学研究部 准教授	文化遺産の人類学—グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ	平成 25 年 4 月 ～ 平成 28 年 3 月	19	7	3 (4)	29 (4)
合 計				26	22	10 (7)	58 (7)

※ 館内研究員には代表者を含む。

※ 「国際共同研究員欄」に国際研究協力者数を()書き・外数で記入。

平成26年度館長リーダーシップ経費「研究成果公開プログラム」

単位:円

事業の名称 ◎「研究成果公開プログラム」	申請者名	備考
国際学会「先史における移住と拡散:アジアとオセアニアの言語人類学的・系統地理学的アプローチ」での研究報告	先端人類科学研究部 菊澤 律子准教授	国際研究集会への派遣
日本文化人類学会50周年記念国際研究大会での研究発表と国立民族学博物館でのコロキウムおよび研究懇談	文化資源研究センター 吉田 憲司教授	館のシンポジウム
国際学術大会「The 3th Children's Museum Conference programm」での研究発表	文化資源研究センター 呉屋 淳子機関研究員	国際研究集会への派遣
国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究グループの第8回国際シンポジウムの開催	先端人類科学研究部 寺田 吉孝教授	館のシンポジウム
国際シンポジウム「フィリピン音楽の映像音響記録ーロベルトガルフィアスの歴史的貢献」	文化資源研究センター 福岡 正太准教授	館のシンポジウム
国際ワークショップ「人の移動と民族的/地域的共同性の再構築」の開催	民族文化研究部 藤本 透子助教	館のシンポジウム
第15回国際イエズス会ミッション会議における研究成果発表	先端人類科学研究部 齋藤 晃教授	国際研究集会への派遣
国際学会「International Society for third Sector Research(ISTR)」での研究発表	民族文化研究部 出口 正之教授	国際研究集会への派遣
国際会議「先史期の移住と移転: アジア・オセアニアの民族言語学的系統地理学」における研究成果発表	民族社会研究部 ピーター・マシウス教授	国際研究集会への派遣
持続可能なIPMに向けてー博物館環境データの分析手法を考えるー Analysis of Museum Environment Data for Sustainable IPM	文化資源研究センター 園田 直子教授	館のシンポジウム
公開フォーラム「古代文明の生成過程ーエジプトとアンデス」 Formation of Ancient Civilizations: Egypt and Andes	研究戦略センター 關 雄二教授	館のシンポジウム
驚異と怪異:想像界の比較研究に向けて The Marvelous and Uncanny: Towards a Comparative Study of the Imaginary	民族文化研究部 山中由里子准教授	館のシンポジウム
国際シンポジウム「世界の食文化研究と博物館」の開催 International Symposium: Gastronomic Science and Food Museum of the World	民族社会研究部 朝倉 敏夫教授	館のシンポジウム
映像民族音楽学国際会議「MusiCam 2014」での研究発表	先端人類科学研究部 寺田 吉孝教授	国際研究集会への派遣
第3回国連防災世界会議における東日本大震災等大規模災害被災地域の災害の記録・記憶に関する展示	文化資源研究センター 久保 正敏教授	館のシンポジウム

平成26年度館長リーダーシップ経費報告書

No. _____

申請者	所属	職名	氏名
	先端人類科学研究部	准教授	菊澤 律子
共同提案者(※)	所属	職名	氏名
(※)共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。			申請額 312千円
区分 (該当事項に○)	研究成果公開プログラム※	事業・調査経費	外国調査研究旅費
種別 (該当事項に○)	①館におけるシンポジウム	②研究フォーラム	③国際研究集会への派遣
1)研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。			
申請件名	国際学会における研究報告		
研究課題名	[原題・英題] Migrations and Transfers in Prehistory: Asian and Oceanic Ethnolinguistic Phylogeography [和題] 「先史における移住と拡散：アジアとオセアニアの言語人類学的系統地理学的アプローチ」		
渡航先	スイス (ベルン)		
1)研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2)研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3)事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4)外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。			
実施計画	平成26年7月25日～平成26年8月2日		
1)研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2)事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3)外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。			
成果の概要			
<p>予定通り「Migrations and Transfers in Prehistory: Asian and Oceanic Ethnolinguistic Phylogeography (先史における移住と拡散：アジアとオセアニアの言語人類学的系統地理学的アプローチ)」に出席した。これは、言語学、遺伝学、系統論、植物考古学、その他関連分野の研究者が集まり、当該地域における人類の移動史や植物の栽培化に関する最新の研究成果を学際的に議論することを目的とする研究集会である。</p> <p>菊澤は、一日目に、植物の栽培起源と人の移動に関するセッションで座長を務めるとともに、二日目には、オーストロネシア諸語において、形態統語論的变化を人の移動に結びつけるとどうなるか、という内容で言語学的観点から報告を行った。具体的には、「Variations in Fijian Languages and Their Historical Implications (フィジー語群における変種の存在およびその歴史的示唆)」というタイトルで、まず、フィジーにおける言語の多様性と史的事実の結びつきについて議論し、次に、語群に関するふたつの異なる言語系統図を例にとり、①系統樹モデルに基づく伝統的な歴史言語学の手法を適用して人の移動経路を割り出す場合に結論が異なってくる例を具体的に示し、②方法論の理論的側面からみた性質との関わりを論じると同時に、③マクロ的比較研究とミクロ的比較研究の性質の違いについて指摘した。</p> <p>このうち③は、これまで歴史言語学に基づく移動論に欠けていた視点であり、二つの視点を区別することで、今後の言語学における移動史研究をどのように発展・応用させることができる可能性について述べたが、この点について、他の研究者から非常に肯定的なフィードバックを受けることができた。このほかにも、他分野における方法論や研究成果を聴く機会を得て、今後の言語学における移動史研究をどのように発展・応用させることができるのか、他分野における研究との関連というより広い文脈を視野にいれつつ考察する題材を多く得ることができ、有意義な経験となった。(886文字)</p>			
1)研究成果公開プログラムは、研究目的・研究の実施状況を記載したうえで、800字程度で記載すること。 2)事業・調査旅費、外国調査研究旅費は、事業の成果、及び今後の課題や展望などについて、400字程度で記載すること。			

実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者			
協力者			

1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。

担当部長・施設長・センター長名	寺田 吉孝	印
------------------------	-------	---

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

出版計画 (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)

学会主催者によるプロシーディングスに投稿予定。

1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。

成果の公開 (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)

とくになし。

1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。

外部資金での実施内訳

1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。

申請額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					
合 計					千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)	菊澤律子	ベルン大学	国際学会における研究報告	8泊9日	312千円
合 計					312千円
外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名 (国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					
合 計					千円

諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費			千円
合 計			千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費			
合 計			千円
総 合 計			312千円

申請者	所属	職名	氏名
	文化資源研究センター	教授	吉田憲司
共同提案者(※)	所属	職名	氏名
(※)共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。			申請額 140千円
区分 (該当事項に○)	研究成果公開プログラム※	事業・調査経費	外国調査研究旅費
種別 (該当事項に○)	①館におけるシンポジウム	②研究フォーラム	③国際研究集会への派遣
1)研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。			
申請件名 研究課題名 渡航先	日本文化人類学会50周年記念国際研究大会(IUAES2014)におけるパネル(NME パネル兼博物館・文化遺産委員会パネル)「民族学博物館を再想像する Re-imagining Ethnological Museums」でのパネル発表と国立民族学博物館でのコロキウムおよび研究懇談		
1)研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2)研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3)事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4)外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。			
実施計画	平成26年 5月 14日 ~ 平成26年 5月 21日		
1)研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2)事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3)外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。			
成果の概要			
平成26年5月15日～18日まで開催された日本文化人類学会50周年記念国際研究大会(IUAES2014)において、カナダ・ブリティッシュコロンビア大学人類学博物館長アンソニー・シェルトン氏の参加をおおぎ、同大会でのパネル(NME パネル兼博物館・文化遺産委員会パネル)「民族学博物館を再想像する—多面的な知と接触の場としての博物館に向けての新たなアプローチ Re-imagining ethnological Museums: New approaches to developing the museum as a place of multi-lateral contacts and knowledge」を実施し、民族学博物館の新たなあり方を考究した。あわせて、大会後、シェルトン氏を民博に招聘し、研究コロキウムを通じて、近年のアートと人類学の接近について、最新の知見を交換した。また、国際大会パネル参加者には、国立新美術館での企画展「イメージのカー国立民族学博物館コレクションにさぐる」の合同視察を実施し、博物館と美術館を超えた文化装置の可能性について共同で考察し、将来への指針を得た。			
1)研究成果公開プログラムは、研究目的・研究の実施状況を記載したうえで、800字程度で記載すること。 2)事業・調査旅費、外国調査研究旅費は、事業の成果、及び今後の課題や展望などについて、400字程度で記載すること。			

実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者	吉田憲司	文化資源研究センター	パネルおよび研究の総括
協力者	伊藤敦規	研究戦略センター	パネルでの発表、研究連絡
協力者	アンソニー・シェルトン	ブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館	パネルで基調講演、共同研究

1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。

担当部長・施設長・センター長名	野林 厚志	印
-----------------	-------	---

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

出版計画 (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)

現在、申請者・吉田憲司が編集中の英文単行書『芸術と人類学 Art and Anthropology』に、パネルおよびコロキウムでの発表論文を所収の予定。

1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。

成果の公開 (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)

1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。

外部資金での実施内訳

1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。

申請額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費	幕張メッセ (起点)	国際大会で発表	4泊5日	1回1人	66千円
	国立民族学博物館	館内視察と研究コロキウムでの討議	3泊4日	1回1人	74千円
					(千葉-大阪の交通費含む)
合 計					140千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)					千円
合 計					千円

外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名 (国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					千円
合 計					千円

諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費			千円
合 計			千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費			千円
合 計			千円

総 合 計			140千円
-------	--	--	-------

平成 26 年 度 館 長 リーダー シ ッ プ 経 費 報 告 書

No. _____

申請者	所 属	職 名	氏 名
	文化資源研究センター	機関研究員	呉屋淳子
共同提案者(※)	所 属	職 名	氏 名

(※)共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。	申請額	88千円
---	-----	------

区 分 (該当事項に○)	研究成果公開 プログラム※	事業・調査経費	外国調査研究旅費
種 別 (該当事項に○)	①館における シンポジウム	②研究フォーラム	③国際研究集会 への派遣

1) 研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。

申請件名	国際学術大会での研究発表:The 3th Children's Museum Conference programm
研究課題名	Educational activities utilizing museum materials-Case studies of national museum of ethnology-
渡航先	韓国 (ソウル)

- 1) 研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。
- 2) 研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。
- 3) 事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。
- 4) 外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。

実施計画	平成26年 6月 29日 ~ 平 26年 7月 2日
------	----------------------------

- 1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。
- 2) 事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。
- 3) 外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。

成果の概要

韓国国立民俗博物館・子ども博物館で開催された第3回子ども博物館学術大会は、博物館の資料とその活用法(教育)に着目し、多様な博物館教育のあり方を議論することを目的としている。そこで、申請者は、「博物館の資料を活用した教育活動—国立民族学博物館の事例から—」と題して研究発表を行った。本発表では、これまで民族学・文化人類学の研究者が構築した物質文化の展示、みんぱっくなどの文化学習教材が、学校教育において果たす役割や機能について検討した。まず、日本の学校教育や社会教育における文化教育の実態について述べた上で、具体的な事例として現在申請者が取り組んでいる中等教育や高等教育での文化教育を提示し、民博の教育活動がもつ可能性について考察した。今後の課題として、大学共同利用機関としての教育活動、つまり大学生や更に広い年齢層を対象とした教育への応用も検討が必要であることを提示した。その結果、以下の2つの点について高い評価を得た。①韓国人にとって「民俗」や「民族」という用語は、明確な区別なく曖昧に捉えられてきた。また、韓国には韓国文化を扱った博物館だけであることから、「民族」という用語は、むしろ自民族を指すものとして理解されてきた。民博の事例発表を通して、世界の各地域を扱う博物館の存在を示しただけでなく、韓国の博物館関係者に「民族学」また「人類学」について、従来とは異なる視点を示す契機になった。②人類学の研究手法であるフィールドワークの実践が人類学の研究室で学ぶ学生だけでなく、日本の学校教育でも広くその必要性が求められているという点が非常に興味深かった。

また、申請者以外に海外からの発表者は、アメリカ・Peabody Essex Museumの学芸員、シンガポール文化財庁教育委員の2名が参加した。互いの博物館の活動や多文化教育に関する意見交換などもでき、貴重な研究交流の機会となった。

- 1) 研究成果公開プログラムは、研究目的・研究の実施状況を記載したうえで、800字程度で記載すること。
- 2) 事業・調査旅費、外国調査研究旅費は、事業の成果、及び今後の課題や展望などについて、400字程度で記載すること。

実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者			
協力者			

1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。

担当部長・施設長・センター長名	野林 厚志	印
------------------------	-------	---

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

出版計画 (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)
韓国国立民俗博物館・子ども博物館出版「子どもと博物館研究・特集号7号」に投稿予定(すでに執筆依頼を受けている)。また、日本語による成果報告(SES)も投稿予定である。
1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。

成果の公開 (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)
1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。

外部資金での実施内訳
なし
1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。

申請額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)	呉屋淳子	韓国国立民俗博物館・子ども博物館	第3回子ども博物館学術大会論文発表	3泊4日	88千円
合 計					88千円
外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名(国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					千円
合 計					千円

諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費			千円
合 計			千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費			千円
合 計			千円
総 合 計			88千円

平成26年度館長リーダーシップ経費報告書

No. _____

申請者	所属		職名		氏名	
		先端人類科学研究部		教授		寺田 吉孝
共同提案者(※)	所属		職名		氏名	
(※)共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。			申請額		465千円	
区分 (該当事項に○)	研究成果公開プログラム※		事業・調査経費		外国調査研究旅費	
種別 (該当事項に○)	①館におけるシンポジウム		②研究フォーラム		③国際研究集会への派遣	
1) 研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。						
申請件名 研究課題名 渡航先		(原題) The 8th Conference of the International Council for Traditional Music (ICTM) "Music and Minorities" Study Group (和題) 国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究グループの第8回国際シンポジウムの開催				
1) 研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2) 研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3) 事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4) 外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。						
実施計画		平成26年7月19日 ～ 平成26年7月23日				
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2) 事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3) 外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。						
成果の概要						
国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究会の第8回国際シンポジウムが、国立民族学博物館第4セミナー室において7月19日～23日に予定通り開催された。開会式に続いて、ハワイ大学名誉教授のリカルド・トゥリミリオス氏が基調講演をおこない、マイノリティ・マジョリティの二分法的概念規定の問題点を指摘するとともに、氏自身の調査地であるフィリピン、ハワイ、沖縄の事例をあげながら比較の重要性和理論化を念頭におくことの必要性を指摘した。トゥリミリオス氏の問題提起は、その後の個別発表でもしばしば言及され、シンポジウム全体の通奏低音として効果的に機能した。基調講演の後、24本の研究発表が、大会の4つのテーマ(文化政策、観光、ジェンダーとセクシュアリティ、その他の新研究)に沿って行なわれ、それぞれ活発な質疑応答が行なわれた。また民博製作の映像番組の上映も行なわれ、これについても活発な議論が行なわれた。 今回のシンポジウムでは、日本におけるマイノリティ音楽文化の一端を参加者に体験してもらうために、2つの特別イベントが企画された。大会2日目には、研究公演「アラン峠を越えていくー在日コリアン音楽の今」が開かれ、満員の聴衆の前で3組の演奏家が熱演を繰り広げた。4日目には、エクスカッションとして大阪市浪速区の被差別部落を訪れ、大阪人権博物館の視察、太鼓ワークショップ、太鼓作りの見学のあと、地元浪速神社の夏祭りに参加した。 3日目に行なわれた研究会の総会では、今回のシンポジウムの発表に基づいた論文集を刊行することが確認され、2016年の刊行を目指して編集作業を進めることとなった。今回のシンポジウムの参加者は計65名。アジア・ヨーロッパを中心に16カ国からの参加があり、文字通り国際的なシンポジウムとなった。若手の発表者・参加者も多く、次世代への継承についても一定の成果をあげることができた。						
1) 研究成果公開プログラムは、研究目的・研究の実施状況を記載したうえで、800字程度で記載すること。 2) 事業・調査旅費、外国調査研究旅費は、事業の成果、及び今後の課題や展望などについて、400字程度で記載すること。						

実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者	寺田吉孝	国立民族学博物館・先端人類科学研究部	総括
協力者	福岡正太	国立民族学博物館・文化資源研究センター	総括補佐
	竹村嘉晃	国立民族学博物館・外来研究員	事務局長
	吉田ゆか子	国立民族学博物館・機関研究員	エクスカージョン
	伊藤悟	国立民族学博物館・外来研究員	会場・映像音響機器
	福岡まどか	大阪大学大学院・人間科学研究科	事務局
	高正子	神戸大学・非常勤講師	研究公演
	米山知子	関西大学・非常勤講師	エクスカージョン

1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。

担当部長・施設長・センター長名

久保正敏

印

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

出版計画 (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)

シンポジウムでの発表にもとづいた英文論文集をSESで刊行する。刊行時期については、シンポジウム開催の2年後に報告論文集を刊行するという本研究グループの慣例に従い、2016年を予定している(添付計画書参照)。

1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。

成果の公開 (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)

本シンポジウムの開催については、すでに以下の学会ホームページに掲載されている。
<http://www.ictmusic.org/event/8th-symposium-ictm-study-group-music-and-minorities>

1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。

外部資金での実施内訳

大会参加費 (5,000円×参加者51名) 255,000円

1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。

申請額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)					千円
合 計					千円

外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名 (国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費	リカルド・トゥリミ リヨス	ホノルル (アメリカ 合衆国)	基調講演	2014. 7. 1 8~24	259千円
合 計					259千円

諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費	謝金アルバイト 2名×5日		76千円
合 計			76千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費	看板(立て看板、吊り看板)		56千円
	レジュメB5・44頁×100部(表紙カラー・本文モノクロ)		74千円
合 計			130千円
総 合 計			465千円

平成26年度館長リーダーシップ経費報告書

No. _____

申請者	所属	職名	氏名
	文化資源研究センター	准教授	福岡正太
共同提案者(※)	所属	職名	氏名
(※)共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。			申請額 30千円
区分 (該当事項に○)	研究成果公開プログラム※	事業・調査経費	外国調査研究旅費
種別 (該当事項に○)	①館におけるシンポジウム	②研究フォーラム	③国際研究集会への派遣
1)研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。			
申請件名 研究課題名 渡航先	International Symposium "Audiovisual Documentation of Philippine Music by Robert Garfias: Historical Contributions and Future Application" (国際シンポジウム「ロベルト・ガルフィアスのフィリピン音楽映像記録—歴史的意義と将来的活用」)		
1)研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2)研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3)事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4)外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。			
実施計画	平成26年 5月18日 ~ 平成 年 月 日		
1)研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2)事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3)外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。			
成果の概要 本シンポジウムは、人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究における「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」班(代表者：福岡正太)の研究活動の一環として開催したもので、アメリカの指導的民族音楽学者であるロベルト・カルフィアス氏が小泉文夫音楽賞受賞により来日した機会をとらえ、氏がフィリピンでの調査時に撮影した映像を様々な角度から再検証し、民族音楽学研究における意義と今後の活用の可能性について検討することを目的とした。本館外国人研究員米野みちよ氏が、ルソン島の映像に関連してフィリピンの音楽に関する民族誌の変化について論じ、ガルフィアス教授によるアメリカ合衆国に招かれ、教育研究に従事してきたウソパイ・カダー氏が、ミンダナオ島などの映像に関連して、クリンタン音楽の変化を論じ、フィリピン大学民族音楽学センター長のラモン・サントス氏が、ガルフィアス教授が撮影した映像記録の重要性に触れた上で、それらの資料を活用するフィリピン大の試みについて論じた。			
1)研究成果公開プログラムは、研究目的・研究の実施状況を記載したうえで、800字程度で記載すること。 2)事業・調査旅費、外国調査研究旅費は、事業の成果、及び今後の課題や展望などについて、400字程度で記載すること。			

実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者	福岡正太	文化資源研究センター	総括
協力者	寺田吉孝	先端人類科学研究部	企画
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。			

担当部長・施設長・センター長名	印
-----------------	---

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

出版計画 (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)
1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。

成果の公開 (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)
1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。

外部資金での実施内訳
本シンポジウムは、本館館長リーダーシップ経費のほかに、人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究、「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」班の経費により開催した。連携研究経費の内訳(概算)は、次の通りである。国内参加者旅費60,140円、海外参加者旅費(フィリピン1人、アメリカ2人、内1人分は国内旅費のみ)379,966円、同時通訳251,640円。
1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。

申請額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)					千円
合 計					千円

外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名(国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					千円
合 計					千円

諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費	シンポジウム運営補助	2人 2日	30千円
合 計			30千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費			千円
合 計			千円
総 合 計			30千円

平成26年度館長リーダーシップ経費報告書

No. _____

申請者	所 属		職 名	氏 名
	民族文化研究部		助教	藤本透子
共同提案者(※)	所 属		職 名	氏 名
(※)共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。			申請額	118千円
区 分 (該当事項に○)	研究成果公開プログラム※	事業・調査経費	外国調査研究旅費	
種 別 (該当事項に○)	①館におけるシンポジウム	②研究フォーラム	③国際研究集会への派遣	
1)研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。				
申請件名	(原題) International Workshop on Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness			
研究課題名	(和題) 国際ワークショップ「人の移動と民族的/地域的共同性の再構築」			
渡航先	(英題) International Workshop on Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness			
1)研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2)研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3)事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4)外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。				
実施計画	平成26年12月5日 ~ 平成26年12月6日			
1)研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2)事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3)外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。				
成果の概要				
<p>本ワークショップは、近年における国境を越えた移動の増大に着目しながら、世界各地で移民・難民あるいは少数民族などとして生活している人々がどのように共同性を再構築しているのかを広く比較研究する目的で行われた。</p> <p>2日間にわたり13名の発表者(うち6名は国外から招聘)によって、歴史性、シンボルとアイデンティティ、日常の実践、民俗知識、宗教動態、リーダーシップなどに着目した研究発表が行われ、活発な議論が交わされた。例えば、カナダの中国系移民のあいだでは歴史の継承活動が世代を超えて共同性を再構築していく重要な活動となっているのに対し、カナダのチベット難民社会においてはチベット人協会などの活動に加えてドライ・ラマの宗教的リーダーシップが共同性再構築に大きな役割を果たしている。また、ムスリムの移民の場合はイスラームが共通して重要な役割を果たすが、タイ北部のムスリムが故地である中国雲南省とのつながりを再構築する一方でタイ国内の他民族のムスリムと連携するのに対し、モンゴルのカザフ社会では国外とイスラームを通して結びつく一方で国内では特定の祝祭がエスニシティの象徴となるなど、ホスト社会との関係において何が共同性の基盤となるかという点では多様性がみられる。</p> <p>こうした事例研究を広く比較検討し、グローバル化が進展するなかでマイノリティがマジョリティに同化するのではなく社会的・文化的主張を活発に行い、ミクロなレベルで地域社会における共同性を生成し維持ないし再構築していている過程が具体的に明らかにされた。全体として、移民ないし少数民族などマイノリティがその社会内部において共同性を再構築していくにあたっては国外との連携が重要性をもつこと、国内のマジョリティとの関係性においては文化的・社会的事象の再文脈化が重要な意味をもつことが論じられた。現在、本ワークショップの議論をふまえて各執筆者が原稿を執筆中であり、2015年度に論集を出版申請予定である。</p>				
1)研究成果公開プログラムは、研究目的・研究の実施状況を記載したうえで、800字程度で記載すること。 2)事業・調査旅費、外国調査研究旅費は、事業の成果、及び今後の課題や展望などについて、400字程度で記載すること。				

実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者	山田孝子	国立民族学博物館客員教授・京都大学名誉教授	総括
代表者	藤本透子	国立民族学博物館助教	内陸アジアの移動と共同性
協力者	小島敬裕	JSPS特別研究員(PD)/京都大学東南アジア研究所	中国・東南アジアの移動と共同性

1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。

担当部長・施設長・センター長名 民族文化研究部長	池谷 和信	印
---	-------	---

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

<p>出版計画(研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)</p>
<p>本国際ワークショップの成果は、2015年5月末日までに山田孝子・藤本透子共編のSES“Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness”として出版申請する予定である。</p>
<p>1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。</p>

<p>成果の公開(出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)</p>
<p>国際ワークショップの各発表者の論文と議論を編集し、山田孝子と藤本透子の共編で、2015年5月末日までにSESとして申請予定。</p>
<p>1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。</p>

<p>外部資金での実施内訳</p>
<p>科学研究費補助金基盤研究(B)「多文化空間に生きる越境者の共同性再構築に関する地域間比較研究」(平成24～26年度、研究代表者:山田孝子、課題番号24310181)から100万円を導入(国外から招聘する4名の旅費・滞在費)。京都大学CIAS共同利用・共同研究プロジェクト「移動と宗教実践—地域社会の動態に関する比較研究」(平成25-26年度、代表:小島敬裕)から10万円を導入(国内旅費)。</p>
<p>1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。</p>

申請額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)					千円
合 計					千円

外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名(国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					千円
合 計					千円

諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費	アルバイト(5名:合計40時間)	40 時間	38千円
合 計			38千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費	チラシ印刷費(A4)	1000 枚	80千円
合 計			80千円
総 合 計			118千円

平成26年度館長リーダーシップ経費報告書

No. _____

申請者	所属		職名		氏名	
		先端人類科学研究部		教授		齋藤 晃
共同提案者(※)	所属		職名		氏名	
(※)共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。				申請額		412千円
区分 (該当事項に○)	研究成果公開プログラム※		事業・調査経費		外国調査研究旅費	
種別 (該当事項に○)	①館におけるシンポジウム		②研究フォーラム		③国際研究集会への派遣	
1)研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。						
申請件名		第15回国際イエズス会ミッション会議における研究成果発表				
研究課題名						
渡航先		教皇庁立チリカトリカ大学・サンチアゴ(チリ)				
1)研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2)研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3)事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4)外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。						
実施計画		平成26年8月25日 ~ 平成26年8月29日				
1)研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2)事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3)外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。						
成果の概要						
サンチアゴ(チリ)の教皇庁立チリカトリカ大学で開催された第15回国際イエズス会ミッション会議のパネル「知識と改宗の民族誌」において、「17・18世紀のモホスにおける先住民の戦争とミッションの拡張」と題する招待講演を行った。また、同会議のシンポジウム「辺境のイエズス会士一域内、巡回、周辺の宣教」において、「イエズス会時代のモホスにおける集住化後のバルシアリダの確立と再生産」と題する研究報告を行った。講演、報告とも、申請者が代表を務めた本館機関研究「近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ・スペイン領アメリカの集住政策の研究」(平成23~25年度)の成果公開の一部である。国際イエズス会ミッション会議は植民地時代のアメリカにおけるカトリック教会の宣教をテーマとする大規模な国際研究集会であり、この会議において機関研究の成果を発信することで、同研究および本館の国際的知名度を高めることができた。機関研究のテーマである集住政策とは、広い範囲に分散する小規模な先住民の集落をヨーロッパ式の大きな町に集中させる政策であり、16世紀から18世紀にかけてスペイン領アメリカの広い地域で実施された。カトリックの修道会はこの政策の主要な推進者であり、とりわけ17世紀以降、メキシコ北部やアマゾン、ラプラタ、チャコ、チリ南部などの辺境で精力的な活動を展開した。しかし、その重要性にもかかわらず、集住政策の研究蓄積はとぼしい。とりわけ、先住民社会への効果については、詳細がほとんどわかっていない。今回の講演と報告では、アマゾンの一地方に焦点を当て、集住政策の効果を具体的かつ詳細に解明した。講演、報告とも、従来ほとんど利用されなかった未刊史料の綿密な検討に基づいて、集住体制下の先住民社会の動態を明らかにした点が高く評価された。また、講演、報告後の意見交換を通じて、あらたな人脈を築くことができたことも、大きな成果だった。						
1)研究成果公開プログラムは、研究目的・研究の実施状況を記載したうえで、800字程度で記載すること。 2)事業・調査旅費、外国調査研究旅費は、事業の成果、及び今後の課題や展望などについて、400字程度で記載すること。						

実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者	齋藤 晃	先端人類科学研究部	発表者
協力者			

1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。

担当部長・施設長・センター長名	寺田吉孝	印
-----------------	------	---

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

出版計画 (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)

招待講演については、成果を雑誌論文としてスペインで刊行することを計画している。研究報告については、成果を申請者の編著の一部としてペルーで刊行することを計画している。

1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。

成果の公開 (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)

講演と報告の要旨が次のホームページに掲載されている。<http://www.misionesjesuiticas.cl/>

1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。

外部資金での実施内訳

1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。

申請額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)	齋藤 晃	教皇庁立チリカトリカ大学	講演と報告の実施	8/23-8/30, 9/4-9/6	412千円
注記：8月30日から9月4日にかけて、申請者は私費でリマ（ペルー）に渡航し、前述の機関研究の成果刊行のための準備会合を実施した。9月4日にはリマからサンチアゴに戻り、同日帰国の途に就いた。					
合 計					412千円

外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名（国名）	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					千円
合 計					千円

諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費			千円
合 計			千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費			千円
合 計			千円
総 合 計			412千円

平成26年度館長リーダーシップ経費報告書

No. _____

申請者	所属	職名	氏名
	民族文化研究部	教授	出口 正之
共同提案者(※)	所属	職名	氏名
(※)共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。			申請額 460千円
区分 (該当事項に○)	研究成果公開プログラム※	事業・調査経費	外国調査研究旅費
種別 (該当事項に○)	①館におけるシンポジウム	②研究フォーラム	③国際研究集会への派遣
1)研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。			
申請件名 研究課題名 渡航先	国際学会International Society for Third Sector Research(ISTR)ので研究発表 ミュンスター(ドイツ) 研究集会名: 11th International Conference of the International Society for Third Sector Research(ISTR) セッション名 Regulation of Charities and Philanthropic Foundations (発表)。Comparative Perspectives on State Regulation and Self-Regulation Policies in the Nonprofit Sector(Chair)		
1)研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2)研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3)事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4)外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。			
実施計画	平成26年7月21日—平成26年7月27日		
1)研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2)事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3)外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。			
成果の概要			
ドイツのミュンスター大学で開催された、国際学会International Society for Third Sector Research (ISTR 国際NPO・NGO 学会または国際第三セクター研究学会と訳される)に出席。 分科会セッションのComparative Perspectives on State Regulation and Self-Regulation Policies in the Nonprofit Sectorチェア。 及び分科会セッション"Regulation of charities and philanthropic foundations ; Developments in government policy and the regulatory environmentにおいて" Globalization" of standards; Study from Participant observation on Japan's Charity Commissionの論文発表を行った。 同学会は、世界から550名が参加。144セッションが開催された。非営利研究に関する最新の研究成果の交換を行った。なお、 会議そのものは、全てスマートフォンのアプリ対応で、出席者の顔や所属が出席したセッションごとで確認できるもので あった。			
1)研究成果公開プログラムは、研究目的・研究の実施状況を記載したうえで、800字程度で記載すること。 2)事業・調査旅費、外国調査研究旅費は、事業の成果、及び今後の課題や展望などについて、400字程度で記載すること。			

実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者			
協力者			
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。			

担当部長・施設長・センター長名	池谷 和信	印
-----------------	-------	---

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

<p>出版計画 (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)</p> <p>発表論文 "Globalization" of standards; Study from Participant observation on Japan's Charity Commission については「研究報告」に投稿予定。</p> <p>1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。</p>
--

<p>成果の公開 (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)</p> <p>アブストラクトについてはhttps://istr.site-ym.com/?MuensterAbstracts において公表済み</p> <p>1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。</p>
--

<p>外部資金での実施内訳</p> <p>なし</p> <p>1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。</p>
--

申請額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費	出口正之	ミュンスター (ドイツ)	学会発表7月21-27日	5泊7日	413千円
合 計					413千円
外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名(国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					千円
合 計					千円

諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費			千円
合 計			千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費	大会参加料		47千円
合 計			47千円
総 合 計			460千円

平成 26 年度 館 長 リーダーシップ 経 費 報 告 書

No. _____

申請者	所 属	職 名	氏 名
	民族社会研究部	准教授	ピーター・マシウス
共同提案者(※)	所 属	職 名	氏 名
(※)共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。			申請額 192千円
区 分 (該当事項に○)	研究成果公開 プログラム※	事業・調査経費	外国調査研究旅費
種 別 (該当事項に○)	①館における シンポジウム	②研究フォーラム	③国際研究集会 への派遣
1) 研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。			
申請件名 研究課題名 渡航先	国際会議「先史期の移住と移転：アジア・オセアニアの民族言語学的系統地理学」における研究成果発表 (Migrations and Transfers in Prehistory: Asian and Oceanic Ethnolinguistic Phylogeography) ベルン大学(スイス)		
1) 研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2) 研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3) 事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4) 外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。			
実施計画	平成26年7月27日～7月31日		
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2) 事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3) 外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。			
成果の概要			
ベルン大学で開催された国際会議、「先史期の移住と移転：アジア・オセアニアの民族言語学的系統地理学」において、『Phylogeography, ethnobotany, and linguistics: issues arising from research on the natural and cultural history of taro, Colocasia esculenta (L.) Schott』というタイトルの研究発表を行った。 人類の移動や言語の発達を研究において、生物学的アプローチおよび言語学的アプローチを援用することに、近年、関心が集まっている。この国際会議には、アジア・太平洋地域の人類の歴史に関心を持つ生物学者と言語学者が参加した。会期中、日本を含むアジア、アメリカ、ヨーロッパからの研究者たちと討論することができた。サトイモに関しておこなった発表は好評で、学会誌に投稿するよう要請された。 発表の中で、植物の栽培化と農業の出現にかかわる植物の分布と変異を解釈するための系統的なアプローチの必要性を強調した。また、作物の起源についての討論に"range limit model"の概念を取り入れることを提案した。このことが、今後の作物の起源、拡散、人口の拡大などの研究において役立てられることを願う。			
1) 研究成果公開プログラムは、研究目的・研究の実施状況を記載したうえで、800字程度で記載すること。 2) 事業・調査旅費、外国調査研究旅費は、事業の成果、及び今後の課題や展望などについて、400字程度で記載すること。			

実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者			
協力者			
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。			

担当部長・施設長・センター長名	韓 敏	印
-----------------	-----	---

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

<p>出版計画 (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)</p> <p>ベルン大学の会議主催者は、この会議の報告書を出版する。その報告書に、論文を投稿する。</p> <p>1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。</p>

<p>成果の公開 (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)</p> <p>1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。</p>
--

<p>外部資金での実施内訳</p> <p>1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。</p>
--

申請額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)	ピーター・マシウス	University of Bern	国際シンポジウムでの発表	7月24日-8月4日	192千円
合 計					192千円
外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名 (国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					千円
合 計					千円

諸謝金	事項	数量	金額
※アルバイトや講師に係る経費			千円
合 計			千円

物件費	品名・事項	数量	金額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費			千円
合 計			千円
総 合 計			192千円

平成26年度館長リーダーシップ経費報告書

No. _____

申請者	所属	職名	氏名
	文化資源研究センター	教授	園田 直子
共同提案者(※)	所属	職名	氏名
(※)共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。			申請額 585,000円
区分 (該当事項に○)	研究成果公開 プログラム※	事業・調査経費	外国調査研究旅費
種別 (該当事項に○)	①館における シンポジウム	②研究フォーラム	③国際研究集会 への派遣
1)研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。			
申請件名 研究課題名 渡航先	持続可能なIPMに向けて - 博物館環境データの分析手法を考える - Analysis of Museum Environment Data for Sustainable IPM		
1)研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2)研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3)事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4)外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。			
実施計画	平成27年2月20日		
1)研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2)事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3)外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。			
成果の概要			
博物館では、持続可能なIPM(総合的有害生物管理)を目指し、各種の環境調査を行い、その結果をもとに環境を整備する。環境調査のうち生物生息調査と温度・湿度モニタリングは、データ量が膨大となるため、いかに効率的かつ長期的視点で解析できるかが鍵となる。申請者は、人間文化研究機構・連携研究の枠内で、生物生息調査分析システムと、温度・湿度分析システムを開発し、連携機関での活用に供してきた。次の展開として、これら分析システムを、無償で、必要とする人びとに提供できるよう、パソコン単体で利用できるスモールパッケージとして完成させ、保存科学研究の成果を社会還元したいと計画している。本研究フォーラムでは、博物館環境データの分析手法について、保存科学者、学芸員、資料管理担当者がともに議論し、スモールパッケージ完成版に結びつく多くの貴重な知見が得られた。			

実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者	園田直子	国立民族学博物館・文化資源研究センター	総括
協力者	日高真吾	国立民族学博物館・文化資源研究センター	民族資料の保存環境分析
	末森薫	国立民族学博物館・文化資源研究センター	映像資料の保存環境分析
	小瀬戸恵美	国立歴史民俗博物館・情報資料研究係	考古・歴史・民俗資料の保存環境分析
	青木睦	国文学研究資料館・研究部	典籍・文書資料の保存環境分析
	神庭信幸	東京国立博物館・学芸研究部保存修復課	文化財の保存環境分析
	山口孝子	東京都写真美術館・事業企画課	写真資料の保存環境分析

1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。

担当部長・施設長・センター長名	野林 厚志 印
-----------------	---------

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

出版計画 (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)

申請者はこれまで、博物館環境分析システムを活用して得られた知見を、国内外の学会やシンポジウムで発表、セミナーやワークショップで普及してきており、今後ともこの研究活動を継続する。スモールパッケージというツールについては、完成版ができた時点で、国内外の学会やシンポジウムでひろく公開する。

成果の公開 (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)

研究フォーラムでの検証をもとに分析システムを改良し、完成版をつくる。完成版は、必要とする人びとが自由に活用できるよう、たとえば園田のホームページからのダウンロードの可能性もふくめ、公開の手法を検討する。

1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。

外部資金での実施内訳

人間文化研究機構・連携研究「人間文化資源の総合的研究」:「人間文化資源の保存環境研究」(2010～2014年度)の経費から館外者の国内旅費を支出した。(175,540円)

1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。

申請額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					
合 計					

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費	国立民族学博物館	研究フォーラム参加と発表	兵庫 日帰り	1回1名	3,100円
	国立民族学博物館	研究フォーラム参加と発表	東京 日帰り	1回4名	98,800円
	国立民族学博物館	研究フォーラム参加と発表	東京 1泊2日	1回2名	87,720円
	国立民族学博物館	研究フォーラム参加と発表	沖縄 2泊3日	1回1名	63,080円
合 計					252,700円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)					
合 計					
外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名(国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					
合 計					

諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費	アルバイト謝金	7600×1日×1人	7,600円
合 計			7,600円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費	吊看板＋立看板	1式	56,160円
	ペットボトル水 350ml	1セット	6,010円
	テーブル起こし	1式	176,228円
合 計			238,398円
総 合 計			498,698円

平成 26 年度 館長リーダーシップ経費報告書

No. _____

申請者	所属	職名	氏名
	研究戦略センター	教授	關 雄二
共同提案者(※)	所属	職名	氏名
(※)共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。			申請額 682千円
区分 (該当事項に○)	研究成果公開プログラム※	事業・調査経費	外国調査研究旅費
種別 (該当事項に○)	①館におけるシンポジウム	②研究フォーラム	③国際研究集会への派遣
1) 研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。			
申請件名 研究課題名 渡航先	(原題) 公開フォーラム「古代文明の生成過程—エジプトとアンデス(仮題)」 (英題) Formation of Ancient Civilizations: Egypt and Andes		
1) 研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2) 研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3) 事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4) 外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。			
実施計画	平成 27 年 1 月 25 日		
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2) 事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3) 外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。			
成果の概要			
<p>フォーラムにおいては、まず高宮いずみ氏が、エジプト先王国期において比較的短期間に社会階層や専門化が始まり、特別な副葬品と構造を持つエリート階層の墓が作られたことを指摘した。続く河合望氏は、古王国におけるピラミッド建設が王の葬祭と関連して登場した点、やがて葬祭への比重が高まり、それを支える組織が誕生した点、王の死後も葬祭が継承されるが、それが故に葬祭に関わるエリート階層の台頭と王の権威の失墜をもたらされた点などを述べた。これに対して、アンデス文明について、まず関雄二が文明初期における神殿の登場を、意図せざる結果とする実践論的仮説を提示し、続く井口欣也は、文明初期の神殿において、広域拠点からローカル拠点に変貌する過程で、エリート集団の拡大が生じた点を考古学的データから明らかにした。その後、4名によるパネルディスカッションにおいて、エジプトで社会階層と専門家が急激に発展した理由、西アジアとエジプトにおける都市化の違い、王権の成立基盤のイデオロギーがいつ、どのように誕生したのかについて討論を重ねた。この結果、古代エジプトでは、ゴードン・チャイルドらが提唱した唯物史観に比較的近い形で社会が変化していったこと、そしてアンデスにおける文明の成立過程とは全く異なるものであったことが再認識できた。</p>			
1) 研究成果公開プログラムは、研究目的・研究の実施状況を記載したうえで、800字程度で記載すること。 2) 事業・調査旅費、外国調査研究旅費は、事業の成果、及び今後の課題や展望などについて、400字程度で記載すること。			

実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者	關 雄二	国立民族学博物館・研究戦略センター	統括・研究発表
協力者	井口欣也	埼玉大学・教養学部	統括補佐・研究発表
	鶴見英成	東京大学・総合研究博物館	事務統括
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。			

担当部長・施設長・センター長名	塚田 誠之 印
-----------------	---------

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

出版計画 (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)
昨年実施した研究フォーラム同様に、一般書において成果を公開すべく、出版社と交渉する予定である。
1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。

成果の公開 (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)
フォーラムの概要については、関の個人ホームページにおいて公開する予定である。
1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。

外部資金での実施内訳
科学研究費補助金 基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」(代表・關雄二)の資金計103,040円を発表者4名の旅費に充てた。
1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。

申請額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)					千円
合 計					千円

外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名 (国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					千円
合 計					千円

諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費			千円
合 計			千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費	会場代		502千円
	ポスター・チラシ代		180千円
合 計			682千円
総 合 計			682千円

平成 26 年 度 館 長 リーダーシップ 経 費 報 告 書

No. _____

申請者	所 属	職 名	氏 名
	民族文化研究部	准教授	山中由里子
共同提案者(※)	所 属	職 名	氏 名
(※)共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。			申請額 620千円
区 分 (該当事項に○)	研究成果公開 プログラム※	事業・調査経費	外国調査研究旅費
種 別 (該当事項に○)	①館における シンポジウム	②研究フォーラム	③国際研究集会 への派遣
1) 研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。			
申請件名 研究課題名 渡航先	驚異と怪異: 想像界の比較研究に向けて The Marvelous and Uncanny: Towards a Comparative Study of the Imaginary		
1) 研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2) 研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3) 事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4) 外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。			
実施計画	平成 26年 10月 12日 ~ 平成 26年 10月 13日		
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2) 事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3) 外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。			
成果の概要			
申請者が共同研究で明らかにしてきた驚異をめぐる中東とヨーロッパの比較心性史を、国際日本文化研究センターの小松和彦氏が牽引してきた妖怪研究や東アジア怪異学会が中心となって行ってきた怪異の研究と対比させ、新たな比較研究の枠組みを検討する会であった。午前には申請者がまず今後のプロジェクトの概要を説明し、これまでの驚異研究の紹介をした。小松が怪異研究の今後の方向性について話した。黒川がヨーロッパにおける驚異と超自然の概念について紹介した。午後は、中国と日本の怪異思想、怪異の視覚表象、驚異・怪異の展示について、参加者から事例提供があり、全体討議を行った。本フォーラムの参加者は、これまで個別に活動してきた上記プロジェクトのコアメンバーで、専門とする地域、時代、学問分野が異なる。通常は交流する機会が少ないこれらの研究者が専門的知識と、それぞれが関わってきた驚異・怪異関係のプロジェクトの成果を共有するプロジェクトを来年度から本格的に立ち上げる予定であり、今回はその妥当性と方向性を探った。外部の研究者や学生の参加もあり、限られた時間で内容の濃い議論が行われた。			

実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者	山中由里子	国立民族学博物館	総括・東西文化交流史
協力者	菅瀬晶子	国立民族学博物館	現代アラブ社会の驚異
	小松和彦	国際日本文化研究センター	日本近現代の怪異
	香川雅信	兵庫県立歴史博物館	日本近世の怪異
	黒川正剛	太成学院大学	中世・近世ヨーロッパの驚異
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。			

担当部長・施設長・センター長名

印

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

出版計画 (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)

2015年度内に名古屋大学出版会から論文集を刊行予定。

1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。

成果の公開 (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)

ホームページでプログラムを公開した。

1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。

外部資金での実施内訳

人間文化研究機構連携研究から参加者出張費の一部を支出した。(概算額279000円)

1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。

申請額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費	東京-民博	ワークショップ ^o ディスカント	2泊3日	7	420千円
	宮城-民博	ワークショップ ^o ディスカント	2泊3日	1	87千円
	京都-民博	ワークショップ ^o ディスカント	日帰り	2	18千円
合 計					525千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)					千円
合 計					千円

外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名(国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					千円
合 計					千円

諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費	資料整理・テープ起こしアルバイト謝金	12日	92千円
合 計			92千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費			
	ミネラルウォーター ボルヴィック 500ml 1セット(6本)	5	3千円
合 計			3千円
総 合 計			620千円

平成26年度館長リーダーシップ経費報告書

No. _____

申請者	所属		職名		氏名	
		民族社会研究部		教授		朝倉敏夫
共同提案者(※)	所属		職名		氏名	
(※)共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。				申請額		1,061千円
区分 (該当事項に○)	研究成果公開プログラム※		事業・調査経費		外国調査研究旅費	
種別 (該当事項に○)	①館におけるシンポジウム		②研究フォーラム		③国際研究集会への派遣	
1)研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。						
申請件名		立命館大学との学術交流協定締結を記念する国際シンポジウム「世界の食文化研究と博物館」の開催 International Symposium: Gastronomic Science and Food Museums of the World				
研究課題名						
渡航先						
1)研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2)研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3)事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4)外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。						
実施計画		平成26年12月 6日 ~ 平成26年12月 7日				
1)研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2)事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3)外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。						
成果の概要						
<p>国立民族学博物館と立命館大学(国際食文化研究センター)が2014年4月10日に締結した学術交流協定を記念して、世界の食文化研究と博物館の果たす役割に関する国際シンポジウムを2日間に渡り本館講堂にて開催し、一般参加者を含む385人の参加者を得た。「食」は、人類の生存にとって原始からもっとも大きな問題であり、「食」と環境・生態・安全・健康との関係は、喫緊の今日的な問題でもある。しかし、「食は文化である」という視点から研究が始まったのも、「食文化」という言葉が一般に使われるようになったのも、この30-40年である。本シンポジウムでは「食は文化である」という再認識のもと、食文化研究の意義を明らかにする一方、食文化を研究するうえでの博物館の役割について考察した。</p> <p>初日は、本館館長及び立命館理事長からの挨拶の後、在大阪イタリア総領事及び駐大阪韓国総領事から祝辞をいただいた。その後本館朝倉から趣旨説明を行い、引き続き石毛直道元民博館長をはじめ、日本、中国、イタリア、韓国の食文化研究の進展について講演が行われた。</p> <p>2日目は、博物館における食文化の表現や展示について、東アジアを中心とした事例報告があり、今後の食文化研究の発展と博物館の役割についての討論が行われた。最後に、立命館大学の井澤教授から、今後も両機関が連携のうえ食文化研究を推進していく決意を述べた。</p> <p>本シンポジウムを通じ、我が国において食文化研究がどのような展開をみせてきたのか、その足跡と現状を明らかにし、世界においては食文化の研究がどのように進められているのかを俯瞰することができた。そして、食文化を研究するうえで博物館がどのような貢献をしているか、まずは東アジアを中心に、その現状を具体的な事例を通して報告してもらい、今後、博物館が食文化を研究するうえで果たすべき役割について考察できた。</p>						
1)研究成果公開プログラムは、研究目的・研究の実施状況を記載したうえで、800字程度で記載すること。 2)事業・調査旅費、外国調査研究旅費は、事業の成果、及び今後の課題や展望などについて、400字程度で記載すること。						

実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者	朝倉敏夫	民族社会研究部	総括
協力者	池谷和信	民族文化研究部	日本の食研究
	宇田川妙子	民族社会研究部	イタリアの食研究
	河合洋尚	研究戦略センター	中国南部の食研究
	韓 敏	民族社会研究部	中国北部の食研究
	小長谷有紀	人間文化研究機構・民族社会研究部	モンゴルの食研究
	菅瀬晶子	研究戦略センター	中東の食研究
	野林厚志	文化資源研究センター	台湾の食研究
	井澤祐司	立命館大学	食と経済学

1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。

担当部長・施設長・センター長名	韓 敏	印
------------------------	-----	---

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

出版計画 (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)

シンポジウムの報告は、2015年度に刊行される立命館大学社会システム研究所の『社会システム研究』に掲載する予定である。

1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。

成果の公開 (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)

日本と韓国の食文化研究と博物館についての本シンポジウムでの研究成果は、2015年度開催の日韓国交50周年記念特別展「韓日食博」に反映する計画である。

1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。

外部資金での実施内訳

立命館大学国際食文化研究センターとの共同開催により、外部資金を導入する。当該資金で支出した経費については、以下で立命館大学負担と記載した。

申請額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費	東京	シンポの事前協議			立命館負担
	小浜	シンポの事前協議			立命館負担
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費	東京一民博	鈴木邦男他2名招へい			立命館負担
	小浜一民博	中田典子招へい			立命館負担
	関西一民博	石毛直道他9名招へい			立命館負担
合 計					千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費	朝倉敏夫	韓国			立命館負担
	河合洋尚	中国			立命館負担
	宇田川妙子	イタリア			立命館負担
合 計					千円

外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名(国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費	Gabriella MORINI	イタリア一大阪			立命館負担
	李貞姫他3名	韓国一大阪			立命館負担
	3名	中国一大阪			立命館負担
合 計					千円

諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費	アルバイト謝金(シンポの準備)	7600×7日×2人	107千円
	アルバイト謝金(プロシーディング・報告書作成)	7600×30日×1人	228千円
	通訳代: 中国語・韓国語・イタリア語		立命館負担
	講演謝金		立命館負担
合 計			335千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費	音響照明業務委託(準備打合せ1日+2日)	1式	200千円
	受付案内業務委託	2日	171千円
	チラシデザイン・印刷	14000	253千円
	プロシーディング作成 印刷	600	102千円
	懇親会費		立命館負担
	弁当代		立命館負担
合 計			726千円
総 合 計			1,061千円

平成26年度館長リーダーシップ経費報告書

No. _____

申請者	所属		職名	氏名
	先端人類科学研究部		教授	寺田 吉孝
共同提案者(※)	所属		職名	氏名
(※)共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。			申請額	279千円
区分 (該当事項に○)	研究成果公開プログラム※	事業・調査経費	外国調査研究旅費	
種別 (該当事項に○)	①館におけるシンポジウム	②研究フォーラム	③国際研究集会への派遣	
1) 研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。				
申請件名	MusiCam 2014: International Conference on Visual Ethnomusicology			
研究課題名	MusiCam 2014: International Conference on Visual Ethnomusicology (映像民族音楽学国際会議「MusiCam 2014」)			
渡航先	スペイン・ヴァリャドリッド大学			
1) 研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2) 研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3) 事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4) 外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。				
実施計画	平成26年11月3日 ～ 平成26年11月10日			
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2) 事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3) 外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。				
成果の概要 <p>2104年11月5日～7日にスペイン、ヴァリャドリッド大学で開催された国際会議MusiCam 2014に、当初の予定通り参加した。この会議は、映像民族音楽学 visual ethnomusicologyに関する国際的な研究グループの立ち上げを念頭において開催されたもので、参加者はヨーロッパ、ラテンアメリカを中心にして約30名であった。映像人類学は人類学の下位分野として一定の評価をすでに得ているが、音楽芸能を対象を絞った映像民族音楽学は、包括的な議論を継続して行うための組織化が未だなされておらず、今回の研究グループの立ち上げが実質的に初めての試みとなった。</p> <p>会議では、主催大学のエンリケ・カマラ教授による趣旨説明とペルーのラウル・ロメロ教授による基調講演のほか、20本の研究発表が行われた。申請者は、会議初日の11月5日に発表を行い、民博映像番組の製作過程から抽出した問題点を手掛かりにして、映像番組作成のプロセスの再検討を提案した。会議を通して熱心な議論が行われ、映像番組作成の倫理的な側面に関する議論では辛辣な応酬もあった。</p> <p>7日の会議終了後には、研究グループ設立の準備会合が開かれ、グループの目的や規約の制定などが議論された。また、会議での発表に基づいた論文集の刊行が決定され、申請者を含む4名が編者に指名された。</p> <p>今回の会議は、ヨーロッパ、ラテンアメリカの民族音楽学における映像メディアの位置づけや研究動向を学ぶ好機となった。今後、民博との連携を念頭におきながら研究者のネットワーク化を進めたい。</p>				
1) 研究成果公開プログラムは、研究目的・研究の実施状況を記載したうえで、800字程度で記載すること。 2) 事業・調査旅費、外国調査研究旅費は、事業の成果、及び今後の課題や展望などについて、400字程度で記載すること。				

実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者			
協力者			
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。			

担当部長・施設長・センター長名	久保正敏	印
-----------------	------	---

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

<p>出版計画 (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)</p> <p>主催者であるヴァリャドリッド大学はシンポジウムの発表をもとにした論文集の刊行を計画しており、申請者はその論文集に投稿を予定している。</p> <p>1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。</p>

<p>成果の公開 (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)</p> <p>特になし。</p> <p>1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。</p>

<p>外部資金での実施内訳</p> <p>参加費ならびに11月4～8日(4泊5日)の宿泊費(ホテル代)はヴァリャドリッド大学から支出された。</p> <p>1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。</p>

申請額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)	寺田吉孝	スペイン	MusiCam 2014参加	8日間	279千円
			内訳は下記のとおり。 航空運賃および長距離列車代¥189,890、日当¥47,900、宿泊費¥37,600、 関空往復¥3,520 = ¥278,910		
合 計					279千円

外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名(国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					
合 計					千円

諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費			
合 計			千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費			
合 計			千円
総 合 計			279千円

平成26年度館長リーダーシップ経費報告書

No. _____

申請者	所 属	職 名	氏 名
	文化資源研究センター	教授	久保正敏
共同提案者(※)	所 属	職 名	氏 名
(※)共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。			支 出 額 539千円
区 分 (該当事項に○)	研究成果公開 プログラム※	事業・調査経費	外国調査研究旅費
種 別 (該当事項に○)	①館における シンポジウム	②研究フォーラム	③国際研究集会 への派遣
1)研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。			
申請件名 研究課題名 渡航先	申請件名:第3回国連防災世界会議における東日本大震災被災地域の災害の記録・記憶に関する展示 研究課題名:館長リーダーシップ経費による「東日本大震災等大規模災害に関わる人間文化研究」		
1)研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2)研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3)事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4)外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。			
実施計画	平成 27年 3月14日 ~ 平成 27年 3月18日		
1)研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2)事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3)外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。			
成果の概要			
<p>2015年3月14日から18日まで仙台市で第3回国連防災世界会議が開催された。その期間中の17日に、パブリック・フォーラムとして「世界災害かたりつぎフォーラム」を実施した。これは、人と防災未来センター、名古屋大学減災連携研究センター、東北大学災害科学国際研究所そして民博からのメンバーで構成されるTeLL-Netフォーラム実行委員会が開催したものである。目的は、大災害を経験した世界各地で様々な災害語り継ぎを展開する組織や団体と、先端的な減災研究に取り組む機関が一堂に会し、よりハイレベルな減災のための効果的な人材育成や手法を検討するものであり、2010年3月に神戸で開催された世界災害語り継ぎフォーラム(実行委員長:林勲男)を継承するものであった。</p> <p>フォーラム開催に合わせ、「東北太平洋沿岸地域の津波災害の経験と教訓を語り継ぐ」をテーマに展示をおこなった。東日本大震災発生後に進めてきた、東北太平洋沿岸部の過去および現在の災害の記録・記憶に関わるデータの収集調査の中間成果をデータベース化して、この展示で公開した。展示ブースには約300名の来場者があり、用意したフォーラムの案内チラシ、民博、人と防災未来センターのパンフレットはほとんどなくなった。また、17日のフォーラムには68名の出席者があった。フォーラムは、東日本大震災(2011)、中越地震災害(2004)、インド洋大津波災害(2004)、阪神・淡路大震災(1995)、ハワイ島津波災害(1946,1960)の被災地で展開している語り継ぎ活動の報告を踏まえて、災害経験やそこからの教訓を共有し、活動に先端的な防災・減災研究の成果を融合させ、人材育成や減災活動の方策について議論された。本展示は、被災地コミュニティやそこに暮らす人びとによる災害経験の語り継ぎや、得た教訓を地域や時代を超えて防災・減災に生かそうという過去および現在の活動についてのデータを提供することで、市民レベルの活動の意義と災害常襲地域におけるリスクとの共生の在り方について、東日本大震災の被災地からの具体的な事例を紹介した。同時に、そうした市民レベルの活動へ着目した民博の調査研究を世界に向けて発信し、人文社会科学の防災・減災研究への貢献の一例を示すことができた。</p>			

実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者	久保正敏	国立民族学博物館・文化資源研究センター	総括
協力者	吉田憲司	国立民族学博物館・文化資源研究センター	過去の津波碑に関する研究
	林 勲男	国立民族学博物館・文化資源研究センター	東日本大震災関連のモニュメント・慰霊碑・遺構に関する研究

1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。

担当部長・施設長・センター長名	野林 厚志 印
------------------------	---------

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

出版計画 (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)
「阪神・淡路大震災のデジタルアーカイブ」、「TeLL-Net (災害かたりつぎ)フォーラム」および本展示についてまとめ、『滅災』(人と防災未来センター発行)にて成果を発表予定。
1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。

成果の公開 (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)
報告書を作成し、TeLL-Net(災害かたりつぎ)のウェブサイトにも掲載予定。

外部資金での実施内訳
ひょうご安全の日推進事業助成金(200万円)により、TeLL-Netフォーラム2015として、2月22日に神戸にて「阪神・淡路大震災のデジタルアーカイブ」と、3月17日に仙台にてパブリック・フォーラム「TeLL-Net(災害かたりつぎ)フォーラム」を実施した。
1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。

申請額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費	せんだいメディアテーク	展示の事前準備と打ち合わせ	3月8・9日	1	92千円
	せんだいメディアテーク等	展示の設営・解説・撤去、フォーラム参加	3月13日～19日	1	118千円
合 計					210千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)					千円
合 計					千円

外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名(国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					千円
合 計					千円

諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費	展示解説補助のためのアルバイト雇用(2名のべ8日間)	8日分	61千円
合 計			61千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費	展示ブース借料		98千円
	ポスターパネル作成費		99千円
	展示用液晶モニター上映に関する一式レンタル		71千円
合 計			268千円
総 合 計			539千円

無形文化遺産

選ぶ視点

選ばれる現実

【日時】2014年11月4日[火] 18:30~20:40 (17:30開場)

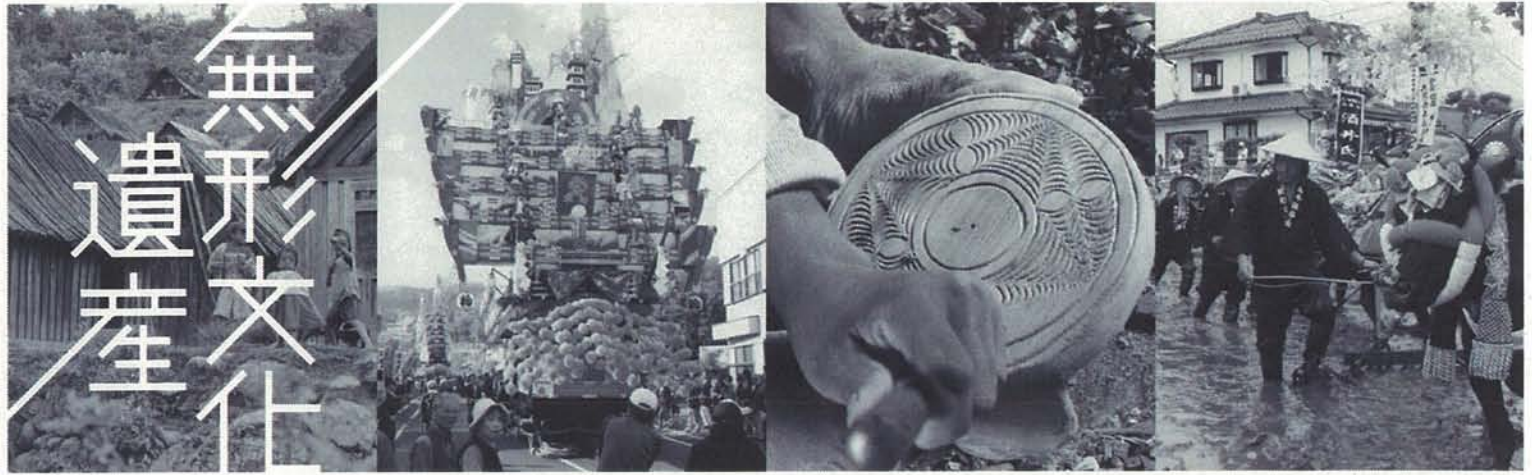
【場所】日経ホール(東京都千代田区大手町1-3-7 日本経済新聞社ビル3階)

【定員】600名 【参加費】無料(要申込/「参加証」が必要です) *手話通訳あり

主催 国立民族学博物館・日本経済新聞社

みんな
携帯
サイト





□プログラム

- 総合司会：三尾 稔（国立民族学博物館・准教授）
- 17：30 開場
- 18：30 開会 宮本 明彦（日本経済新聞社執行役員・大阪本社編集局長）
- 18：35 挨拶 須藤 健一（国立民族学博物館・館長）
- 18：40 講演1 飯田 卓（国立民族学博物館・准教授）
- 19：15 講演2 俵木 悟（成城大学・准教授）
- 19：50 休憩
- 20：05 パネル・ディスカッション
コメント：福岡 正太（国立民族学博物館・准教授）×
飯田 卓×俵木 悟
司会：丹羽 典生（国立民族学博物館・准教授）
- 20：40 終了

講演1 「文化遺産を伝える静かなくらしーマダガスカル」

飯田 卓（国立民族学博物館・准教授）

マダガスカル中央高地の山間部では、日常生活であたりまえのようにおこなっていた工芸の技術や知識が、無形文化遺産と呼ばれるようになった。交通の便がよくなり、工業製品や観光客が増えていくなか、この「遺産」を伝えるにはどうすればよいのか。現地の報告をまじえながら考える。

講演2 「誰の、誰のための無形文化遺産ー日本から考える」

俵木 悟（成城大学・准教授）

日本は無形文化の保護を世界に先駆けて法制化した国であり、ユネスコの無形文化遺産条約の制定にも主導的に関わってきた。その一方で、日本が長年をかけて築いてきた堅緻な制度と、融通性の高い新しい国際条約とのあいだの齟齬も目立っている。とくに「誰のための遺産か」という観点から、この問題について考えてみたい。

申込方法：申込方法：「11月4日講演会参加希望」と明記の上、ハガキ、FAX、メールにてお申し込みください。お申し込みの場合は、次の①～⑤を記載してください。①郵便番号、②住所、③氏名、④連絡先電話番号、⑤今後の講演会などのご案内送付希望の有無（次のア～ウのうち希望する記号をア、講演会を含む民博主催の研究会・催物等の案内を希望する/イ、講演会のみを希望する/ウ、いずれの案内も希望しない）

10月上旬より順次参加証を発送する予定です。

※1：応募者多数の場合は、ご参加いただけない場合もございます。

※2：2名様以上でお申し込みの場合は、それぞれの方について①～⑤をご記載ください。

※3：手話通訳をご希望される方、車椅子をご利用される方は、お席を用意いたしますので、お申し込みの際に必ずご記載ください。

※4：参加申込みをいただいた方の個人情報は、参加証の発送、次回以降の講演会などのご案内以外には使用いたしません。

宛先：〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 国立民族学博物館 研究協力課 宛

●FAX 06-6878-8479 ●メールアドレス koenkai@idc.minpaku.ac.jp

問合せ先：国立民族学博物館 研究協力課研究協力係

●TEL 06-6878-8209 ●URL <http://www.minpaku.ac.jp/>

注意事項：会場には必ず参加証をご持参ください。参加証はお一人様一枚となっております。

参加証がない方は会場には入れないことがありますのでご注意ください。

- 東京メトロ・千代田線「大手町駅」中央改札より徒歩約4分・丸ノ内線「大手町駅」鎌倉橋方面改札より徒歩約5分
- 半蔵門線「大手町駅」大手町方面改札より徒歩約5分
- 東西線「大手町駅」中央改札より徒歩約9分・東西線「竹橋駅」大手門口方面改札より徒歩約3分
- 都営地下鉄・三田線「大手町駅」大手町方面改札より徒歩約6分 ※地下鉄「大手町駅」下車C2b出口直結

□プロフィール

飯田 卓（いいた・たく）

専門は生態人類学、視覚メディアの人類学。漁村や山村の生活技術が変容しながら受け継がれるプロセスに着目し、「文化遺産の人類学」の枠組みを構想している。著書に『身をもって知るーマダガスカルのヴェズ漁師に学ぶ』（臨川書店、2014年）などがある。



俵木 悟（ひょうき・さとる）

専門は民俗学。とくに民俗芸能を中心に身体表現文化の伝承実践についての調査研究を行う。2002年から2011年まで国立文化財機構東京文化財研究所無形文化遺産部の研究員として、国の民俗文化財行政を含めた無形文化遺産保護に関する研究に従事した。



福岡 正太（ふくおか・しょうた）

専門は民族音楽学。インドネシア、西ジャワの伝統芸能について現地調査に基づく研究を行ってきた。芸能の伝承において映像記録が果たす役割にも関心をもっている。共著に『インドネシア芸能への招待ー音楽・舞踊・演劇の世界』2010年、東京堂出版）など。



国立民族学博物館公開講演会
無形文化遺産 選ぶ視点、選ばれる現実
参加内訳状況及び、アンケート集計結果報告

日時:平成26年11月4日(火)18:30~20:40(開場17:30)
 場所:日経ホール(東京都千代田区大手町1-3-7 日経ビル3階)
 天候:晴天

	平成26年度	平成25年度	平成24年度	平成23年度
開催日程	平成26年11月4日(火)	平成25年10月25日(金)	平成24年10月26日(金)	平成23年11月4日(金)
開催場所	日経ホール	日経ホール	日経ホール	日経ホール
募集定員 A	600名	600名	600名	600名
参加申込総数 B	441名	604名	785名	465名
申込者出席数 C	297名	426名	555名	249名
当日参加者数 D	13名	1名	9名	9名
参加者総数 E=C+D	310名	427名	564名	258名
申込者出席率 C/B	67.3%	70.5%	70.7%	53.5%
アンケート回答者数 F	214名	268名	387名	208名
アンケート回答率 F/E	69.0%	62.8%	68.6%	80.6%

(小数点第二位以下四捨五入)

過去の公開講演会テーマ

- 平成25年度 国立民族学博物館公開講演会 「ミャンマー 刻んだ歴史 未来へのまなざし」
- 平成24年度 国立民族学博物館公開講演会 「だから人類は地球を歩いた—太平洋へ アメリカへ」
- 平成23年度 国立民族学博物館公開講演会 「ワタシのIBASHO—新しい『ふるさと』像を求めて」

(注)アンケート集計内の%は、すべて小数点第二以下を四捨五入した数値である。

平成26年度 公開講演会参加状況内訳

申込方法別参加状況

(名)

	申込者数(a)	(a)／申込者数合計	参加者数(b)	(b)／参加者数合計	出席率(b/a)
ハガキ	96	21.8%	65	21.0%	67.7%
FAX	66	15.0%	31	10.0%	47.0%
メール	274	62.1%	196	63.2%	71.5%
一般招待者	4	0.9%	4	1.3%	100.0%
電話受付	1	—	1	0.3%	—
当日参加	—	—	13	4.2%	—
合計	441	100%	310	100%	70.3%

(小数点第二位以下四捨五入)

都道府県等別参加者状況

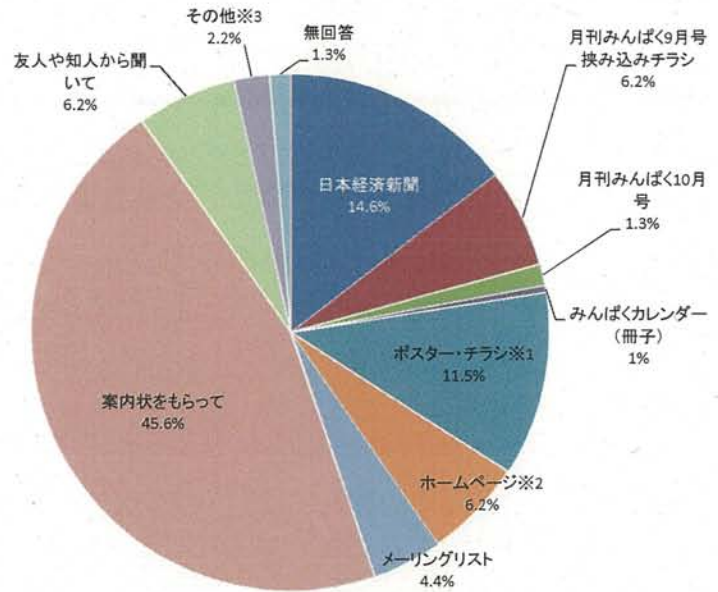
(名)

都道府県等	参加者数	備 考
東京都	202	(都内23区、調布市、東京市、多摩市、外)
神奈川県	37	(横浜市、川崎市、座間市、鎌倉市、外)
千葉県	28	(千葉市、船橋市、市川市、外)
埼玉県	27	(さいたま市、所沢市、川口市、外)
茨城県	5	(つくば市、土浦市)
群馬県	2	(伊勢崎市、伊波郡)
山形県	1	(西置賜郡)
栃木県	1	(宇都宮市)
福島県	1	(須賀川市)
中部地方	3	(愛知県)
関西地方	2	(大阪府、奈良県)
九州地方	1	(大分県)
合計	310	

アンケート集計結果報告

1. 公開講演会は何でお知りになりましたか(複数回答あり)。

	(名)
日本経済新聞	33
月刊みんぱく9月号挟み込みチラシ	14
月刊みんぱく10月号	3
みんぱくカレンダー(冊子)	1
ポスター・チラシ※1	26
ホームページ※2	14
メーリングリスト	10
案内状をもらって	103
友人や知人から聞いて	14
その他※3	5
無回答	3
計	226



※1 ポスター・チラシを見た場所

みんぱく	0
大学	6
公共図書館	7
役所、公立施設	0
文化センター・生涯学習施設	1
博物館・美術館	4
日経ホール	1
無記入	7
計	26

※2 ホームページ

みんぱくホームページ	3
無記入	11
計	14

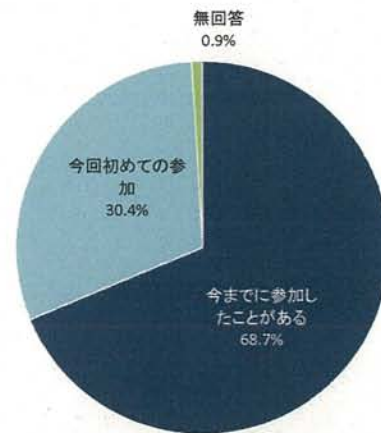
※3 その他

朝日新聞	2
ツイッター	2
無記入	1
計	5

(小数点第二位以下四捨五入)

2. 公開講演会の参加について

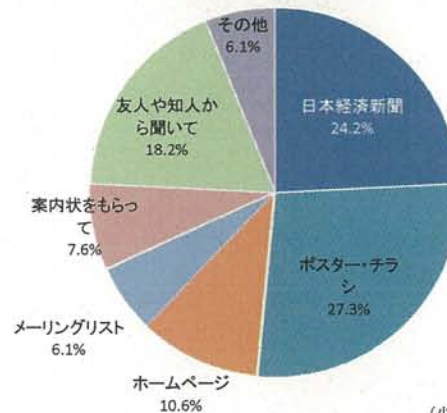
	(名)
今までに参加したことがある	147
今回初めての参加	65
無回答	2
計	214



(小数点第二位以下四捨五)

【参考】初参加者が講演会を何で知ったか(複数回答あり)

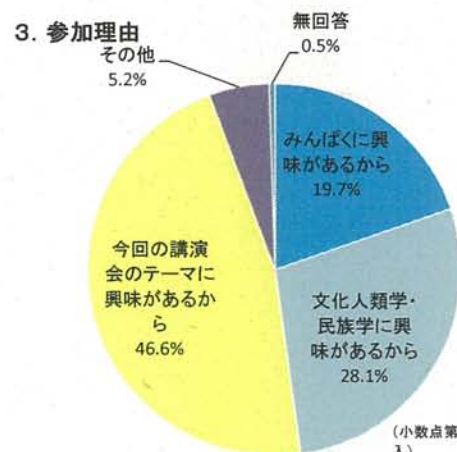
	(名)
日本経済新聞	16
月刊みんぱく9月号挟み込みチラシ	0
月刊みんぱく10月号	0
みんぱくカレンダー(冊子)	0
ポスター・チラシ	18
ホームページ	7
メーリングリスト	4
案内状をもらって	5
友人や知人から聞いて	12
その他	4
無回答	0
計	66



(小数点第二位以下四捨五)

3. 今回参加された理由は(複数回答あり)

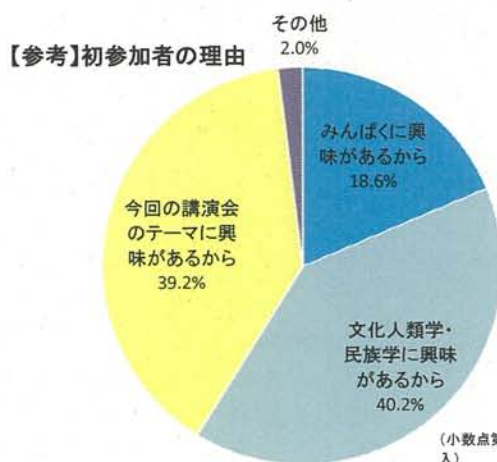
	(名)
みんぱくに興味があるから	80
文化人類学・民族学に興味があるから	114
今回の講演会のテーマに興味があるから	189
その他	21
無回答	2
計	406



(小数点第二位以下四捨五入)

【参考】初参加者が参加した理由は(複数回答あり)

みんぱくに興味があるから	19
文化人類学・民族学に興味があるから	41
今回の講演会のテーマに興味があるから	40
その他	2
無回答	0
計	102

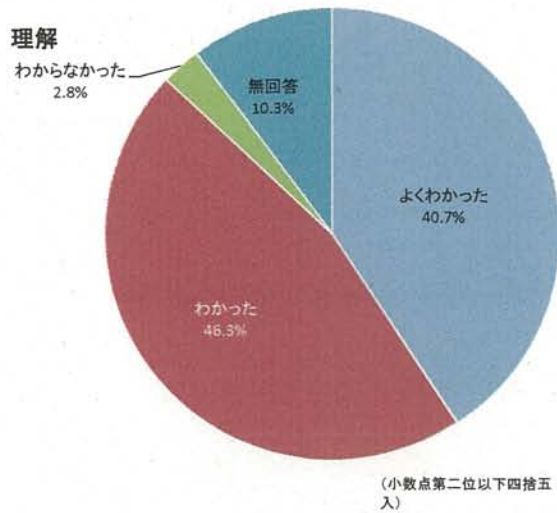


(小数点第二位以下四捨五入)

4. 今回の公開講演会の内容はどうでしたか。

		(名)
①理解	よくわかった	87
	わかった	99
	わからなかった	6
	よくわからなかった	0
	無回答	22
計		214

4-1 理解



①の理由(一部抜粋。重複意見は省略)

※感想のみの記載は質問9に移動

よくわかった、わかった理由

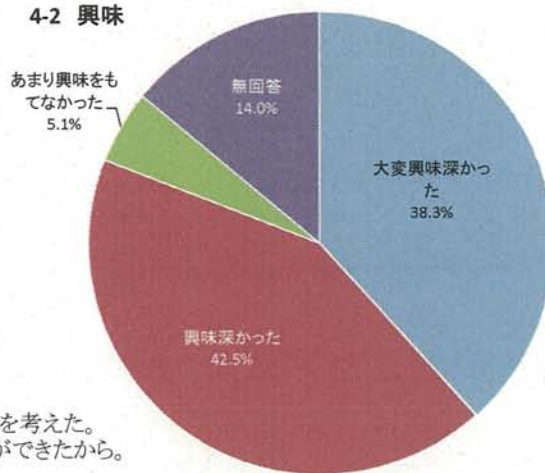
- ・定義が丁寧に説明されていた。
- ・パワーポイントが分かりやすい。
- ・具体的に例をあげての説明がわかりやすかった。
- ・無形文化遺産とはどのようなものなのかを事例をあげて説明してもらったが、まだ十分理解できない所があった。
- ・「無形文化遺産」の定義について講演が重複していましたが、世界遺産との比較をしながらよく理解できました。
- ・無形文化遺産とは漠然としていたがやや整理するポイントがわかった。
- ・無形文化遺産のとらえ方が具体的にわかった。
- ・世界遺産と世界文化遺産の選定基準の差が分かった。
- ・無形文化遺産についての認識が変わった。
- ・俵木先生の講演の進め方と内容が非常にわかりやすかった。
- ・無形文化遺産そのものへの知識がなかったものをわかりやすく教えていただいた。
- ・無形文化遺産の定義や仕組みなど大変わかりやすかったです。
- ・無形文化遺産についての説明がわかりやすかった。
- ・お二人とも理路整然とはなしていたから。
- ・パネルディスカッションは面白いが専門的だった。
- ・マダガスカルと日本を事例として(両極!?)いた点が理解を促進してくれた。
- ・制度の意義や影響、これからのあり方について考える視点を提示していただいた。
- ・判りやすい話し方でした。
- ・知らなかったことを知ることができた。
- ・興味深い話を分かりやすく話してくれるのが俵木さんから。
- ・具体的にどういったものか例をあげて説明があったため。
- ・文化遺産についての現状の課題を知ることができた
- ・無形文化遺産に興味があったので。
- ・無形文化財の意義、国民の生活、重要性。
- ・無形文化遺産の保護的な制度の意義。
- ・パネルディスカッションにもう少し時間が欲しいところです。
- ・“文化遺産”という位置づけについて身近にあるものだと思えた。
- ・身近なテーマだし 平易な言葉で話されていました。
- ・写真もあり簡潔で分かりやすかった。
- ・言葉は知っているつもりでしたが今回は理解が深まった。
- ・無形文化遺産を巡る問題がわかった。
- ・無形文化遺産のマダガスカルの遺産についてよくわかった。
- ・先生方がとてもよかった。
- ・世界遺産との比較がとてもよかった。
- ・無形文化についてわからなかった。
- ・映像を使っでの説明だから。
- ・系統的話の内容のため
- ・初めて「無形文化遺産」の何たるかを理解することができた。
- ・具体例を交えての話がよかった。
- ・よくまとめてくれた。
- ・日常生活の中でこのようなアカデミックな事象を考えたことがなかった。

わからなかった理由

- ・少し耳が遠く聞き辛い面があり残念です。マイクにもう少し近づけていただければよかったですと思います。
- ・知識皆無 これから学んで参りたく思います。
- ・無形文化遺産が変化していった場合、どうなるのかについても話してほしいと思いました。研究者としては必要だと思います。
- ・専門的だった。パネルディスカッションは興味が持てた。

②興味	大変興味深かった	82
	興味深かった	91
	あまり興味をもてなかった	11
	無回答	30
計		214

4-2 興味



(小数点第二位以下四捨五入)

②の理由(一部抜粋。重複意見は省略)

※感想のみの記載は質問9に移動

大変興味深かった、興味深かった理由

- ・知らないことを知識として聞いておくのは良い事だと思った。
- ・各地の担い手がどうなっていくのか 出身地の福岡の山笠のケースを考えた。
- ・“無形文化遺産”になったことで問題点や良かった点などを知ることができたから。
- ・パネルディスカッションは集中し興味深く伺うことができました。
- ・知識がこれまであまりなかったから。
- ・今後、自分で掘り下げて勉強してみたい。そのきっかけになった。
- ・研究者はどんな役割になるかという問題提起のディスカッションに大いに興味をもった。
- ・講演やパネルやパネルディスカッションが判りやすかった。
- ・知らないことが多いので興味をもった。
- ・文化遺産の維持の問題点について 和食の特殊性について分かった。
- ・埼玉県の二つの重要文化財を気に入って関わっている保存会の方の苦労振りを関心をもっていただけ。
- ・無形文化遺産と世界文化遺産の違いがはっきりした。
- ・今のところ関係する場面がない。
- ・日本内部の無形文化遺産がどのように指定されているのか興味深かった。
- ・大変興味深く拝聴させていただきました。
- ・日本のことはわかると聞いていました。
- ・受け継ぐことが重視されているように聞こえた。
- ・無形文化遺産はユニバーサルではなくそのコミュニティでの物と多様性を認め興味深く思いました。
- ・研究者の話聞きながら観光客としての関わり方を考えなければいけないことにふと気づいた。
- ・マダガスカルと日本を事例として(両極!?)いた点が理解を促進してくれたことが大きい。
- ・福岡先生の話が一番興味深かった。
- ・世界遺産と共に関心が深まった。
- ・和食は日本の無形文化財に指定されていないのに無形文化遺産に指定された。
- ・文化遺産の継承に研究者/専門家の関わり方。
- ・アフリカや日本国内の事例が聞けて良かったです。
- ・マダガスカルの木彫りのデザインと社会のあり方。
- ・無形文化遺産の物件として担い手の存在、未来の展望など。
- ・全体として大変有意義でした。
- ・無形文化遺産が地域コミュニティと関係が深い。
- ・日常深く考えなかったが今回を機に関心を向けると思う。
- ・具体的な事例をパワーポイントでみることでより興味が深まった。
- ・無形文化遺産の問題点がよくわかった。
- ・七夕おどりの例はよくわかった。
- ・日本の文化を考える点で役に立つ情報ではある。

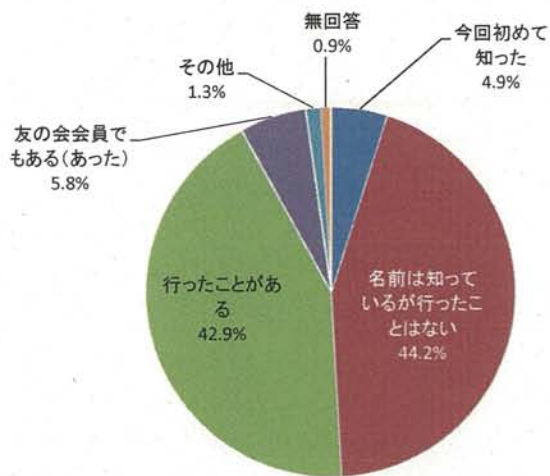
あまり興味が持てなかった理由

- ・初めて知る内容がなく、驚きはなかった。
- ・もう少し実例を挙げてほしかった。

5. 国立民族学博物館(みんぱく)はご存知ですか(複数回答あり)。

	(名)
今回初めて知った	11
名前は知っているが行ったことはない	99
行ったことがある	96
友の会会員でもある(あった)	13
その他	3
無回答	2
計	224

5.「みんぱく」を知っているか

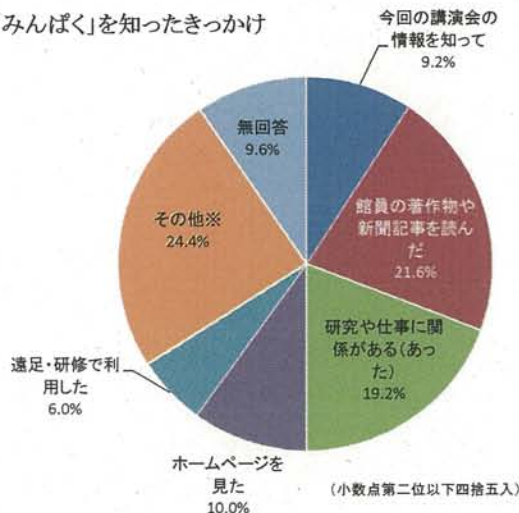


(小数点第二位以下四捨五入)

6. みんぱくを知ったきっかけは何ですか。(複数回答あり)

	(名)
今回の講演会の情報を知って	23
館員の著作物や新聞記事を読んだ	54
研究や仕事に関係がある(あった)	48
ホームページを見た	25
遠足・研修で利用した	15
その他※	61
無回答	24
計	250

6.「みんぱく」を知ったきっかけ



(小数点第二位以下四捨五入)

※ その他

以前の講演会・シンポジウム等に参加して	12
友人・知人からの紹介	5
梅棹忠夫	3
訪問による	12
新国立新美術館の展示会で	2
新聞	2
ちらし	5
その他	18
無記入	2
計	61

7. 今後とりあげるテーマにご希望があればお聞かせ下さい。

【世界の国々について】

- ・北朝鮮民族の文化
- ・中央アジア ロシア関係
- ・アフリカの国の成立
- ・モンゴル
- ・イスラーム、イスラム文化(信仰、儀式、行事…)について
- ・世界の文化遺産を幅広く知りたい。めずらしい事を話してほしい
- ・大陸、東南アジア、南方海洋民族、アイヌ等の北放民族の人的文化交流
- ・朝鮮半島と日本の関わり
- ・あまり交流のないアジアの国々の現状の紹介
- ・インド音楽、東南アジアの工芸、チベットの服
- ・ヨーロッパ、特にイタリア フランス
- ・各国、各民族の神に対する考え方とその行動

【世界の人々の生活】

- ・差別(民族の)と歴史
- ・文明と文化の違いについて
- ・建築と文化の関わり方
- ・食文化 (特に食と宗教、習慣、民族など)
- ・世界の民族の生活習慣と民具の共通性と差、違いについて
- ・山の民と海の民との生活習慣と信仰の対象について
- ・舞踊、演劇
- ・国ごとの子供玩具の変遷
- ・色(カラー)の好み(民族的な違いや類似性)
- ・人の社会集団の形成過程
- ・極北の民族について
- ・世界の民族は気候変動にどう対応しようとしているのか

【日本について】

- ・日本人のルーツ、起源(人類学的)、・日本文化の起源
- ・日本の文化財行政について
- ・日本人の生活様式について
- ・日本の農業
- ・皇室の歴史
- ・和食について
- ・無形文化遺産について主に日本国内の事例研究について
- ・日本の失われた文化
- ・日本の祭り みこしの件 しまい(東京で多い一人立ち3匹しなど)、奉納祭り(盆踊り)
- ・日本が大東亜狭共栄圏という美名のもとに強制的に生み出していった東南アジアの戦時文化について(特に1937~1945)決して2度と同じ道を歩まないために
- ・日本と南アフリカの関わり
- ・沖縄、新潟
- ・日本と韓国が文化人類学、民族学的に共に理解して共に生きるために何をなすべきか！パネルディスカッションしてほしい。

【その他】

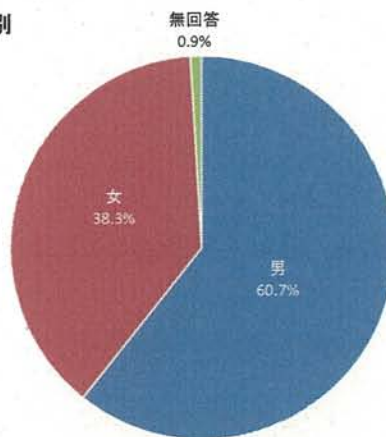
- ・数年後に同じテーマで聞きたい。
- ・言語学
- ・音楽学、音楽民族学
- ・食文化、食に関するテーマ(特に牛乳文化)
- ・民族芸能・音楽(伝承)
- ・民族音楽学的研究の歴史、問題点及び今後の展望
- ・芸能とパフォーマンスに関する研究
- ・楽器に関する無形文化遺産に関して
- ・普遍的な文化とその理由(喫茶の文化、麺文化、太鼓、ダンス、踊りなど)
- ・人口問題(日本及び世界)
- ・気候変動
- ・教科書と国際関係、医術の国際比較
- ・葬式、墓に関するテーマ
- ・それぞれの地域の伝統的な神や神社などの話 遺跡など
- ・気候変動と資源保護の問題
- ・移動方法について、方向の定め方 移動する理由(古代、中世にお江k留)
- ・伝統儀礼、観光化された宗教儀礼など
- ・生命を支えていく<在り方>でこの現在に希求されるだろう<テーマ>をお願いしたい。
- ・風土病の現在 (なぜアフリカに多いのか エボラに限らず)
- ・有形文化遺産と無形文化遺産の関わり
- ・楽器、食、以前もありましたが12月のような講演を東京でもぜひ。
- ・人と動物はどのようにつきあってきたか
- ・文化人類学関連
- ・アイヌの人々(昔と今) シャーマンについて
- ・第2次世界大戦の関係
- ・狩猟
- ・感染症
- ・医療人類学

8. よろしければお答え願います。

8-1 性別 (名)

①性別	男	130
	女	82
	無回答	2
	計	214

8-1 性別

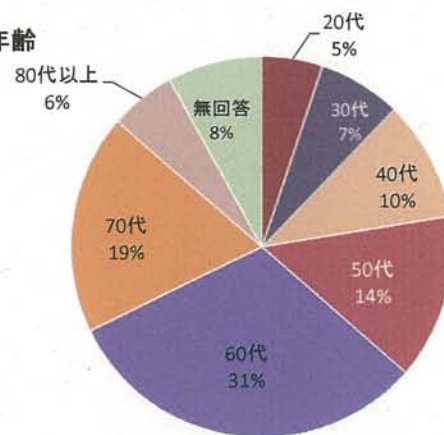


(小数点第二位以下四捨五入)

8-2 年齢 (名)

②年齢	10代	0	0	0%
	20代前半	7	11	5%
	20代後半	4		
	30代前半	11	15	7%
	30代後半	4		
	40代前半	10	22	10%
	40代後半	12		
	50代前半	17	30	14%
	50代後半	13		
	60代前半	29	67	31%
	60代後半	38		
	70代前半	23	40	19%
	70代後半	17		
	80代以上	12	12	6%
	無回答	17	17	8%
	計	214		

8-2 年齢

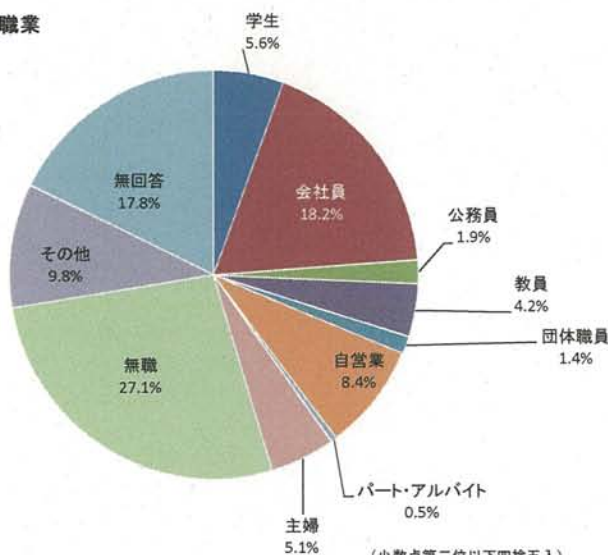


(小数点第二位以下四捨五入)

8-3 職業 (名)

③職業	学生	12
	会社員	39
	公務員	4
	教員	9
	団体職員	3
	自営業	18
	パート・アルバイト	1
	主婦	11
	無職	58
	その他	21
	無回答	38
	計	214

8-3 職業



(小数点第二位以下四捨五入)

9. その他ご感想、ご意見、ご希望をお書き願います。【一部抜粋】

【感想】

- ・時間が短く、説明も早口で少し難しかった。
- ・もう少し深いところでの話が聞きたかった。時間が短いので難しいでしょうが。
- ・現状とそれを伝承続けるのにはと考えさせられた。
- ・皆様専門家ですのでやはり私は低いレベルの見方しかできません。
- ・東京在住でなかなか大阪に行けないので頻繁に東京でセミナーをお願いします。
- ・来年も期待しています。
- ・本日のテーマは具体性があるようで何かつかみ難いテーマ内容でしたが部系文化遺産とはどのようなもので各人がそれぞれどうかかわっていくかを考える機会を提示されたと思います。
- ・長い間ヨーロッパ中心で経済、交易がおこなわれてきた民族たちが否否近年台頭してきた民族の多様性に興味を持った国連が旗をあげてみたと思うと面白い。頑張れ無形文化遺産！！
- ・「文化」とは後世の評価であって「今」の評価ができない。興味をもつことや関わるのがまるで時間の無駄のようにいわれることもある。交通、通信の技術が進み世界が均一化されるなか 日本固有の文化は残されていくのか疑問を持っている。
- ・勉強になりました、ありがとうございました。
- ・遺産という役割を終えたもの 保有のイメージがありますが、今日のお話は今、生きているものの伝承と思います。残したいか否かコミュニティ選択と思いました。
- ・プログラムの時間配分などとてもよかったです。
- ・みんなく 20代の若いころに訪ねて以来なかなか行きません、また行きたい 前回行って1日で見きれなかったので3日くらいかけてみたい
- ・六本木で行われた「イメージの力」見に行きました。mが今まで東京でも講演が行われていた事を今日初めて知りました。来年も参加したいと思います。
- ・文化とは何かを改めて考えたいと思います。
- ・大学で個人的に無形文化財について学んでいます丁寧な解説のもとよく理解することが出来ました。また自分自身おはやしの伝承活動をしている立場からも今後のコミュニティの関わり方について考えることが出来ました。
- ・内容が良いのだが解説の仕方、話し方がわかりづらい。後半のPDは課題がわかりやすく提示されてよかった！
- ・映像をもっと使ってほしい。
- ・パネルディスカッションの時間をもう少し増やしてほしい。
- ・写真を撮る年配の方が多く講演に集中しづらいです。
- ・今後 大阪に行ったときは是非みんなくを訪問したい。
- ・二人の講演者の話で重複する部分があり短い時間をもったいないと思いました。
- ・深いテーマであった。たくさん要素が短時間にポンポンと豊かにかつバラエティがあり受けとっていない自分がある。貴重な開いた場に感謝申し上げます。
- ・地域の文化をどうするか ということはそこに住む人たちが考えるもの、選択するもの、無益文化はそこに住む人たちのもの、どう選ぶか、変えるかは他の国の人は言えない、時代共に変化するので良いのではないか。
- ・なかなか大阪に行くことができないので毎年この講演会を楽しみにしています。
- ・パネルディスカッションは「研究者」にこだわる設問で、講演にくらべわかりにくかった。
- ・高齢で旅行視察できないのでこのような講演会で世の中のことを知りたい。
- ・相続税が伝統を破壊するのではないのでしょうか。
- ・世界遺産と無形文化遺産の違いがわかってよかった。
- ・研究者としての視点を知ることができた
- ・具体性と課題ということを考えたい。
- ・無形文化遺産について初めて知り面白かった。
- ・無形文化遺産に日本の重要無形民俗文化財の考えが反映されている。
- ・無形文化遺産は普遍性がもたれられていないのかな。
- ・遺産を正しい姿で継承指定行くことの困難なことだと思った。
- ・人々の生活の中での文化、催事における文化について改めて考えるきっかけを与えていただきました。
- ・直接聞くことにより文章から伝えられない物を得た。
- ・外国の援助、社会の変化に伴い無形文化財自体も変化をよぎなくされているように思う。
- ・知識の浅い分野だったので内容は新鮮だった。
- ・講演会のテーマからは内容があまり一般的にはイメージしにくいので、興味をもってききに行こうと考える人は限られていたのではと思う。
- ・講演者の話の進め方が少し早すぎます。私たちは大学生ではないのですからもう少し一般的なスピードで講義を聞きたかったです。メモを取りましたが追いつけません。
- ・無形文化遺産が出来た意義はよく判ったが、そうすると文化遺産になることはどういうことなのかとも思いました。
- ・世界遺産との関連が出てきて混在していくのではないか。
- ・生活に根ざした伝統的習慣の継承が難しい事 また生活できるだけの収入がないとだめ、伝統と生活費のギャップ 近代化の課題、利便性と人間的豊かさのギャップ。
- ・世界無形文化遺産がまだこれからの概念であることがわかり収穫でした。
- ・非常にむずかしかった。
- ・人類が見守ってきたものが時代と共に変化し また継承が難しくなっている。それぞれの地域の貴重な生活に結びついたものを大切にしたい。
- ・無形文化遺産の維持が大変なこと、専門家と現地の人々との係り方は常に原点に立つて行くことが重要だと思いました。
- ・記録として残すことは大事だとは思いますが、神事まで写し残さなければならないのでしょうか。
- ・伝統を守るべきという研究者の姿勢になってしまうのではないか 意見をいつてしまうのでは影響をされてしまうのでは。
- ・今後 遺産の継承を国をあげて考えなければ。
- ・パワーポイントで何が問題なのかテーマやポイントが示されるともって一般人に判りやすかったかもしれない。
- ・担い手にとって重要性を要件とすうつこと 人類文化の多様性を保護するということ。
- ・文化遺産の今後は高齢社会、過疎化の中で難しい問題と感じる、担い手の継承がどこまでできるか疑問に思う。
- ・選ばれたことによっておこる変化、また和食など自分もメンバーになっているものなどもっと聞いていたい話がたくさんありました。
- ・話が分かりやすい面白かった。
- ・今後は新聞等の見方が変わらと思う。
- ・普遍的な事 (universal)の意味を知って有意義であった。

【その他要望】

- ・東京にも大きな民族博物館があるとよい。
- ・会場で聴衆が質問する時間を配慮されよ。
- ・12/6～7に行われる講演会を 東京でも(テーマをしぼって)聞きたい。
- ・今後も講演会を開催してほしい。
- ・PR不足、観客が少なくもったいない。主な図書館にパンフを！
- ・民博は世界の民族の多様性を国内に積極的に伝えていく役割をしっかりとになっていってほしい。
- ・もう1日東京で開催してほしい。
- ・和食について もう少し掘り下げて欲しかった。
- ・集客について:日経主催の美術展などでチラシを置いたら?日経ホールはきれいで便利でとても良いと思います。日経とみんなくのご縁が続きますように。
- ・関西にでかけることが無いので東京でこのような講演・展示・写真などの企画が欲しい。
- ・パネルディスカッションは 必要だろうか?続けてまとめをしてくださればよい。
- ・一人あたりの講演時間をもう少し伸ばしてはだめか?休憩時間はなくてもよいと思う。パネルディスカッションで福岡先生しゃべりすぎ。
- ・出来るなら昼時間帯(午後)の開催をお願いしたい。土曜日でもよい。
- ・先日 東京で展示がありなかなか良かったです。これからも時々東京で開いていただけるとよいです。
- ・東京でのみんなくコレクション展の隔年開催 赤坂ツインタワー新美術館 その他で。
- ・みんなくグッズを販売してほしい(本だけでなく)。
- ・東京講演会の回数を増やしてほしい。
- ・私の場合は友の会の会員として数十年興味を持っているが今回のテーマについてはイメージが判らず申し込みも迷った。みんなくの宣伝を一般の人々にかねて行うなどもう少しイメージしやすいテーマとするのも一つの方法と思います。

みんぱく 公開講演会

いやし旅の ウラ?表?

India

Malaysia

→ 現代アジアツーリズム考

2015年3月20日(金)

18:30~20:45 (開場17:30)

オーバルホール 大阪市北区梅田3-4-5
毎日新聞社ビルB1

定員：480名 手話通訳あり

参加費：無料 (要事前申込/「参加証」が必要です)



申込方法および会場までの地図については、国立民族学博物館のホームページでご確認下さい

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱく

検索

主催：国立民族学博物館・毎日新聞社

近年の日本からアジアへのツーリズムは、メディカル・ツーリズムや老後の長期滞在型ツーリズム、さまざまな体験型ツーリズムなどのように、一時代前の観光旅行とは異なる多様なかたちが見られるようになってきました。

今回の講演会では、特に「ケア」や「癒やし」を目的としたツーリズムに焦点をあて、その現状の一端を講演者の現地での研究に基づいてお話しします。講演とパネル・ディスカッションを通じ、新しいツーリズムの人気の原因や現地社会への影響、またこのような現象は日本社会の現状をどのように反映していると考えられるのか、今後どのようなツーリズムが旅客と現地社会とのより深い関係を築く上で望ましいのか、といった点について理解を深めてゆきたいと思います。

講演1 松尾 瑞穂

(国立民族学博物館 先端人類科学研究部 准教授)

インドのメディカル・ツーリズム —癒やしから先端医療まで



要旨

健康増進や病気治療を目的とする旅をメディカル・ツーリズムといいます。近年、インドでは、アーユルヴェーダやヨガのような伝統医療から、代理出産のような先端医療まで、多様なメディカル・ツーリズムが見られるようになってきました。人びとはメディカル・ツーリズムに何を求めてインドに向かうのでしょうか。そして、メディカル・ツーリズムは、現地社会をどのように変えていくのでしょうか。新たな産業として期待されるメディカル・ツーリズムについて考えます。

【講師紹介】

専門は文化人類学、南アジア研究。西インド社会におけるジェンダーと生殖実践の変容や、生殖ツーリズムに関する調査研究を行っている。主な著書に『ジェンダーとリアリティの人類学—インド農村社会の不妊を生きる女性たち』(2013年、昭和堂)や『インドにおける代理出産の文化論』(2013年、風響社)などがある。

講演2 小野真由美

(岡山大学 グローバル・パートナーズ 講師)

老後の海外長期滞在ツーリズム —マレーシアの日本人高齢者



要旨

近年、「ロングステイ」という新たな国際観光のトレンドが、日本人の老後のライフスタイルとして注目を集めています。ロングステイは、暮らすように旅する、あるいは旅するように暮らす海外長期滞在型余暇をさす言葉です。なかでも人気滞在国であるマレーシアでは、日本人高齢者が定住する傾向がみられます。なぜマレーシアが日本人高齢者に人気なのでしょう。日本人高齢者の長期滞在の実態と受け入れ国マレーシアの変容について検討します。

【講師紹介】

専門は文化人類学。マレーシアとタイを主たる調査地とし、国際退職移住・海外ロングステイ、ライフスタイル移住、医療・介護の越境化に関する研究に従事している。主な共著書に、『人の移動事典—日本とアジア』(2013年、丸善出版)、『Catching the Wind: Penang in a Rising Asia』(2012年、ISEAS)、『観光文化学』(2007年、新曜社)などがある。

コメンテーター

信田 敏宏

(国立民族学博物館 文化資源研究センター 教授)



【コメンテーター紹介】

専門は社会人類学、東南アジア研究。開発、イスラーム化、エスニシティなどをテーマに、マレーシア先住民オラン・アスリを対象とした調査研究に従事している。主な著書に『周縁を生きる人びと—オラン・アスリの開発とイスラーム化』(2004年、京都大学学術出版会)、『ドリアン王国探訪記—マレーシア先住民の生きる世界』(2013年、臨川書店)などがある。

プログラム

- 17:30—18:30 受付
- 18:30—18:35 開会 小菅 洋人(毎日新聞大阪本社 編集局長)
- 18:35—18:40 挨拶 須藤 健一(国立民族学博物館 館長)
- 18:40—19:15 **講演1** 松尾 瑞穂
インドのメディカル・ツーリズム—癒やしから先端医療まで
- 19:15—19:50 **講演2** 小野 真由美
老後の海外長期滞在ツーリズム—マレーシアの日本人高齢者
- 19:50—20:10 休憩
- 20:10—20:45 パネル・ディスカッション
コメンテーター：信田 敏宏
司会：三尾 稔(国立民族学博物館 研究戦略センター 准教授)

申込方法：「3月20日講演会参加希望」と明記の上、ハガキ、FAX、又はメールにてお申し込みください。お申し込みの際は、次の①～⑤を記載してください。

- ①郵便番号、②住所、③氏名、④連絡先電話番号、⑤今後の講演会などのご案内送付希望の有無(次のア～ウのうち希望する記号をア、講演会を含むならば主催の研究会・催物等の案内を希望する/イ、講演会のみを希望する/ウ、いずれの案内も希望しない)

2月下旬より順次参加証を発送する予定です。

- *1：応募者多数の場合は、ご参加いただけない場合もございます。
- *2：2名様以上でお申し込みの場合は、それぞれの方について①～⑤をご記載ください。
- *3：手話通訳をご希望される方、車椅子をご利用される方は、お席をご用意いたしますので、お申し込みの際に必ずご記載ください。
- *4：参加申込をいただいた方の個人情報は、参加証の発送、次回以降の講演会などのご案内以外には使用いたしません。

宛先：〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1

- FAX 06-6878-8479 ●メールアドレス koenkai@idc.minpaku.ac.jp

問合せ先：国立民族学博物館 研究協力課研究協力係

- TEL 06-6878-8209

注意事項：・会場には必ず参加証をご持参ください。

- ・参加証はお一人様一枚必要です。
- ・参加証をお持ちでない方は会場に入れないことがありますのでご注意ください。

会場



- ・JR大阪駅(桜橋口)から地下道にて徒歩約8分
- ・阪神梅田駅・地下鉄西梅田駅から徒歩約8分
- ※車でのご来場はご遠慮ください

国立民族学博物館公開講演会
いやし旅のウラ？表？-現代アジアツーリズム考
 参加内訳状況及び、アンケート集計結果報告

日時:平成27年3月20日(金)18:30～20:45(開場17:30)
 場所:オーバルホール(大阪市北区梅田3-4-5 毎日新聞社ビル内)
 天候:晴れ

	平成26年度	平成25年度	平成24年度	平成23年度
開催日程	平成27年3月20日(金)	平成26年3月20日(木)	平成25年3月22日(金)	平成24年3月16日(金)
開催場所	オーバルホール	オーバルホール	オーバルホール	オーバルホール
募集定員 A	480 名	480 名	480 名	480 名
参加申込総数 B	423 名	395 名	430 名	624 名
申込者出席数 C	298 名	279 名	303 名	437 名
当日参加者数 D	14 名	24 名	12 名	18 名
参加者総数 E=C+D	312 名	303 名	315 名	455 名
申込者出席率※ C/B	70.4%	70.6%	70.5%	70.0%
アンケート回答者数 F	182 名	199 名	227 名	344 名
アンケート回答率※ F/E	58.3%	65.7%	72.1%	75.6%

過去の公開講演会テーマ

- 平成25年度 公開講演会「働き者と、ナマケモノ!?-『はらたきかた』文化論」
- 平成24年度 公開講演会「なんだ日本の文化って?-芸能からMANGAまで」
- 平成23年度 公開講演会「ヨーロッパと日本の宗教-問いなおされる救済のかたち」

(注)アンケート集計内の%は、すべて小数点第二以下を四捨五入した数値である。

平成26年度 大阪公開講演会参加状況内訳

参加者方法別参加状況

(名)

	申込者数(a)	(a)／申込者数合計※	参加者数(b)	(b)／参加者数合計※	出席率(b/a)※
ハガキ	100	23.6%	74	23.7%	74%
FAX	69	16.3%	46	14.7%	67%
メール	232	54.8%	173	55.4%	75%
招待者	6	1.4%	4	1.3%	67%
来館・電話受付	2	0.5%	1	0.3%	50%
当日参加	14	3.3%	14	4.5%	—
合計	423	100%	312	100%	*72.8%

*申込者のみの出席率 (312-14)÷409

※:小数点第二位以下四捨五入

都道府県別参加者状況

(名)

都道府県等	参加者数	備考
大阪府(大阪市内)	112	(北区、都島区、福島区、中央区、淀川区、東住吉区、住之江区、此花区、外)
その他	118	(堺市、吹田市、豊中市、茨木市、八尾市、東大阪市、寝屋川市、外)
計	230	
兵庫県(神戸市)	12	(東灘区、灘区、中央区、外)
その他	32	(西宮市、川西市、芦屋市、宝塚市、明石市、尼崎市、他)
計	44	
京都府(京都市)	5	(左京区、上京区、西京区、北区)
その他	4	(長岡京市、宇治市、八幡市)
計	9	
奈良県	13	
和歌山県	3	
滋賀県	2	
関東地方	5	(東京都、神奈川県、山梨県)
静岡県	1	
青森県	1	
岡山県	2	
広島県	1	
合計	311	
住所不明	1	
総合計	312	

アンケート集計結果報告

1. 公開講演会は何でお知りになりましたか(複数回答あり)。

	(名)
毎日新聞	54
月刊みんぱく2月号挟み込みチラシ	7
月刊みんぱく3月号	3
ポスター・チラシ※1	26
みんぱくカレンダー	0
ホームページ・Facebook ※2	20
メールリスト	3
案内状をもらって	67
友人や知人から聞いて	13
その他 ※3	4
無回答	2
計	199

※1 ポスター・チラシを見た場所

みんぱく	3
大学	3
公共図書館	6
役所、公立施設	3
文化センター・生涯学習施設	3
その他	2
無記入	6
計	26

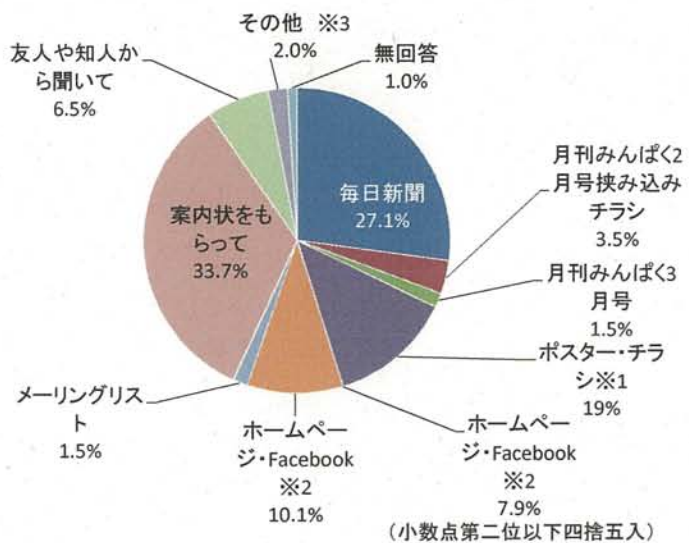
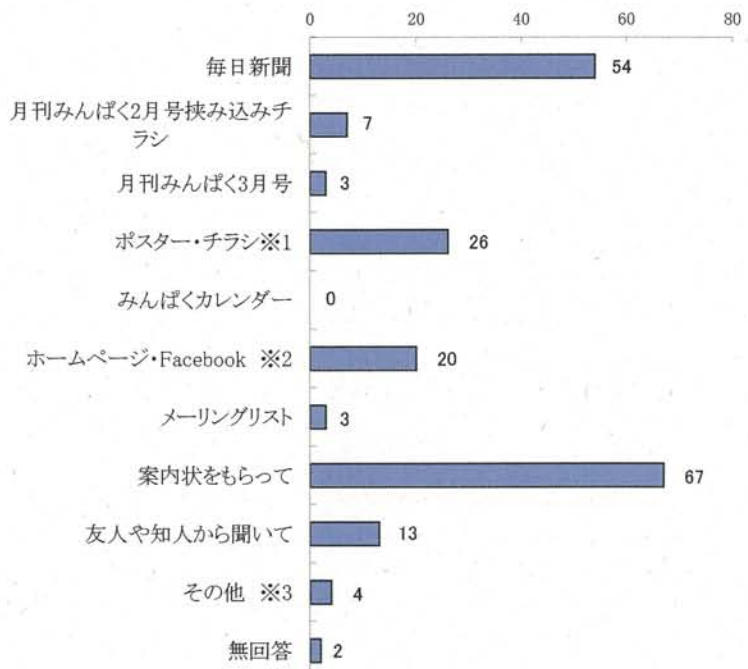
※2 ホームページ・Facebook

みんぱく	4
facebook	1
無記入	16
計	20

※3 その他

ブログ	1
twitter	1
Google検索	1
無記入	1
計	4

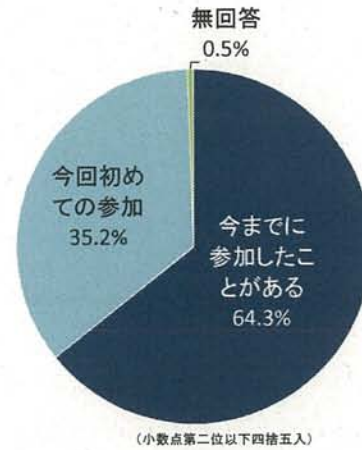
1.講演会を何で知ったか



2. 公開講演会の参加について

(名)

今までに参加したことがある	117
今回初めての参加	64
無回答	1
計	182

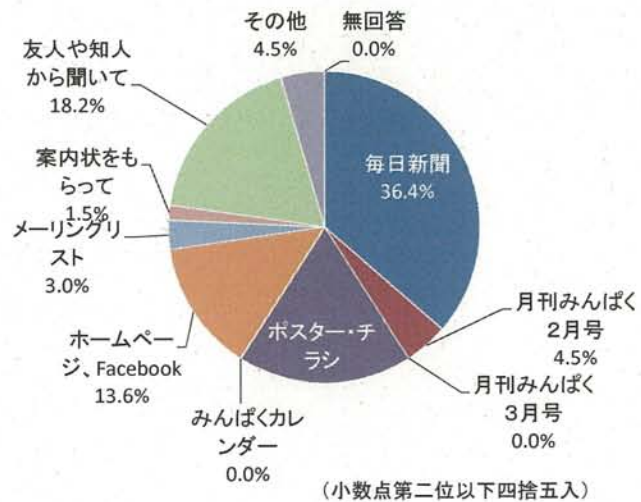
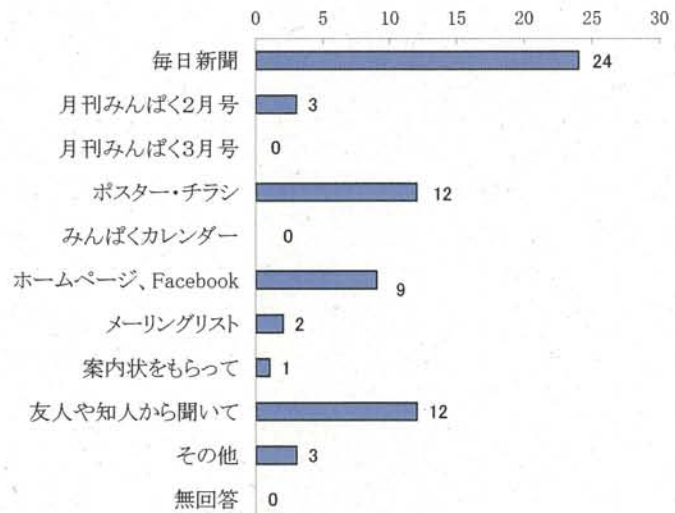


【参考】初参加者が講演会を何で知ったか(複数回答あり)

(名)

毎日新聞	24
月刊みんぱく2月号	3
月刊みんぱく3月号	0
ポスター・チラシ	12
みんぱくカレンダー	0
ホームページ、Facebook	9
メールリスト	2
案内状をもらって	1
友人や知人から聞いて	12
その他	3
無回答	0
計	66

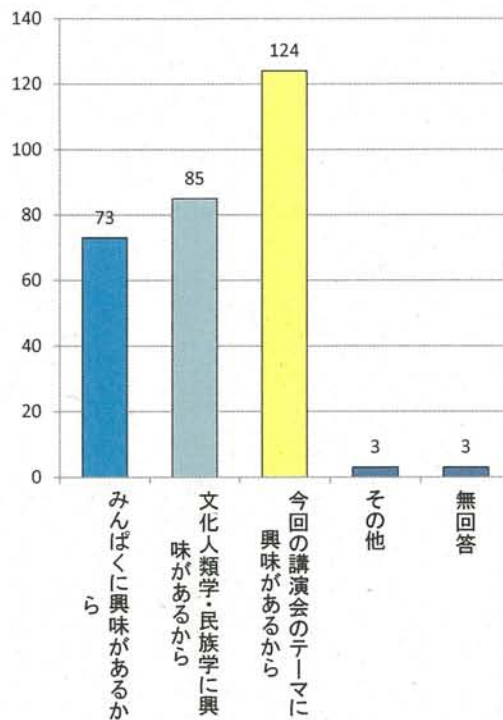
【参考】初参加者が講演会を何で知ったか



3. 今回参加された理由は(複数回答あり)

	(名)
みんなばくに興味があるから	73
文化人類学・民族学に興味があるから	85
今回の講演会のテーマに興味があるから	124
その他	3
無回答	3
計	288

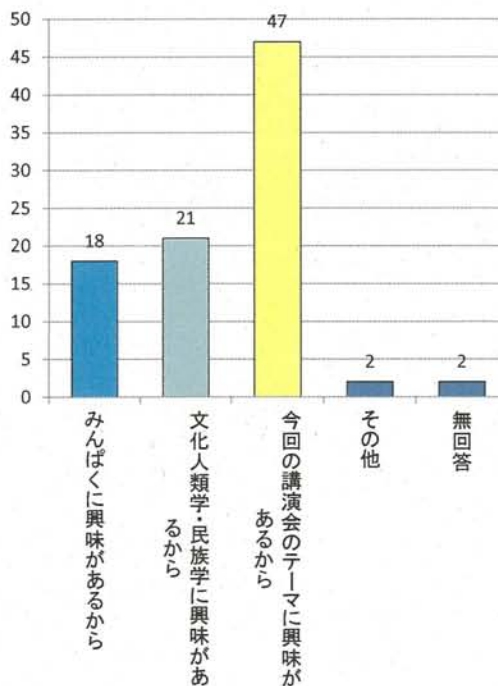
3. 参加理由



【参考】初参加者が参加した理由は(複数回答あり)

みんなばくに興味があるから	18
文化人類学・民族学に興味があるから	21
今回の講演会のテーマに興味があるから	47
その他	2
無回答	2
計	90

【参考】初参加者の理由

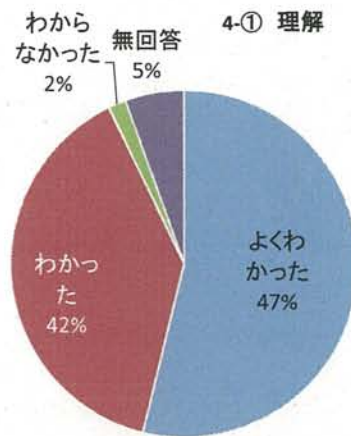


4. 今回の公開講演会の内容はどうでしたか。

(名)

①理解	よくわかった	98
	わかった	71
	わからなかった	3
	無回答	10
計		182

②興味	大変興味深かった	72
	興味深かった	80
	あまり興味をもてなかった	12
	無回答	18
計		182



(小数点第二位以下四捨五入)

①の理由(一部抜粋。重複意見は省略) ※感想のみの記載は質問9に移動

よくわかった、わかった理由

- ・内容を丁寧に話されていた。
- ・知らなかった事例を知れた。プロジェクトがわかりやすかった。
- ・裏の話、デメリット、本音があったのがよかった。もう少し深くてもよいのかな。
- ・他国事情がよくわかった。
- ・内容が素晴らしいです。
- ・日本では認められていないインドの代理母の制度について、新しい情報を得られた。
- ・パネルディスカッションは有意義でした。
- ・具体的な事例を詳しく解説していただいたのでよく判った。
- ・詳細事例を取り上げて丁寧に話されていました。
- ・みんなの活動内容が理解できた。
- ・事例に沿った話であり 分かりやすく話していただけた。
- ・旅に関するお話かと想像していました。
- ・内容がしぼられて理解しやすかった。
- ・お話を聞くと同時に目で見るのでよく判った。
- ・背景や構図が分かって表の像がよく見えた。
- ・パワーポイントが良く整理されていた。
- ・ツーリズムの話ではなく研究報告なので判った。
- ・小野先生 詳しい点を述べていた(問題点が分かった)。
- ・松尾先生 お話が上手でとてもわかりやすく拝聴しました。
- ・小野先生 題材が興味深くもって体験談なども聞きたかった。
- ・初めの方は言葉がはっきりしており論理明快でよく理解できました。後の方の介護居住については興味深いものがあります。「親孝行の国際分業」というお考えには納得しました。労賃は安くとも孝行の質は高いということでしょうか。
- ・松尾先生はよくまとめられていた説明フィルムとしっかりとした語り口できいてメモを取りながらもよく頭に入ってきました。小野先生は声の通りはともよいので説明文の可視化と練度、講演慣れをもう少し頑張っていたきたいです。緊張が伝わってきました(笑)
- ・むずかしい言葉がなく 一般的な言葉でお話して下さったので内容がよく判った。
- ・時間が短く まとめるのが大変だったでしょうが 良く整理されていた。

わからなかった理由

- ・オブラートに包んだメディカルツーリズム。報道の真偽 確かに厳しい。
- ・早口で理解しにくい面があった。

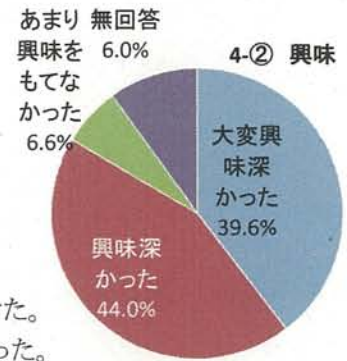
②の理由(一部抜粋。重複意見は省略) ※感想のみの記載は質問9に移動

大変興味深かった、興味深かった理由

- ・台湾・中国でしばらく滞在していたのでマレーシアでの事例と比較できた。
- ・海外での定住には以前から関心があったので。
- ・興味ある問題だったので役に立った、若い目で実感された点も良かったです。
- ・具体的にすることがない話を聞くことができありがとうございます。
- ・マレーシアには関心があり情報収集を常に心がけていたから。
- ・マレーシアについて具体的な金額のプレゼンであり非常に身近になり理解できた。
- ・日本の中で話題、問題提起されている内容なので、講演を聞いて理解が深まった。
- ・11年前から夫婦でマレーシアにロングステイした友人がおり、内容がよく判った。
- ・知人が退職後 タイで仕事をしていて 退職後にマレーシアか 南の島で過ごすという理由が明らかになった。
- ・なかなか知ることができない一面を掘り下げて来れて良かったです。前向きである。
- ・初めの方は言葉がはっきりしており論理明快でよく理解できました。後の方の介護居住については興味深いものがあります「親孝行の国際分業」というお考えには納得しました。労賃は安くとも孝行の質は高いということでしょうか。

あまり興味が持てなかった理由

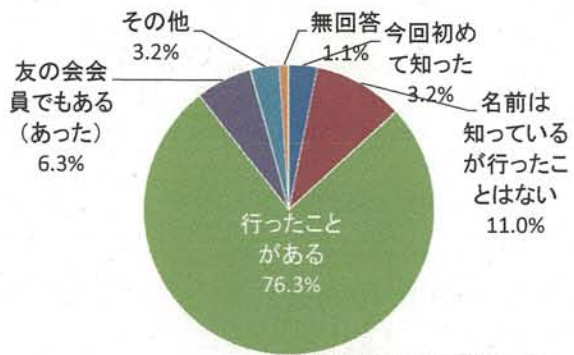
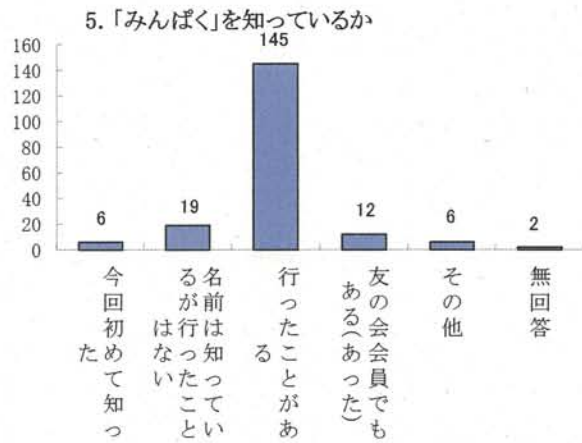
- ・ほとんど知っていることだった。目新しい話が無かったのが残念。
- ・自分の問題としての感化が客観的事実としての関心かどちらも中途半端であった。
- ・テーマのいやしからほど遠く期待と違った。



(小数点第二位以下四捨五)

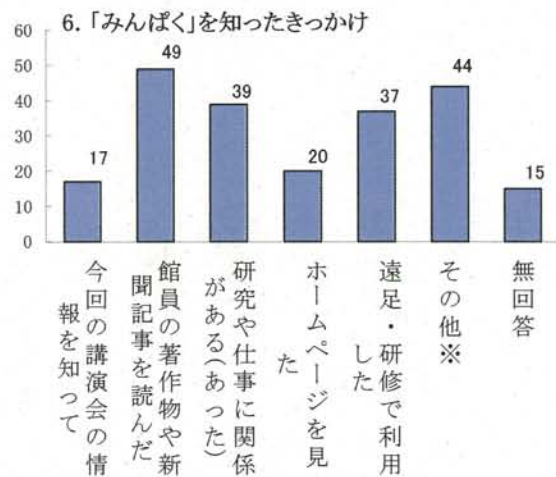
5. 国立民族学博物館(みんぱく)はご存知ですか(複数回答あり)。

	(名)
今回初めて知った	6
名前は知っているが行ったことはない	19
行ったことがある	145
友の会会員でもある(あった)	12
その他	6
無回答	2
計	190



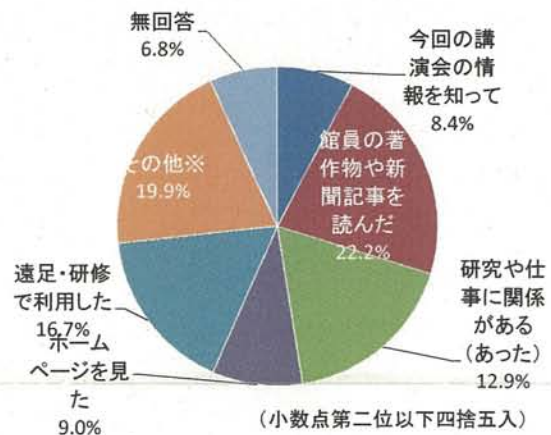
6. みんぱくを知ったきっかけは何ですか。(複数回答あり)

	(名)
今回の講演会の情報を知って	17
館員の著作物や新聞記事を読んだ	49
研究や仕事に関係がある(あった)	39
ホームページを見た	20
遠足・研修で利用した	37
その他※	44
無回答	15
計	221



※ その他

以前の講演会・シンポジウム等に参加して	6
家族からの紹介	2
訪問による	16
モノレールの広告	1
その他	3
無記入	16
計	44



7. 今後とりあげるテーマにご希望があればお聞かせ下さい。

【世界の国々について】

- ・アジアにおける労働情勢
- ・日本、アジア 世界の人々との民族性(文化も)を考えた共存(一致)
- ・万里の長城 シルクロード マチュピチュ
- ・アジアの性産業 特にタイの性産業
- ・中国・インドの高齢社会、介護の状況
- ・介護、看護、医療の出稼ぎ等アジア人の介護の状況
- ・「イスラム世界を理解するために・・・」という視点から取り上げてほしい
- ・イスラム文化について日本人の視点から見た常識と異文化性について
- ・介護してくれる他国の紹介
- ・イスラム教(IS)について イスラムはどうしてIS等を生み出していくのか
- ・アフリカの格差 その歴史
- ・ヨーロッパの民族状況
- ・各地域の宗教感の違い
- ・どうして宗教紛争が終らないのか

【世界の人々の生活】

- ・アジアの文化 生活
- ・アジアの女性 子どもたち
- ・民族文化 地域の慣習 風土について
- ・各地の民族音楽等の講演 民族楽器
- ・民族芸能 祭り
- ・スポーツを仲立ちとしたアジア各国の交流などを人類学的に分析するようなテーマ
- ・東欧民族音楽・舞踊
- ・原住民の生活
- ・異文化を理解できるテーマ
- ・言語学(世界の言語)に関するテーマ
- ・多民族国家における文化生活的の違い
- ・各地の伝統の食(住・衣)と現代への推移
- ・代理母の問題にもう一步踏み込んだテーマ
- ・民族と宗教について
- ・いろいろな儀式に用いられる仮面や衣装 装飾品について
- ・旅行と民族に関するテーマ

【日本について】

- ・日本の中の民族について
- ・日本と外国の関係
- ・日本の民族学的、文化人類学的テーマ

【その他】

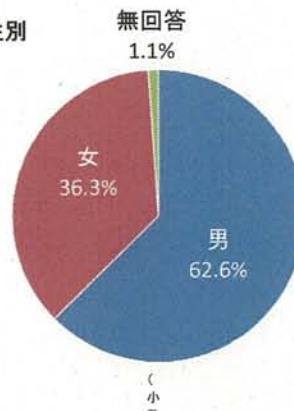
- ・昆虫食
- ・めん類の世界
- ・発酵食品の世界
- ・古代海洋学
- ・バックパッカーの若者たちの心理と文化探求心について
- ・安全な食 TPPのメリット
- ・子供の世界
- ・wifiなど電磁波の悪影響について
- ・言語の人類学
- ・比較文化論
- ・ヘイトスピーチにみられるような異文化憎悪の構造的解説
- ・ビジネスにおける異文化マネジメント
- ・テロリズム(宗教)など 暴力問題 緊張の課題
- ・長期滞在(中高年)が安心してできるように具体例(場所、費用、その他)が聞きたい。
- ・フィールド調査「生」の報告
- ・海外移住について
- ・人口減少過程の生活 文化 文明について
- ・いろいろなテーマの裏 デメリット 本音
- ・新しいメディア DVD BD などへの変換作業 ネットワーク(図書館・学校)など教育教材などの作業経過 活用方法

8. よろしければお答え願います。

8-1 性別 (名)

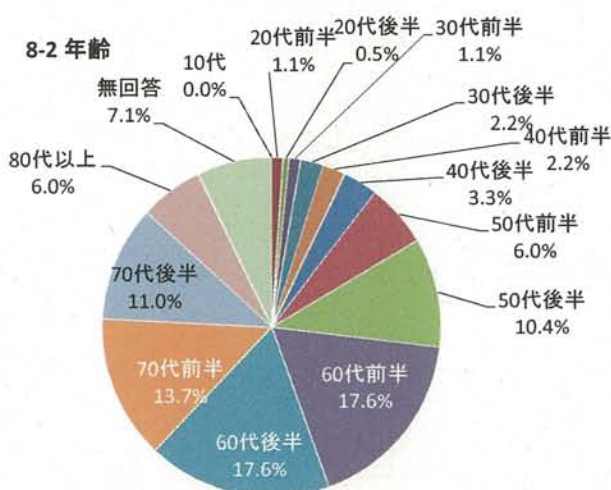
①性別	男	114
	女	66
	無回答	2
	計	182

8-1 性別



8-2 年齢 (名)

②年齢	10代	0	4.9%
	20代前半	2	
	20代後半	1	
	30代前半	2	
	30代後半	4	22.0%
	40代前半	4	
	40代後半	6	
	50代前半	11	
	50代後半	19	65.9%
	60代前半	32	
	60代後半	32	
	70代前半	25	
	70代後半	20	7.1%
	80代以上	11	
	無回答	13	
	計	182	

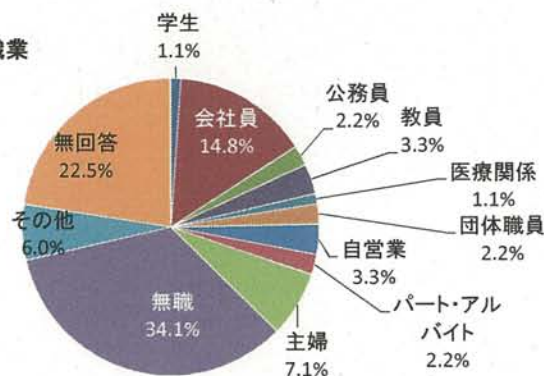


(小数点第二位以下四捨五入)

8-3 職業 (名)

③職業	学生	2
	会社員	27
	公務員	4
	教員	6
	医療関係	2
	団体職員	4
	自営業	6
	パート・アルバイト	4
	主婦	13
	無職	62
	その他	11
	無回答	41
	計	182

8-3 職業



(小数点第二位以下四捨五入)

9. その他ご感想、ご意見、ご希望をお書き願います。【一部抜粋】

【感想】

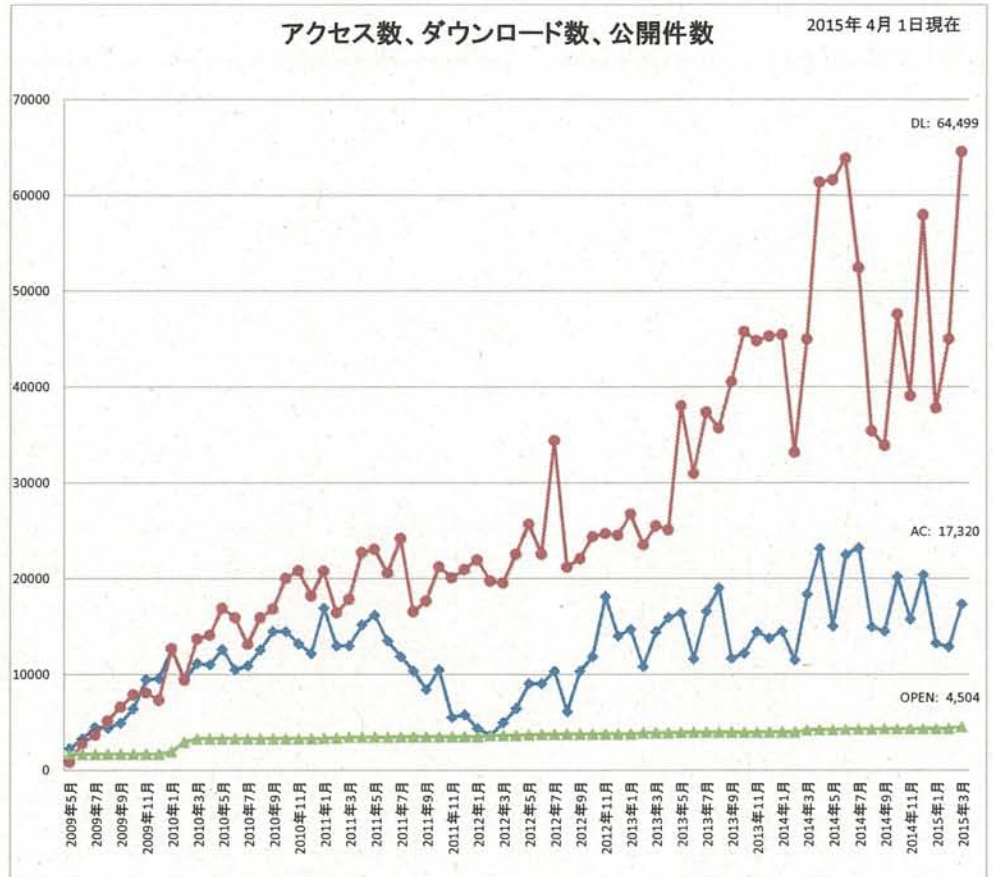
- ・ありがとうございました。また参加したいです。
- ・どちらの講演師も女性で有り 驚いた。深く研究されていて良かった。また、現地での生活費通貨を銀行等で調達できるのででしょうか。
- ・次回も楽しみにしています。
- ・実際の展示とみて感じるのも大切と思う。
- ・紙袋 ファイル他 立派なグッズでうれしいです。(費用 かさむのではと心配ですが)
- ・いろいろな先生方の研究内容が聞けて良かった。
- ・実に教養的でいい講演会だと思います。今後のますますの発展を祈ります。
- ・またいろいろな異文化について知ることができるイベント 講演会を開いてほしいです。また是非参加したいです。ありがとうございました。
- ・今回のような観光人類学の講演会を期待していたので大変興味深く拝聴致しました。
- ・内容の割に時間が長い。
- ・素晴らしい講演会を一般に向けて公開されていて大変ありがたいです。また参加させて頂きたいです。
- ・費用対効果の時代、大変とは存じますが体に気を付けて頑張ってください。
- ・本日は大変有意義な時を持つ幸に接し有難くお礼申し上げます。
- ・断片的な噂ばなしくらいの知識でしたが、本日より詳しくまた 大きな視点からの話を聞いた事がよかった。
- ・長期ホームステイをしてみたいと考えていたので参考になった。
- ・メディカルツーリズムの内容現状がわかって知識を得られてよかった。
- ・初めての話で実情をある程度知れた。
- ・時間が短く 裏の話をもっと聞きたかった。
- ・不妊治療、代理出産がインドで商品として扱われていることを知った。驚いた。
- ・ここ数年前よりアジア長期ステイ？永住権をもち生活していることを聞きました。ロングステイ財団、話を聞いたが 私は富裕層が多いと思いました。
- ・テーマがとても面白いのですが、表面的な事柄に終始して あまり掘り下がらなかったのではないかと思います。社会における文化の違いを原因とするリアルな問題点までに触れてもらいたかったです。
- ・インド伝統医療ツーリズムの内容をもう少し深く掘り下げて欲しかったです。(専門違いとは思いますが)
- ・「親孝行の国際分業」という新しいコンセプトがあった。マレーシアの介護資格制度がどうなのか気になる。
- ・もうすこし突っ込んで聞きたかった。何故インドか？ リスクについて聞きたかった。
- ・講演者の説明がそれぞれよく準備されていたとおもう
- ・代理出産について分かりやすく話され驚くともによく理解できた
- ・深く切り込み 具体的に理解した DATA集めは大変であったと思う。頑張ってください。
- ・マレーシアでのロングステイ、自分でも調べてみようという気持ちになった
- ・日本でも医療ツーリズムの受け入れが始まろうとしているので受入国側で生じている文化現象について興味深かった。
- ・人生の最期が海外というのも選択肢にあるんですね。ありがとうございました。
- ・ウラと表とあったので、批判的検証も聞けると思っていたがその部分は少なかった。
- ・日本の少子高齢化の進展が医療制度(医療法制も含めて)の持つ欠陥(未整備)による対策を考える材料を与えていただいた。
- ・日本より医療が進んでいるのではないかと思い知った。もっと外に目を向けなければならないと思った。
- ・漠然とした情報はあっても現地でフィールドワークを元にした最先の情報と具体性のある講演を聞く機会はありませんので大変参考になりました。
- ・ライフスタイルの国境がなくなっていること 日本の病院で働いている東南アジアの人々が新しいライフスタイルを作り出すきっかけがあるのかもしれない。

【その他要望】

- ・17時の開演にしてほしい。
- ・若い研究員をもっと表に出してください。
- ・質疑応答の時間(客席との)をたっぷりとってほしい。
- ・みんなく講堂のように小さなテーブルのあるホールで行ってほしい。
- ・毎年 平日(金)の夜の開催ですが仕事のあるものでは開始時間がもう少し遅く 土日の開催を検討してほしい。

資料13 学術情報リポジトリ

年月	AC	DL	OPEN
2015年3月	17320	64499	4504
2015年2月	12839	44960	4318
2015年1月	13229	37730	4310
2014年12月	20353	57901	4305
2014年11月	15740	39015	4288
2014年10月	20170	47544	4287
2014年9月	14491	33829	4279
2014年8月	14901	35338	4270
2014年7月	23172	52403	4266
2014年6月	22487	63805	4251
2014年5月	15016	61546	4198
2014年4月	23120	61314	4182
2014年3月	18307	44923	4158
2014年2月	11464	33104	3940
2014年1月	14455	45402	3939
2013年12月	13726	45210	3938
2013年11月	14419	44746	3938
2013年10月	12162	45679	3918
2013年9月	11626	40499	3918
2013年8月	18983	35622	3918
2013年7月	16557	37279	3916
2013年6月	11580	30895	3915
2013年5月	16398	37966	3899
2013年4月	15888	25020	3870
2013年3月	14416	25430	3852
2013年2月	10787	23454	3851
2013年1月	14664	26668	3728
2012年12月	13965	24452	3728
2012年11月	18095	24631	3728
2012年10月	11820	24300	3724
2012年9月	10292	22012	3724
2012年8月	6085	21126	3712
2012年7月	10296	34330	3711
2012年6月	8993	22479	3697
2012年5月	9003	25598	3666
2012年4月	6397	22485	3605
2012年3月	4942	19472	3598
2012年2月	3573	19659	3592
2012年1月	4321	21889	3475
2011年12月	5750	20886	3460
2011年11月	5473	20024	3459
2011年10月	10455	21151	3459
2011年9月	8391	17598	3459
2011年8月	10339	16492	3459
2011年7月	11823	24127	3459
2011年6月	13472	20518	3420
2011年5月	16150	23001	3420
2011年4月	15152	22664	3420
2011年3月	12963	17770	3420
2011年2月	12968	16377	3330
2011年1月	16895	20728	3330
2010年12月	12168	18158	3270
2010年11月	13148	20784	3270
2010年10月	14444	19983	3270
2010年9月	14484	16766	3270
2010年8月	12554	15856	3270
2010年7月	10902	13084	3270
2010年6月	10471	15869	3270
2010年5月	12595	16854	3270
2010年4月	11009	14047	3270
2010年3月	11137	13646	3270
2010年2月	9416	9336	2920
2010年1月	12587	12623	1920
2009年12月	9533	7250	1650
2009年11月	9430	8039	1650
2009年10月	6380	7810	1650
2009年9月	4885	6535	1650
2009年8月	4356	5077	1650
2009年7月	4458	3628	1650
2009年6月	3267	2709	1650
2009年5月	2226	801	1650



III 平成 26 年度研究戦略センター・スタッフリスト

■平成 26 年度研究戦略センター・スタッフリスト

塚田 誠之 [つかだ しげゆき] センター長・教授

岸上 伸啓 [きしがみ のぶひろ] 教授

關 雄二 [せき ゆうじ] 教授

鈴木 七美 [すずき ななみ] 教授

平井 京之介 [ひらい きょうのすけ] 教授

樫永 真佐夫 [かしなが まさお] 准教授

丹羽 典生 [にわ のりお] 准教授

三尾 稔 [みお みのる] 准教授

伊藤 敦規 [いとう あつのり] 助教

河合 洋尚 [かわい ひろなお] 助教

菅瀬 晶子 [すがせ あきこ] 助教

加賀谷 真梨 [かがや まり] 機関研究員

山本 睦 [やまもと あつし] 機関研究員